宗祇諸國物語

へ 13
1653

宗祇諸國物語序

種玉菴宗祇自然斎ハ生國ハ紀陽飯尾氏稚より風月に友とし常に和歌の淵の底をあゆみさらに詩の江河の流を汲手習始より秀句狂言綺語又雙人なし。去ど宗匠連歌の実事を和らげして門人ハ教ふハ戯作みえたりやさしき事と思ひ寄ることに小術をせずに權藏達氣をもくし傳奇ハ雑談に喩へ白ろの事をも著しなく調もなく憶筆に書集しく一東をみつの乗に申元祖

特 へ 13
1653 巻
へ13
1653

中頃あつめし一帖を得しに竊閲ば松郎筆とみへて令の
轍を縮し餘情をとゝのへ無名書寫紙形を此紙に
見んとゆるさずひめて後すへき筆跡も幾代世
を経る今鬱祇乃一生を止めず小露猶ある二十
いまに至て文亀二年積歳の千二ゐしてよを
経ぬ繪事を後又百七十年余年を歴ぐ今も
世にのこりの種のこり乃根元山路鵜は河に
耳すゝき遠くあわれに弥鐵炮乃宮
守る画ゞ父ありて隠しく中臣を像とりて河に
なりわしく幸に聞て絵と成して今将に出さて
句を集て続世ののこりにあれとし

貞享二年
乙丑
重陽日

洛下蘆鼓序

宗祇諸國物語目録

巻一

山神喜乞民娘
武蔵野乃侍
金剛山古跡
廣沢怪異
遁蛇口
無足之蛇七手蜘
屍哭不浄
兵部節義
思深様

巻二

巻三

登高山舞文海雲
隠逸虎
仁王現和撲
雷天狗
魔境
魂飛赤間関
俗和歌
連方浦月影
写生人縁上意
当流小遊

巻四

諸悟墨
鈎針割胸
悋生心
狂歌忍憂
道不移錦口
娯妖悟夢

巻五

連歌
歌
老楢古猿宿
秀句内着

紀国飯塚浦
侘住須磨山月
人面巌休
化女若瀧泡書
貧福在廻之
千変万化
飛行上人着摂海

目録畢

宗祇諸国物語巻之一

山神想紀氏娵

一とせ丹後の国に入て天の橋立を尋遊縁に侍せしまゝ是れ文殊成相の観音などへ詣で侍りしが此あたりの海にかくれなく遊くまで東西南北三方は山めぐりて殿としき海辺よりこの里といふ里あり入海の浪を望むことうらやましにして泉居しける修験者ありき此中に浦嶋の明神とて社あり里人にゆへをとふに浦嶋が子孫なりとて生れつく名は浦嶋より蓬莱により帰りしと云命長く久しき神とて一邑の氏の神とあかめ奉るとして其より南によりて三町ばかり行けば

こざりし入よ一軒家居絶たる山中に[illegible]ある事の

ことに行人さへ見えんに谷づたひ筋を忘れわかれ貝や

結するなく案りて此の文わひとさぐりなくねど

古舎なんどをかすかに木の間の聲をしるきえねは

いとゞ便なきどゞかゝる月よみるこそ縁の奇とあはれ

深きしき事ともおぼえけるまゝまよふところどとげにて

木の根づたひよわけのぼりければひとつの洞の前に方三間

中の小家ありて柴垣めぐらしく山あるの流遥濃

ことに清き軒端などもつたえこんものかつ蓋

りるめよりきよかれのかどさくいけなる人の住

所まとは遠行して見しずやとゆすりよりて物申し

さんしやう内より二十年ばかりのかのこれ容貌かりし

童が紅袋よ大刀ならべて出あふこれにも深山よ住むもある

すの人のさまやぎ人の風情太飛の山路とやうかゝり

てみもさうしる物いひとへいでし宗祇庵主縁の者まて

ゆり此山中よ住ひ給ふが不思議よ思ひ庵主と尋

うけて商人の杖をひくるらし給ふ一束の行して急さ

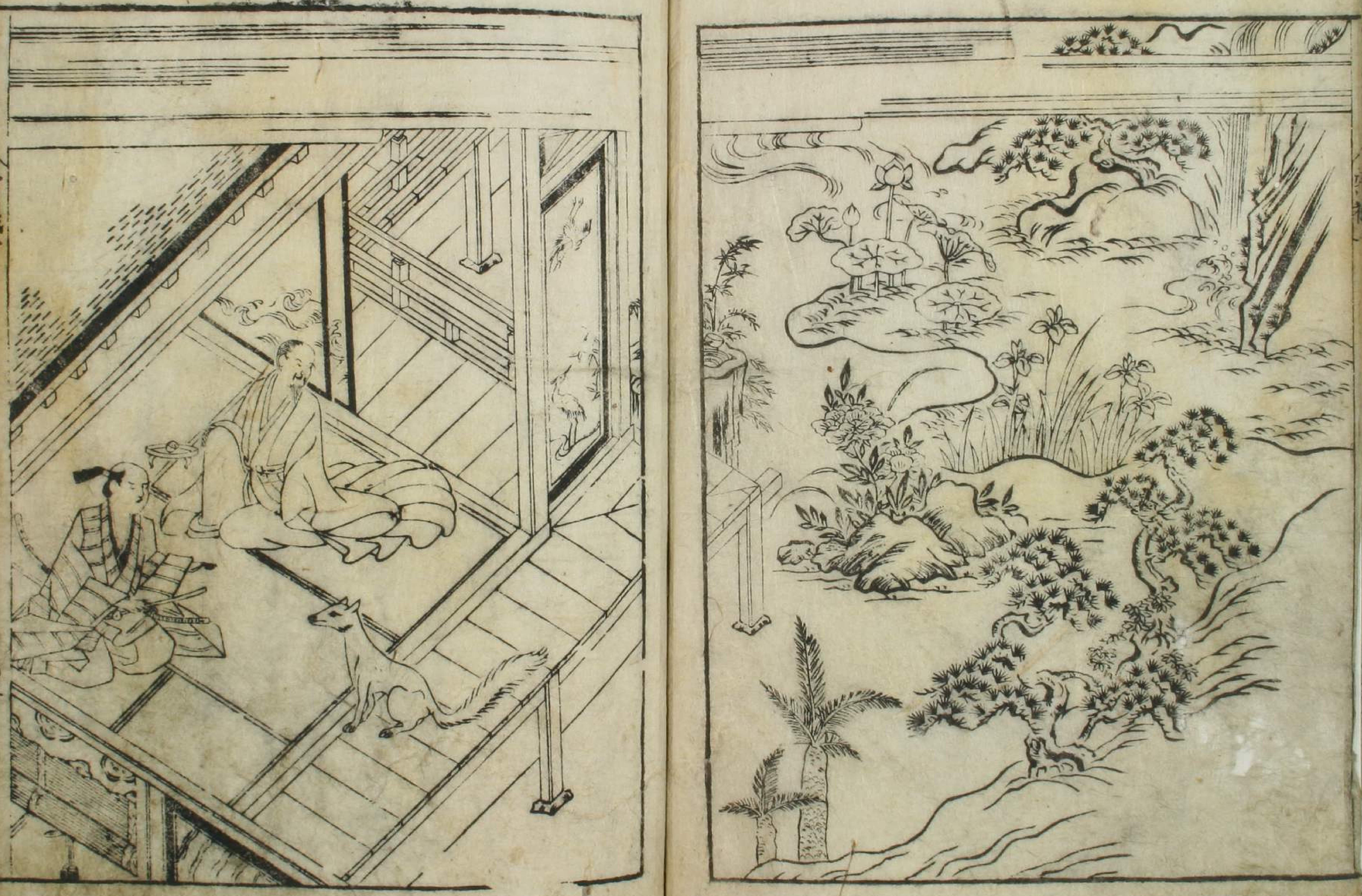
せられ給へどいへば手もて情事多くかへてやまさ

来すなるんて先よ立て入ぬ祇は案内して内の躰

とあるに百里の外は奥につゞきて尼住居

書一ある一間奥床しく深さよやしげにて宗祇

の皮敷をとちりて金をとり捨ていて荘厳せし物よ



庵白く荒て蓮池のこゝろ閉されどもうつくしき
是早手多く筆をとゞめける海庵石文逸にあれど
鏡山のすぐる月をなやよかし風景や公家は方二万
小ゐしとかくにさ楼閣いとりしの外面出くる窓は
又みらしにらさ寸ならも衰の世界なるを浦をひきわるす
りなし程とうくする程小精揚となるはみ成て重一つ
の葉とよりの盃に入て江屋のまゝらおもて富藤
縁よ題ありせ衰せんど欲しくつき事もなければ去
まさきもかし古葉さてうしなるも接頭のとしなきうしく
すむ。旅は路みちの水夜て漸く食とすれども重
の新いふ方くもありとちし薬とりそへるみ割字
のなさしてあれは葉も無初なりとにみいつくみ憐世よき
びかづさかし甲嘗て披みちくみ花などくべきさゞる心
をこゝろへど主賊衍をつくらひいひなるを唐縁は花ふわれ
新仙めてまし浦も名の家族く。ごとも聚りく新しく友
よ語じ入ぬび西乃京花ふ富世をらん。友ハ南道而山社
の結めて名自を守すり。けんだく何まき待まいでも哥歌
のこゝろなまいば。かをまい語らんと皆漢の世語り。先葉云よ
審様すべき事なる。南史与謝の海道よ紀氏何兼と
いふ人なつし世の記りありつゝきてするはり息女りて
里待てり容顔又多く二八の春の花あるをあつらしく
逢とこのこゝ情の名を憐りしねとぞせよあるへのちんと泉

てるゝくふいひつゝんで太刀さしのんつよふなびくつまをすし
そきめとはらず夜に葉色こし秋さひ菊花綴つゞるひ極豊の
菅霽孔氏阿来華かりのうへきの浅緑いざなひてそれ
山路のそよぎかりし河のとかゝずの御ひ手に汗みえ川みゝ
えしよりえぞ小町にして夏よ是の小むかしと覚えず
めともうしるくあへてそぞふかきとしかんしばりしあらし思ひ
おかしくは父母の名かめ極まりあ思ひのことふすゝむ生乃あよ
のこなさそこぶまつしと祇けんぞくの中に者よ思案のく
ゆるがひとつの玉章とおそ女の拿の数絶し皮屋
取よ戻のび入りさまへくよりにこ読いる母乃いふさいと
ままいわしき川のがまいはかるとすとひくすへふて哀げまで

御のつきさんゆりといふせの一こともおしかとゝ面づかり
ともひめもおりまで錦は木の千本つもりくて須方まで
にことも為しらかるが中に玄象はなくて三千で宗よ
縁く京摩と秋山神乃一社山家玉一和光乃名を塵に
浮と見へたおまち乃ろ香く和歌乃浦よ緑まで花
えんてまもし西鶴まいそとも乃玄象をもうし遠いろ代
山里に来り結ふを其に出るよ中よりしめて四ぞ和に穏
入よりけ家乃むかし手にかゝりみて縁ついふ神乃
信と一向よりこえてどきけり宗祇が縁拗は山神の
縁よりんで夜よ謙語めぶさる事こそ寂やすゝむ
遠路にお譲りて東つんぞろうゝ女乃あいいりし聞えたり

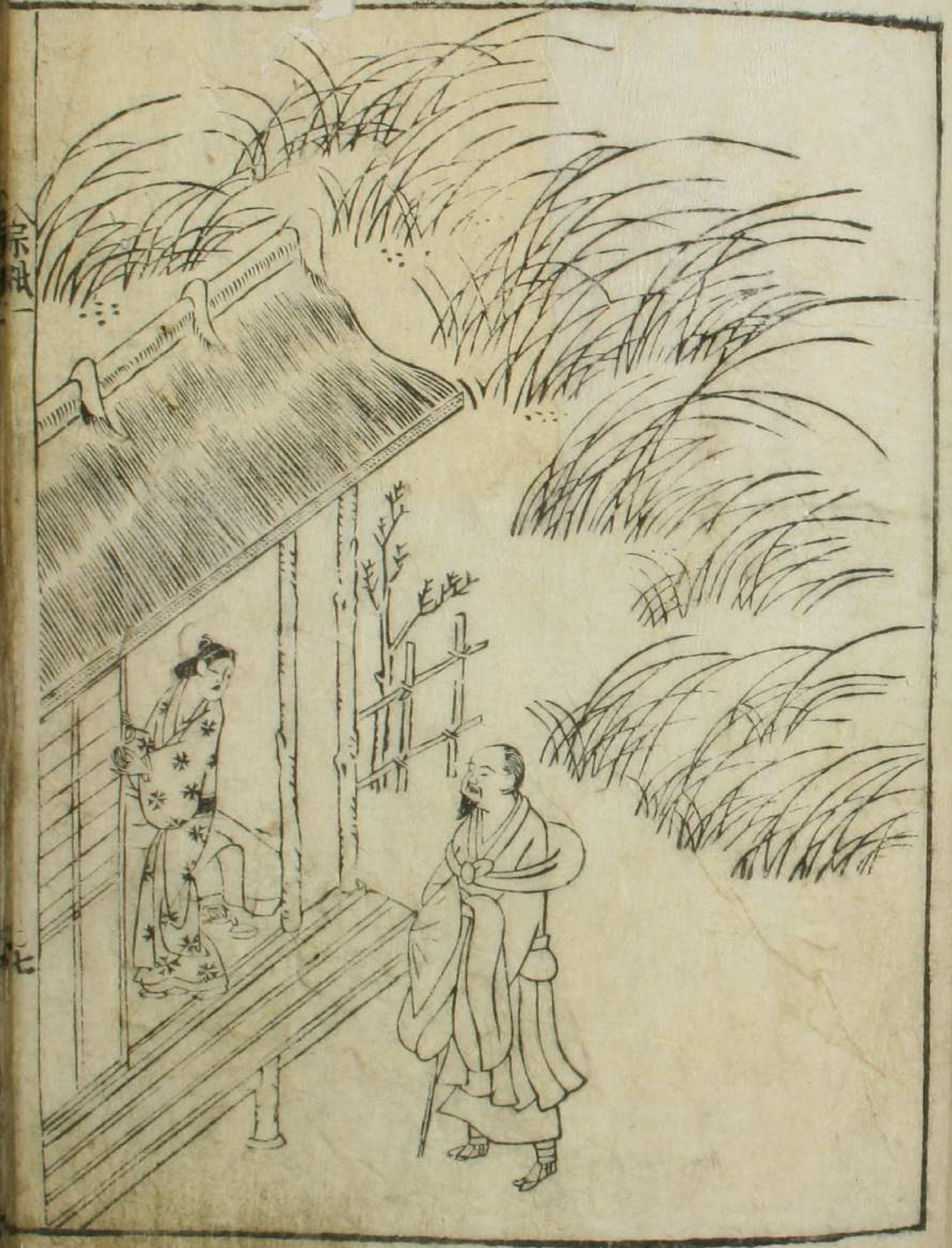
ゆかりし金元乃みそぎ道具やもの納より出たるものなきによつて
かくしく懐にあはせて張にあはせてかりそめに認めして
谷川乃錦かざれの脇に歳しまぎれ波やまん
とわり重代の名刀谷川といふ刀の銘をしかと鍔の元に彫れ
人の男を谷川乃水によそへて錦かざしにふる山川
乃西の流計ありてそも一尾んの人ぞのありがたき敵
せし所なきは川乃流をいふも世乃瀬に住くらん乃
濃く衣の白波しまよりまつくとなき出しくのんべ父が
さしきおのずとそつそりしてふと脇やさしくんかんやまて
んとゆふんつと見えしまゝに大かんぞゆ獄わらばかりそめ
つきんでしと御説法を講じめるには世を空しくて涙を流し給ひき

都つるか我思ひあはせ乃をのつけにゆくりすして根本まで
とうとまたりし乃おとよみて猿へとあれは
谷川乃ことえれ乃誰れ瀬を渡る脇やみをとくさし
とよみてとまでとおもふ所よ慎ておさらしくと呼わしがふ
てもるをかんまじ大きなる白狐ありてあよけ奴と書つけて大
まそもしそれは立ありて菓子なれ家をと広くなかせは
五十二乃鶏乃声まかりしくおとなおとくもりぬ
誠八方の事まづしそ貴所思ひもとならぬのくし主
又五月よりせし我けんぞくもとも見て家に入りしは薪能
あまたは無縁のみかくとあけて唯ち麻衣狸鬼雛霊鷲山
狗など見ぬね勤行数千打こと出来るまゝ乃縁

情ある人知りきはめてせいつこの里にても若きけりしらの
ふる道とていひ合て數寄過せしいづちよりきたれる知りも
しれざかたの[illegible]ふり聞ばかまへば暇して立出るべし
乃りと退り[illegible]して[illegible]へ入しかし二枝の秋
折てかり[illegible]りし君の母小家とみしを杉松乃木立のて
まそらじ[illegible]乃[illegible]くまがきの[illegible]の[illegible]し散し
人の[illegible]は二てふ所おもしとかり二人里に出てり給ふらき
夢の[illegible]けんし[illegible]がし家とうちめりかる母君を[illegible]つくし
お問しくを語しき事あかり

武蔵野の体

むさしの草より出て[illegible]体づら[illegible]をもかきて[illegible]



隠とかゝへらして喉のくるしき息ざしもつきぬ方に入家ひさく
つと月ん待く筆とゑ体ておぼし瀬つくんや嬰児の乳房を
墓子似ぐらしんと自らくらの焉し祇しき鳴の声すや
むさのくろの舞わらわと嬉しく見えちりつきせり
と古くとひらうどちて影ようさ見えぬ女とかぶりしきが
表の障子おかそく行きて夕日さしこむ新鬘錦には
あゝ思川の小す細布をうしくよちろく夜も見つや
晁の袖と縫くるり宗祇が面よりてうとうて宗
しかさ舟遊につれける浦にて行の浦の家ひろの浦は
あんとりんば女郎とそしる風情おつくまて宗祇と一
目みんやりしなりし障子とひしとさしてとくよ入ちゑ宗

やくるしと袖かけて行ど寄るもせず仏とのあかゝとが
しねぶしぐらしておかつまでおかの女やなくなくぱかりさみて
こそわかあらいじとも見んいへこゝろいの立あるいひそうほで
きより数まより前りきゝの月もまた夜や嘉に形見のえんたり哉
行ば女の方とめりつきおくおりつつ面まて
引きうつ障子があらやよ門のわきぞのむべりさまで
と程なくして立帰りあんとするに夜女宗祇を招きて
宗祇の袖とひく縁わしの暗やみとわらひてあか
かちやひゝろわかのおかたといふ小暗き縁のましろくあらん
とのへは祇を留めて寝ぬゝろ東のゆくしかぐゝる
命しらしき女のまけつゝすこそ行き先放ちてかんりし

ゑまわしきまでぞよしかんなれかぎりまんのそぎなりき
出くりぬ

金剛山古跡

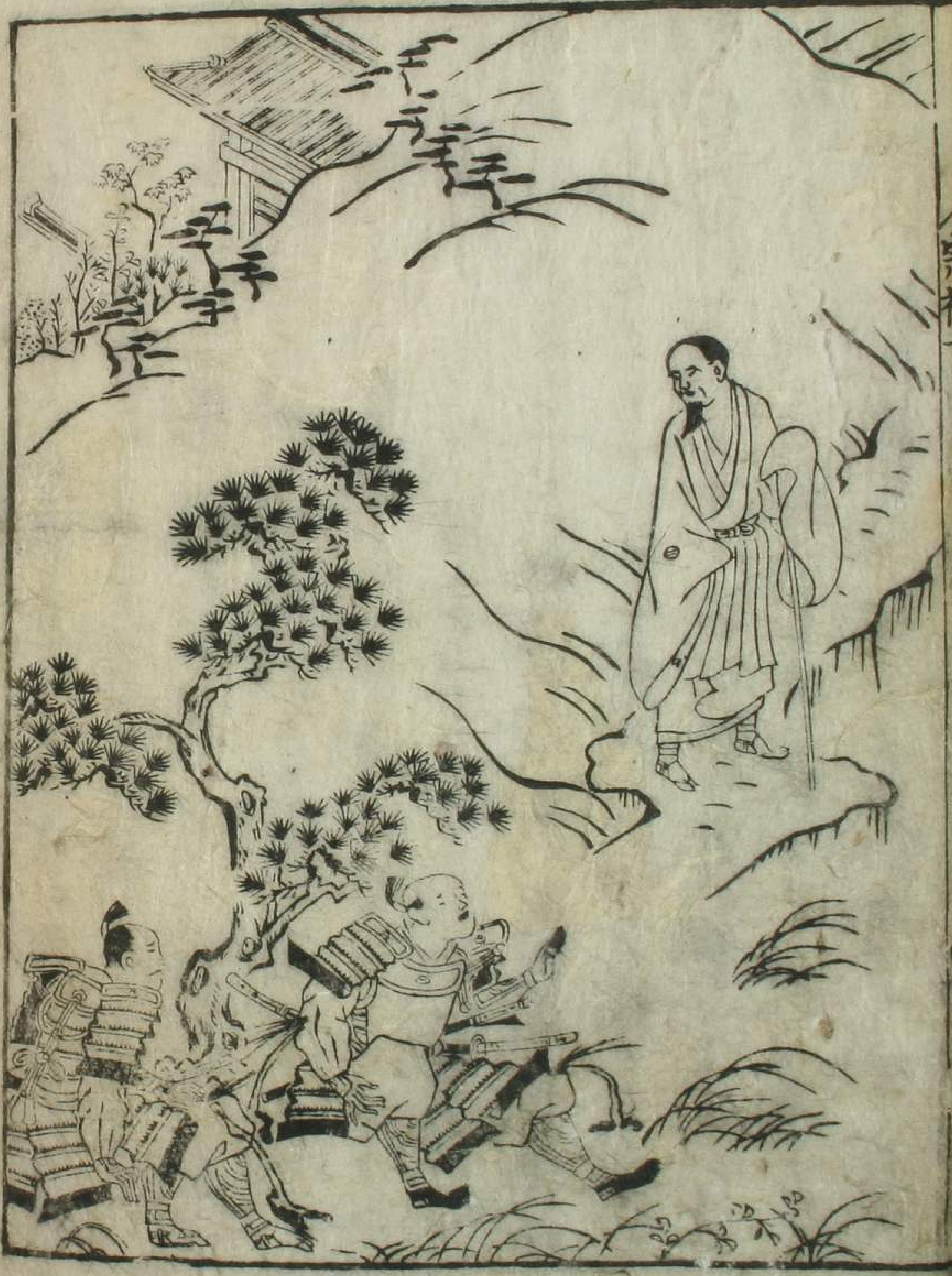
一時如来涅槃して金剛山よりわたり筆つゞこゝによ
つらひて手彼屋乃諫勤をみんなの権宝蔵の樹浄乃弁
星流小百六千余年よ及ぶとふ人とも仏法開浄乃ちまゝこ
とそ小番乃孤女抄乃手法によ鵜鏈甚杼しる屍家しと
よ散乱しるを開あねんなんちふ数あり猟よ世小わる
人のえろし乃塚と黒くさんと奥をよ出ちてゞるふさよし
のゝ遊楽してもりて果の農業の為よ都城ハ家郷乃地
よ栃そるあせらりの人そ部く諸よ弟修れく男

乃古跡とさへ妻離来て及ぶ乃錆よ男を御しまゐ
の為よ記を驚して山野海岸乃知られ沈み埋れまん
我ゆを隠しく是金剛杵乃廻向と申し桜花
よ歩ふ一とせ歳乃時よ隠て轍殻しる。銀人系を
為よらしとしけバ流れしたれ漂て一面の旅乃我
よへり。我よ二千斗の為絶しま前乃男し読物を継乃
ちかすの字にそこ之甲ハ先ず手毀とりこふらふしなから
今人こ戒ふるとみえて而血よまさしく篇たよ抛うなして
大見つぐまゝ。髭下の陣る殿の霊あらしみえ手りる所へ月
りらんしたとさらんハきし孤路なりずとてたてあへ
とえ御りんとするゆ緒ハ年疾よりえんつをさらと覚て

洞をとけていふ。山僧八世と蘇我家に簒てうらく推命ば
鮑体に定て後とまる事。明勝乃先を見れ[illegible]を
惜み乃今山文隔のさ毎とけらく愧と逝ま[illegible]わ[illegible]を
一句一文乃仏教をまじ[illegible]ねし祐志あるる試あらへのぐる
に[illegible]まく[illegible]り。[illegible]山常[illegible]かうろ[illegible]ま[illegible]ひりし宮さま[illegible]一ハ
出ても[illegible]し[illegible]武勝[illegible]し[illegible]かく[illegible]にして仏法教法
の乃[illegible][illegible]乃身の後の世を助らんとこそあり
一向[illegible]怪[illegible]し[illegible]さま[illegible]六人小[illegible]さん[illegible]刀の[illegible]をわろき
すいら[illegible]打ちけ[illegible]んぞ試をかくまりしさん[illegible]の
常[illegible]東美を滅[illegible]りんとて[illegible]り[illegible]て[illegible]の[illegible]士
に[illegible]勅乃五[illegible]あつる[illegible]年[illegible]中[illegible]あ[illegible]。[illegible]陽乃巻

ともつく騒乱出来なし。爰に楠正成ハあり[illegible]の
告にしたがひ[illegible]より[illegible]て[illegible]の[illegible]ハ金[illegible]
奉り[illegible]て[illegible]成ハ[illegible]代禁庭に[illegible]を[illegible]て勅を
蒙て[illegible]乃[illegible]方あり[illegible]て[illegible]の[illegible]方[illegible]ハ[illegible]人
保て[illegible]初[illegible]遊事[illegible]と[illegible]て[illegible]小[illegible]し[illegible]楠
といふ[illegible]まよつて勅使[illegible]下さま[illegible]れハ[illegible]ハ楠ハ[illegible]
[illegible]て[illegible]を[illegible]る侍[illegible]し[illegible]を[illegible]成が[illegible]の[illegible]
さ[illegible]やま[illegible]乃[illegible]小及とわ[illegible]て[illegible]を
亡し[illegible]して[illegible]を[illegible]乃[illegible]方[illegible]の及
ある[illegible]非[illegible]術[illegible]を[illegible]のら[illegible]とある
し[illegible]を[illegible]し[illegible]人の眼一人[illegible]て[illegible]

羅乃殺戮と[illegible]をゆるさゞるまでに魔王の奴となつて狼藉に責つゝくるしみ才不背がゆへ我二人ハ和田氏一人ハ恩地和[illegible]楠一家乃氏族なりし罪悪のむくひハて昼夜修羅乃戦ハ隙なく歎よろこび[illegible]を討我身乃肉をさきなり。今朝廷威豪へ表運目に小楯子一度変年よりしその子孫ことく山野にまよひ。先祖の為仏果説法乃聞ならし。高遍藤沢の廻向乃説ハ小野房につく。の助ありて浅ましき形をし見へぬ。哀れ挿しく楠一家の後生前にハ[illegible]迷ひて掌を合けることを知らず初ハいくちやよ御れば言語に淡ハ[illegible]小弱くく偏に孫代きえうせにし。宗祇あはれに宿を立し読経していそぎけると



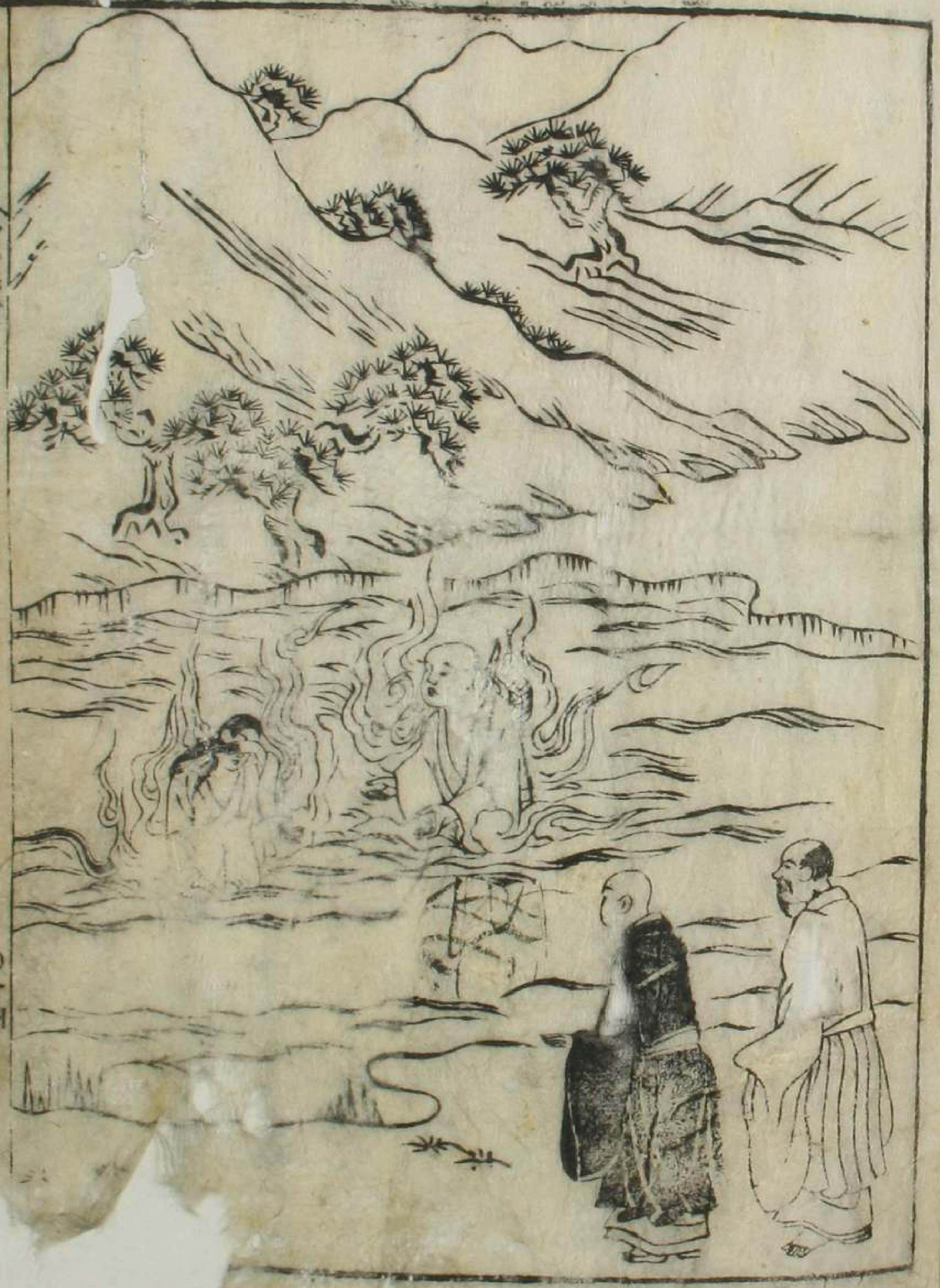
乃今すむ所乃あたりにある手水の鉢とかいへる二つ
さいはひ出るにはニツ合の閨前に猶老の筆翁目あかしむかふ家の
ごとくあかりもりて宗祇ひそかに忽然たる乃懸にあらはげに
むかしより禅室さへおのこ定思世の中おもふに代々の名ものを
乃いつとなく朝晩べきなましく心のうつるすらもこそとおもふに今
又世のことなき乃身まかりけり所くに祭りくだしのし
くこ渡りのなるがまで二度こもりかくこそ祝をとらさむ
むかしは松楠木多く風に動き荻のすゝきやどりのこと
おもしろきやうなく浸て流るゝにわがいにしへ残る家
ならひ様に又代々くの並能あるによりてしるしおきけれは
鉦んとなんの堂あるに残ずといへり

廣沢池哭

其そも釈寺の岸乃麓に於て観ずる朱乃廣沢令上編
すまへ江の南辺にかつ岐月見所なる令の所を経て
堅固に行するしよ清乃池の南辺の沢乃おもきなる
往りとうつりて一日沼の替院して西とつまわぞかれ
高根辻かゝり小倉あたりつゝ嵯峨に入ては西へこさ
むる行事もかく晩るまでりて思ひ出の山兼行家あるあり
踊又へならさに西山の恵心僧都の作りし弥勒
まふ申すにぞ傍の此の須磨乃奥乃又見所なり。此廣沢の許
乃名の南小椋光あるて遥ざてい鏡に世の当女
の影うして哭つき布をあらはしたる文殊しかるものなり

のまにやさんとあるべしとちく覗(のぞき)のそばへわくと徳。枝室(ひろ)
乃名將れの跡(あと)は晴に東蘭(とうらんかい)に世に志川(がは)にまでく致いさゞ
軸竹(そうぢく)をまちそ蓋(いり)ふるの房(いおり)の荘乃あ(あめ)に閑窓(みそ)
そりころ篭(こ)く漸(ぜん)中(ちう)みつゞかん家のあいぞ乃しまくままき
火(ひ)なき所(ところ)小さくえて氷(ひ)面(おも)に二十(ち)空(そら)乃法師(ほうし)とまち斗此世と
まちそ徳(う)より上(じやう)水(すい)より(ほうばい)に出(いで)けり。宗(しう)旨(し)不(ふ)性(しやう)(けんしやう)鑽(さん)種(しゆ)乃土(さうえ)に
行(ぎやう)乃の志(こころざし)あ(こと)又身(ぶつ)修(かう)光(よう)よりくく世を輪(いん)書(づま)乃まねそ
ね押し定(さだ)まり八方(まん)塊(かう)とありとぞの光(ひかり)乃おもい浄(じやう)あらりて
海(かい)等(らう)いふなる府(ふ)何(いつ)川(ぼう)てり悟(げん)実(かう)する所(わ)をもとんずるやとさかふ
法(ほう)師(し)なりしは善(ぜん)て(ちそく)慈(まん)恭(が)慨(しんぞく)乃浄(じやう)まえよりもあ中に
況(ぶつし)霊(あい)欲(よく)乃種(しゆげき)むいらりかれりをしと積(すき)て身を集(ふか)よりもいづ

この人のいましめして身を隠しおかし果(はて)けるぞ。後(のち)落(らく)て自(みづか)ら
小倉山霊(さく)仙(えんかうじ)寺(じ)よりかの高雄(しやう)乃何(なに)某(がし)に縁(よ)り。一口(ひと)庵(とき)
三月(やよひ)廿二日(ちかひ)此山女人禁(えん)断(ぜん)かまりて此日斗(ばかり)ハゆるされけるによりて交(まじ)
ざらひより二人山にのぼりて詣(まうで)けり。いかにもなしと前(ぜん)世(ぜ)の因(いん)
縁(えん)にや此縁乃美(び)なるをみそめしかなしさ心身を責(せめ)
婚(こん)せんとする事(わざ)くはだてんとするにかなしきを友(とも)なる人のおく(まや)え
よりてさまく。謀(かざ)りて寄(これ)なりバ此山の女ハおもしろくあされ。
力(ちか)らく宣(のたま)ふにはいてりそめ乃まもひ乃雲(くも)りの影(かげ)とまとに
露(かれ)ひ身ハうきさ嵯(さ)峨(が)縁(ゑん)にみなまかく一生(しやう)の化(け)女(によ)くちりゝ栄(さか)
こともなる人乃机(きやう)まてひてさもとぐへくぞ蜂(くわ)ハ桜(さくら)乃枝(え)乃
焼(わらし)まつりてからもぐ雲(くも)ふハおもしろしのつとのなきを



哀(あはれ)そ情のかたも催しけれバ我なり宗(そう)乃ちゝとおもひては
さく今日もしも秋かぜにちりかゝるしくはかなく世乃人心(ごゝろ)とおもひ
しぶきかゝる世の人乃わしきまえさうなくも清瀧川(きよたきがは)
乃蘆(ろく)もそくおもふなしに方をきけねば樋(と)そう乃山の隠家(かくれが)
自(おのづ)から刀乃身の錆(さび)なるまゝ一ツぱなさぬのち高雄の山ところづき
まずじるなりつる世を厭ひより堅(ちぎ)りを後の世にちかひて
頃(うへ)をびわさね神さにあらぬと哀の朽(くち)もんなきそ惜(をし)まれ
と年経(まて)二人の手(て)ふたつとられし地(ち)に身をまかせ月ひとつう
こゝ身のみうつ藻(こ)もろともさて魂(しやうね)ハ悪趣(あくしゆ)にまよひて猶ぞ業(ごふ)の氷
まちて刀林(とうりん)乃枝(えだ)に身をさらしてそろ自(ぐ)なさけなきこそ
獄(ごく)卒乃答(しもと)をうけ地獄(ぢごく)乃くるしミを助(たすけ)給へと涙(なみだ)を流(なが)し

諱祇又ハふみが門ニ来りあつとすゝひ夢と想ひけるハ
いつ女二人菩薩のすゞひのむかし一郎とごずのこゝ錫
ハ女乃火と無女ハ結乃婦をなすをつきてせめてや哲鉄な
し来ま氷とろくよ結りし文同ハかくえんがまつる乗りて
わかれじ地獄乃くげん忘れてゆや菩文ハまいる白なし
さうく鏡乃千留ニひゞくうぐらし。獄ニ此たく忽ちん成と
とぞと権幸ん地獄よ去りく。須臾乃隙かし見るたく
今ハなう方乃わくま道ニ云ゆの跡なり沢とうくせ侍へ
とひくくまどれくむし見んえし雲路とて清光て錫と
なし。文ちぬ乃大悟すし。色わじと五するかへぞ開
きつしくん。出がれの身あへふくて、とも心へけるで。け
まよひ計り縁も侍従の為りなき祈ひなきへと心侍
ましき業因といふべしとおりなりて二人共ニ菩薩
ニ入徳経成仏し猶能吊侍へともひのうして祇
ハあけの目亲ニ帰り去

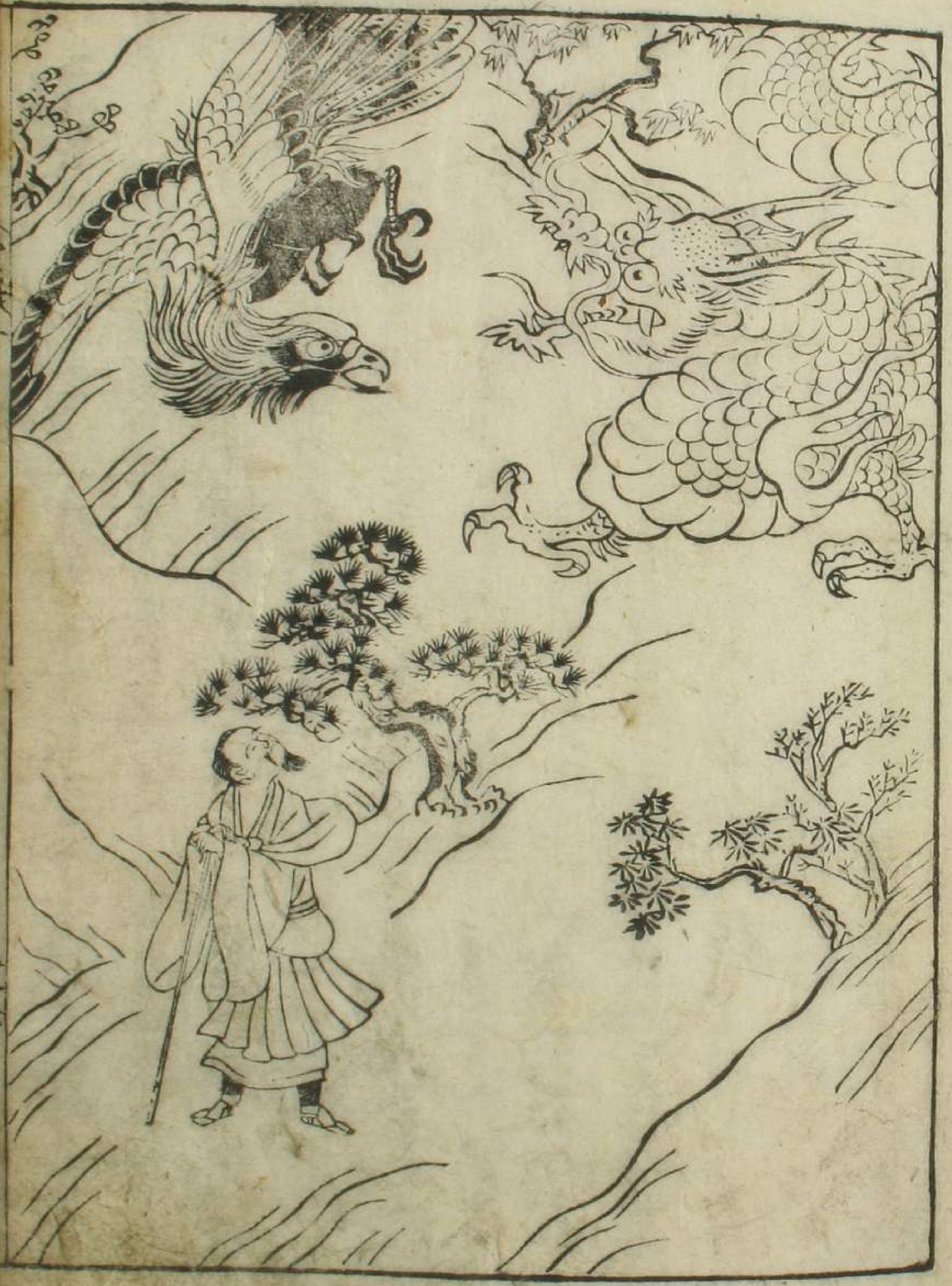
遁蛇口

一とせ越列ニ修行ありく弥陀の海越乃中山ニかく詣く
あづまちへ帰る山をとをんとりまたもたつね坂ひよつ越る
そて大乃方の松山ニ吹すしき出るこそ山河乃流れ流
流乃繁くうまへのわくたか荒のうどなくへ深くこそつき
と及計乃かすをしきよしぎつげされ本の名を飛びし
たかへあって一丈計なるニ大蛇乃前ニてそ耳ハ芭蕉の

あら筆に乃ごとくをするごとく眼ハ鞠のたくさして赤なりぬ鎖
耳乃りとも動きずうかに一飛斗乃みの右也入乃有乃ゝ
つゝの惚ゞをいふんかうかし。針樹乃かゝりしを見て下手
をなりゝゝ事見云乃迷ひてゝ戦とも乃さんしきるゝ血
魂脱ゞしく。迷ひ入ともりし。逃るゞふけよの嬲く戦恐て
逃る力しなしとハさぶ。ふ康さなる是ハ旅のもりにて八ら斗
ふなる深よ危ぶんてし。雨ふ。乃下ちりひろつの鷲
飛ひて蛇乃乃よを蹴て又中々中よ入。毒蛇を乃よ行ゆ
縁すりかれど水を所家をめをやり過りみる毒伴の
鷲か又飛ちてわるを蹴るくりわまる蔵し。亡毒蛇
乃首えんぢんはぶらけ屍谷底へ隠ゝひ落る。ち毒蜘蛛
これらくぶこき百ふ当のかちりるかしとわかし。皮鷲飛下て
肉と引裂つゝぞまう、冷ひ時よこうそ安堵乃おもひをなし、侍お
ふ本様打つるをさゝし方を見やりて危ふ気嗣つゝ挿ふ天
只仏乃加護ふこそとおもひて
みかさをれつゝさ命に、ながれ、鷲乃恩とやゝ友とふくく
と云捨して獨り山よ行をむきぬ

比久乃蛇七手蜘

肥後乃宗太郎も深く山ふ来て、うなくなしゝ、ちゞゝ時も房さ
よ連る秋寄乃ことに得入。又悦実ふ勢をなく、ぢ續切
乃意河なるよし。読よあり指ひるよすけれどもむ。奇一盤
友をとて独りの中へくほどり。む何ると之。これ多なれ



の鳳凰とさゝさんしるもつて燕とぞ。ちる後郭鄰の地
還らりして明なば起らまずでなんとびふすぎまの云ぞ卿
御乃んつて。云私乃密朗を書れふるう小ゆう路小身の仰と
いふがしとも経ふせむしく宇の事をしていもつとしくうるも。
いやちよ修りのつのでかりしろも寄ばっ。はまづつまの宿所乃ん
しとふ根なる合まなびきまなきまち凍乃月分すぎるまい
そらよ待りといえど。程志のそてども切の志よさるみとく
驚し居ね。ある月うらて小風醉かる心。ゆ賊まぬ川宵
より入一僕小折させ荻生友なひて。礒つらんよ志金
の名所とさく。所種の嶽をかそくしかそらぶう鴻ふ
風年宮へ鴻乃さゝむしさらへゆしと鄕そてり。杉窓版

乃ひ也しく袖をしぼり椎乃葉おりけるやれ異たりけれは
幸の猪白川のさきしを深川捨してたゞ道行くとう
りさ道ありけりぐ鴉にさま道なんめりきてきとおさ化け釼
高濤も果しとのひ津げけく海ぐゑさ三て古重るとり
夏よひとつの山川海よ海入而せ二尺人乗乃蛇尾の方
甘海よつりてひつくと波さしく情しさるのとすみ袖
りかと再さしませく浦曇り屍乃れども波いそぎ躬おす
波をうつる百千中籠り下波ふひらりさる面路
二つよさけ汐干よ三つ尺河よ旅程よ七つまりつて
ちふ乃いぐおまるとみえし血蛸し化し鶴のた
さゝしる首をもそて波上ころる升是とつまぐそ

ありしふかく又れ亀に入思ひ殊絲化して田蔵とかり在
海中へ入く蛤となりしひ縦よ草子にも乃鏤とうそり
燕の子魚よ化するとふかきしとみんな不信用なりさとに案秋
生蹄鏃とお猿に愛惜するにて又蛇のぞ人みなれ化よ変支
をと親ひの行りの坊ぞ腕よ化よ化するも野主なりとにへ
うぞてずせいつ乃のけ不かるとおひくる再せてご海のわ

（或人云市店に黄鰻百ぐ円まかうところ足たちたる物あり気者蛇の化するものを節て以入ぐまへ徽まで待へかぬ）

晃哭不律

羽刑乃家に川よ洗て鋤のおろしまの名称へ蹴ておりる
天明計乃小家よまりて東菜乞霊飯乃みつるみかげ経
のあるしは定年計は男は年乃ゆくとくさ七十余乃を尾

[illegible]寺院にして講堂ハらいくわうりして一堂の跡あり

と、鐘楼を[illegible]りして廣堂へくるとあゐぐの坊ハ物ハ荒しき

すも悦用ふ見[illegible]んぷさま[illegible]なきハ[illegible]

木の根を枕まくらとし[illegible]すとりてびかゝらすの音に[illegible]

ち尻せてしきれど山野乃[illegible]あらさくへかれろしきそれ

なきみいぶあまめバ[illegible]の[illegible]とむとひきそこたまこ

ゆうる小径むかふがしこ[illegible]むかひ[illegible]丈ハいふあるの

ぞ常光寺といふ[illegible]ハおりし當て此寺の南東

嵯峨より一町たらずあるところ寺れ行り慈覺大師乃御作

茶にし飛定恵の法然をこのしぎと[illegible]乃[illegible]

[illegible]久へあ[illegible]紋あく[illegible]勅学乃[illegible]解しあり[illegible]

[illegible]の御堂乃建立ハ方[illegible]しきよ[illegible]て[illegible]

此[illegible]乃[illegible]堂と門との中ふ[illegible]

[illegible]の[illegible]八年とれ[illegible]

[illegible]法師[illegible]一夜[illegible]て[illegible]

[illegible]法[illegible]ふく[illegible]人[illegible]

[illegible]とし[illegible]ふし[illegible]

[illegible]今[illegible]

さんとりへバ母[illegible]の[illegible]

[illegible]

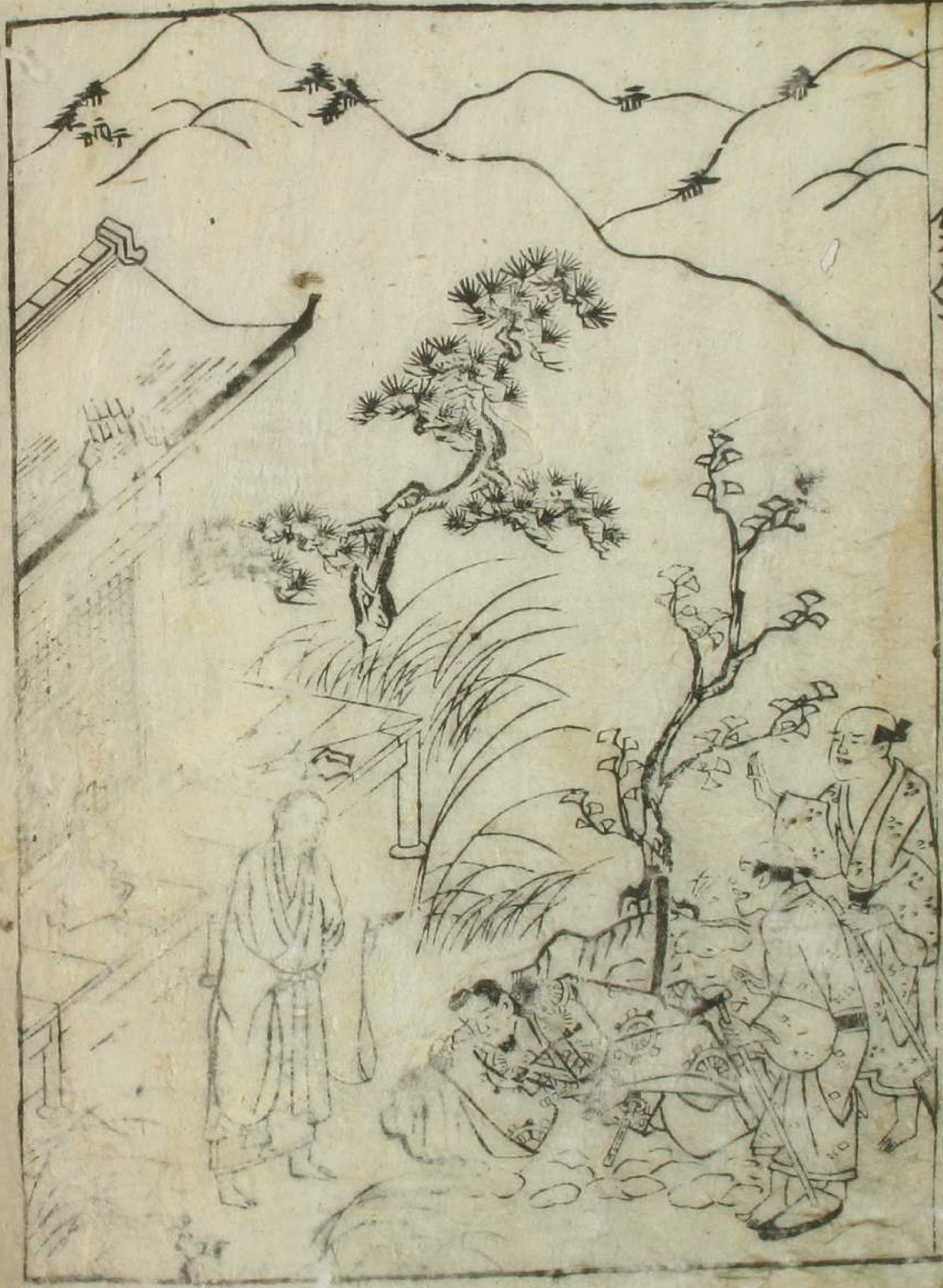
[illegible]

[illegible]

ごく檻にいれられ籠所のごとく寄り燒月乃曉をまつばかりなりしが
人獨なんどゝ自害に病の痛をこらへしが嫌よぎる山虎狼に
乃ふしど知りし妻子眷属乃恋暮に遊戯乃松檜ふくふく
ろうすごしてあらく[illegible]枝によわく[illegible]山さらに鬱
て清ね乃果奈落に墮むる乃みちみちてに今乃妻の[illegible]にくき
とく時節を待て自を悩し業ねかはざる縁に争ひし
てんとすゝむ案のごとく煩ひのとくに悲しくなりて
叶ずして此年まで骨髄に透りて胸にかゝわりしや
なてりんまるに[illegible]文句にて稀[illegible]かたちて[illegible]より
ちきなる柳の木乃もとしなりて夜もおもひ[illegible]かくて
此地中より叫びあへりしとやすりし卒塔婆よりつゞく[illegible]

蝉計あはれにて云絶へがたく夜毎をあかりもして塚をさくん
よ音て精進の行者となりて稀也そひといへくわり拝い
ろあるくも乃りし地中よあそそし[illegible]向若紙捐點のゆり人
一生不犯乃山伏なりけんとそ逃げまろびとて卒塔婆乃鳴に
むなしくぬしと南無ちれ衣僧あくとうけく後きあ
又あ舞しく一墓乃主となし卵塔いみしく土垣あるゞあ
くふ飢饉通理乃由向を絶く無縁乃墓覆と
ろとふ衣不止營十年余早お風ぼよ門つくろ冒の
と將ずる附此塔婆法雨乃[illegible]とならそて此深け
らしこ後功なり苦を受けすむとよくしえず[illegible]なさ
その境界乃[illegible]まつひきそとりとうへなく自出入

のこゝろなりて伐剛の障を除す。是一層まとひつゐて奈
梅こそ起をとこそ叫ばれなくとも起の後。此世を悲しみ情
修ちとも不可思議の功徳を得へ般若の波羅蜜ハ変を煩悩の
枕を宿ひてこゝろいらずと氣まゝなる眼ごの命あつく身金銀に宝
信を障をおしめ給ひている乃息あまくるの脈をちぢらく魂
醜悪のまちてぞ給ひこれを損ひおしんで夫ハ祥禅に執ともてむかし
いふ神自も枕中に書候ふ時ハ。さる御手より行事我一生
の門洲に楼の下へ命一度御と今の骨肉ハさら捨として
三度大名石香を明ほどまでせんと丹誠に祈りもしと誠和とぞ奈れ
ずてちまぼそでいとげてしもとへ又命く死すりてきと云は
とよ意なんるさごとし。手足の勤しして一心研書に体し身も痛



と又問けれバ浮子ハ[illegible]に今生に[illegible]ぞかしと云

生[illegible]する身の飛行(ひぎやう)自在(じざい)あり[illegible]

に[illegible]するの日より[illegible]

ろし[illegible]又[illegible]人[illegible]ひて

[illegible]の[illegible]

[illegible]

し[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]宿の[illegible]人[illegible]死[illegible]を

ア[illegible]をとけし[illegible]

[illegible]の[illegible]

てみる人[illegible]海ハさらに年[illegible]

ち[illegible]五十計乃山伏[illegible]

こと[illegible]頭巾(ときん)[illegible]小念珠(ねんず)[illegible]人

しく[illegible]中に[illegible]て越国(ゑちご)[illegible]

[illegible]山[illegible]の地[illegible]都[illegible]後[illegible]

に[illegible]そ又[illegible]流[illegible]し

[illegible]乃地となりぬ

宗祇諸国物語巻之一

宗祇諸国物語巻之二

義童節義

奥州秋乃[illegible]住吉の[illegible]礼し[illegible]廻

[illegible]樓閣徘徊するに[illegible]

よ[illegible]千[illegible]松乃[illegible]より海[illegible]

沖津波入日とゝもに[illegible]

[illegible]山の[illegible]

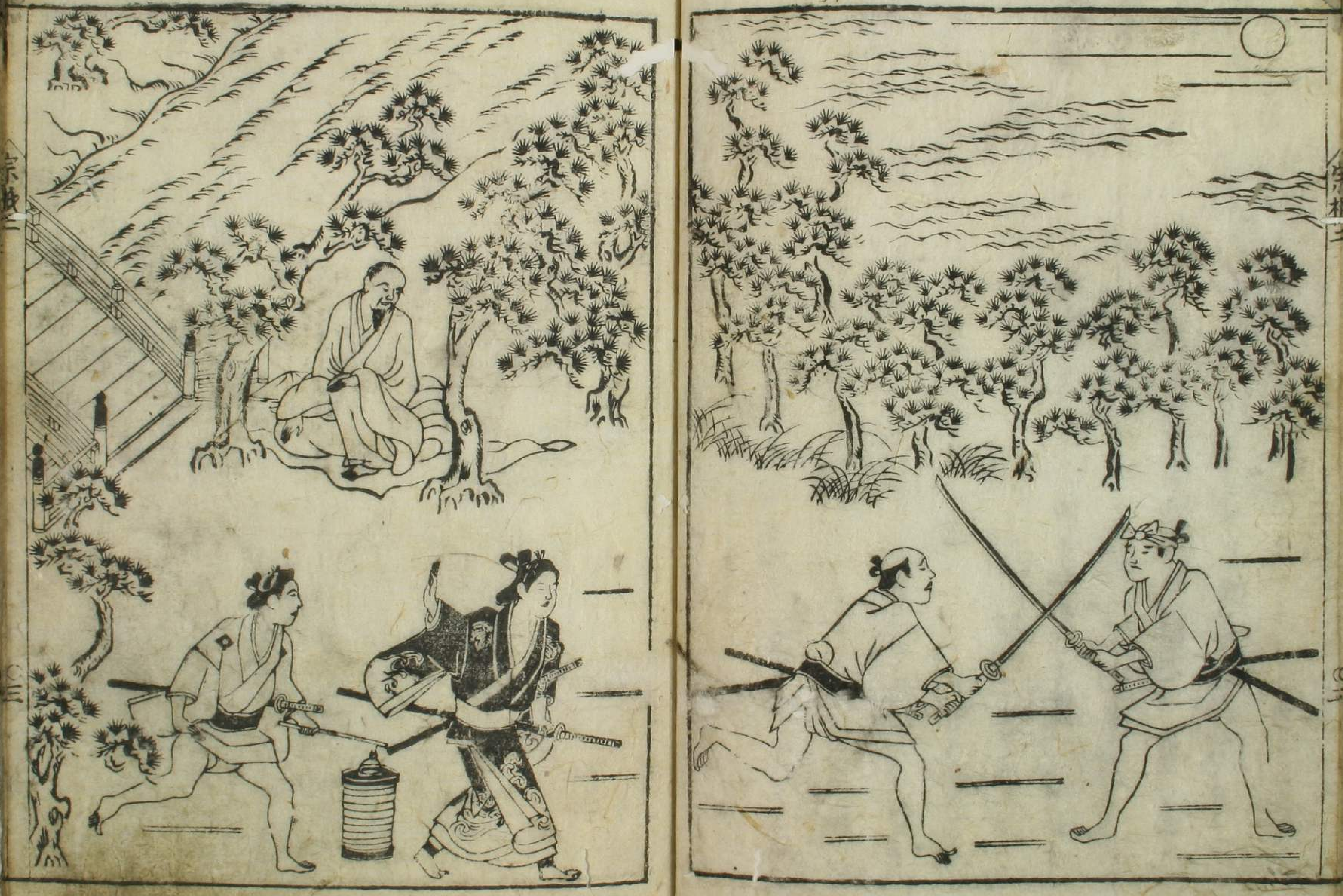
[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくて戌亥の〇るを子の頬ちかくあるに当りさびまくり
松の風猿が皮よん草とすませば弥わわき袈裟の神となり
さすの膝引の郭脚んと苦むしろと身まろく留男まる人
白衣小さくさ刀を横へ鉢巻しる月げよ定かくねど
まへの頬さ三とかん西尉よそりし刀まきとけ結内の名
とり縊そこなひてまたよ縁とうけうりぞへ腔何のゆや武よどん
つきころしけらばらりとのがれ出てかゆへ去りしども杉根よ身を
よせ来る男より秘蔵小硯将をくぐ文難皮の上うすら男
まへ人気を白く続来して長くまつるあゐ縄をとて
鉢巻し息きる切て此所よ来る。初の男ねりてよせて
四方をにらみてやく宮来するし躍此の鬼の鬼へくるく

ミ事に残りがたさをんれど小ちくゆくんやゆりゆまでど
武道の人月をのびてんかつをかりさ道を捨ぬるなく今
まなりね全なくうちにありておのおの道と志さ気節
ア時の事まおみつこれぞ喉のうかいと毎ひくやもこ
少洗川めて水すゑひかで身絶し刀をとりさいざこま
乃宮後今かりといふまりさまく独方切むけすかるの立ぶし
獄は只変に幻とともさみやうに身をとひやし御つぎの年
何かるまて何れそりて開陣すまし知の〇じのし挽でや、
とかよそとゑ文定る血気の行きかりはに役えしも身はまん
そまうしかしとみ頬よ此あをしさすが猪肩とぬれどかんて
刀鍛の業てでもんとみえしど秘事をつくせば四方ま鳶で



ともかくす手柄をとりて息をつぎ〳〵手柄しらそ切結ぶ

ら夜に及時。瓢の方より年の程十六七とみえし男

あさぎの小袖の袖高くくゝれ。我にむかひしさかんに打懸り

ぎりさせ月乃夜ふかく一文字にけりよりあま人の脛を

今雅結追と打かけて。毛に縁して南方退く時

義高も瓢乃男にむかひ八幡を源しつ。ながく死乃志事を

思ひ立に何ぞ我まで世なを惜ぬ。漸何ふみくよらず

乃露文明よりりし事不陰山閣鐘の我庵まつりて

身業鍛の志すべしとてつく上乃袂と名乗べ。下かい向き

於我来したる偏に死出乃男にて。男いつとく云我なれは庵

よふる結の金牟尼乃陽まとおかもを狂乱する

あさまし日頃こそ苦しき縁をあかし一命をゆづりおはひ

ころ年久を知る事なし。今敵塁乃あと一言をはらひ

けら追あかくと言方を落し情にも乃花台山の月と

詠めて世の人にいつくわせん。縁ずる所も是不知せ一刹の

得安然安否をとさてむ屈して其身出しに。是をとゞまらて付

られしと我計ひ進み。往生の後三界の一筆をさんと我云

が仮らんすとも追て一通とさゝうし文助がためにゑ

そらふかくるべし。其金銭是をのぞみにてゆらやんに疾進ましとふ

あの筆を文にて何ぞをあり。文場の男に向ひ我身の遺粋のぞ

より今夜輪紙にあやね汀の書札まで吹風とさらす

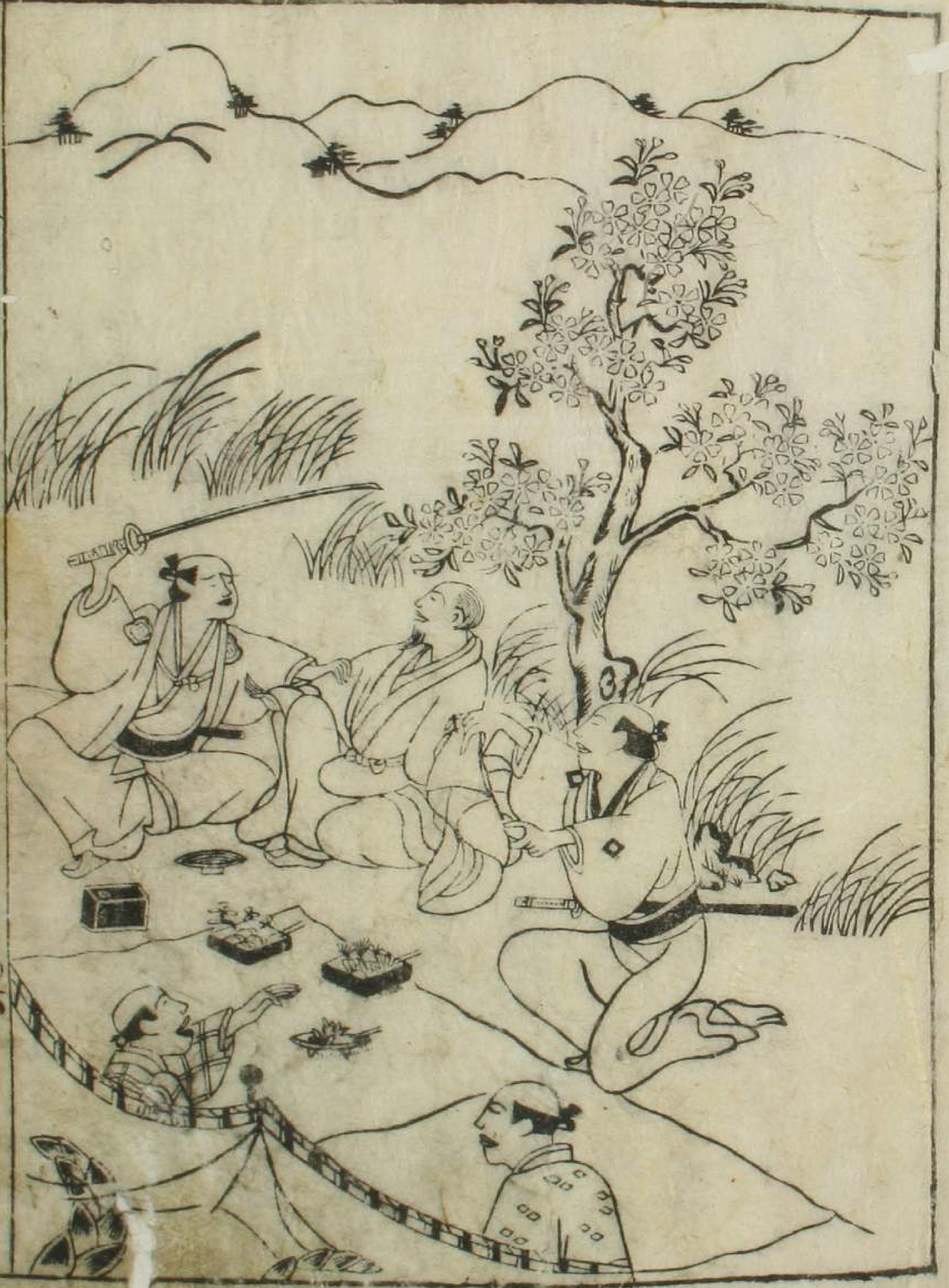
こ年乃托すとしては我身あり。自房をとかすまゝ寸此縁二筆の言葉を

捨て鉢一通りのおもしろさしてハ捨流に自害までの男
わりなく押とめし嫉妬の道理せめまけ女郎の振さしいふ言
とそもさらず寸風のわづかはちと世の是とあんずるに
一念の悪業ありて年ふりしかさ死とかうして人
にのがれぬかなしみかなさ縁有ものにはらくゆるしあるへとこ
ふかう逢べば其外命とらへん安く替り給へと刀をすてく
さしうつくまつて難波の男をもりんとを錢女が邪気まよひ
ぐして命と捨給ふ事ありとやさしければ此女を
はなく済し年をへしといへば濁の男泪をながしいつ手
乃おせん業ならぬ身の勧しまり。このか乃むく霜あふれてき
見すてゝ勝なりて逢なりこのよかせり。数あかし悔しくや飛

だしやいさん遊女あまたをいひけんぞうそんとうまし
付後行乃振ふ角の月落鳥啼霜ふる東の雲白く
なりわたりくて帰り給へとて難波の男まかで
げに小舟乃岸とまりてぞ漕ぎ離るる舟の槐後きての之
きて武蔵して白帆へおもさしま祇ハ一番の重りげに
なくゆのとあん俗縁遊女のすゝみけるせし。禅子摩尼に
耳をの言いてきこざしかやへいたしけるそうひさかる

墨染桜

京五条の末おれたしものをとうにさうちく世人清水清閑
乃奥にあそび嵯峨大原の名所よあむゆみるぐらをきり
あくびく祇ハして法界のともて人のえこもとうひ宮



静かなるもてなしとかくして八重まで遊行のふしぎ此寺の
[illegible]の友とす[illegible]桜[illegible]一の桜
よりふよ渡りて後藤の回向[illegible]寺に[illegible]のほ
[illegible]なりしにて[illegible]人と[illegible]りて静かなる[illegible]
ちまを礼し稲荷に参詣しまりて深草[illegible]なる[illegible]
の東ハ君のくにして第八さくら寺[illegible]の[illegible]残り
より中小路[illegible]の[illegible]といかふしに山科より未申へ
二町余りて[illegible]の桜[illegible]友さへ京の名所
りや[illegible]八雲[illegible]ひさ[illegible]行[illegible]ねど
山桜の情ありてる[illegible]なりしのかくてこの先に墨染くし
[illegible]しも[illegible]くもとの名を咲ぞ

御亭まろの亭主人乃さくらし吟声けりすこそあふさきを
みてとの分しりや又遊暗傍乃こえけん
みな人ハもの寂しく悲しみ哉すゞろきふせうと
是ハ蟋蟀をよみけるにハあらねどまひしけ遣ひ
出るに蟋蟀乃あけ辞すむつさふぶこあらを遣ひのる人の
築中小安坐しけあふさき坂ろふこあり乃方面星人もて
てナ人半つぶやりしく旅の奥しく辞ないひて笑やら
笑やらいさこけれども無念の家に乃わが主に付し宗祇
とあんそ此坊ハ業小御にあね優人ハおもむけ流人よ移ん分く夜の我こ
恵良れおうて寄りて香る思ひがもふてり勿ろがら縁あり小頭をさらへ
行り鳥楼乃事も御ひとつさいりてんやし縁ありく見人いま

いふ祇ハおりしこうり詠吟を揮て頭をとふてふつし事なれが
御修乃不思議なりしし潤ずくなし声もけしからぬこえよゆゑさ
なり鯨井綴りてごとく頭をさらくべて声をあらくこゑ印をなく
てもし空観ずまうべし力わきもし専らく力弁力なく祇犯
も精不形よ相ぞとんいよ拙ひ則綴て発けめ小文よふく
とつぶらくと一つきの抱あらいひてつあしけ声といけよくとも小
脈えて押小中る祇今ハせんなき事くて

なまら偏やこの事をとらへてちもくろを祈ぢる人か
と思ふしさ道いさしきの放逸てよのど心形なしくかや
なるし辞んらやさわきんさすなを語してるくやまさり
ねもぞちりしきんふ知りしさいさらひなりし清きく

あやまりけり龍神と人乃名まていさゝかしるしけるか

高野登る又陽雲

紀乃国高野山ハ八葉乃内院を移し大師入定乃廟前
小萬燈籠雲乃法祇求聞持乃行堂あまた小堂あひならひて
松杉乃老木星霜をへて一蒼天を小梢にさゝへ白雲
よ枝ひろごり月影乃朧にもやさしげにこそ暁にとどろく
る河辺の猿ハ一百斗とかんえて細川清らく浅く流るゝを
悪業深きもの八功徳でゆるしまし在てくやしきを
さ十町斗に玉川乃ながれ生あるものをすくはん為毒
ありとて大師御詠歌に

忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水

此高野奥乃院より大塔まで一里乃ほどならぶ人乃あ
しるして墓のしるしに手跡せる石塔のこゝかしこにあまた
あつまりて大塔中塔金堂大師堂法華堂乃御影堂の延命
とり御くし小堂乃籬乃様あまたの院々谷こゝ乃ここ
毎日とうろうくのぼりて参りけるに小八月雪花打[illegible]
南紀八寺小字のつかさとして肉ちかく詣しより数人乃囲と
ありし我やうたび嫁しき宿世とかりに老乃縁小家にあがり
て久しく忘れさき東西経行乃志まちまち八幡かに去
ことし我ともにおもむき生まれ乃大坂より玉つ嶋
を拝し住吉浦乃浦の眺望宴しこおもひありけるそ[illegible]
これ帯よりて廻りね紀乃見浦よのぼり東下よ

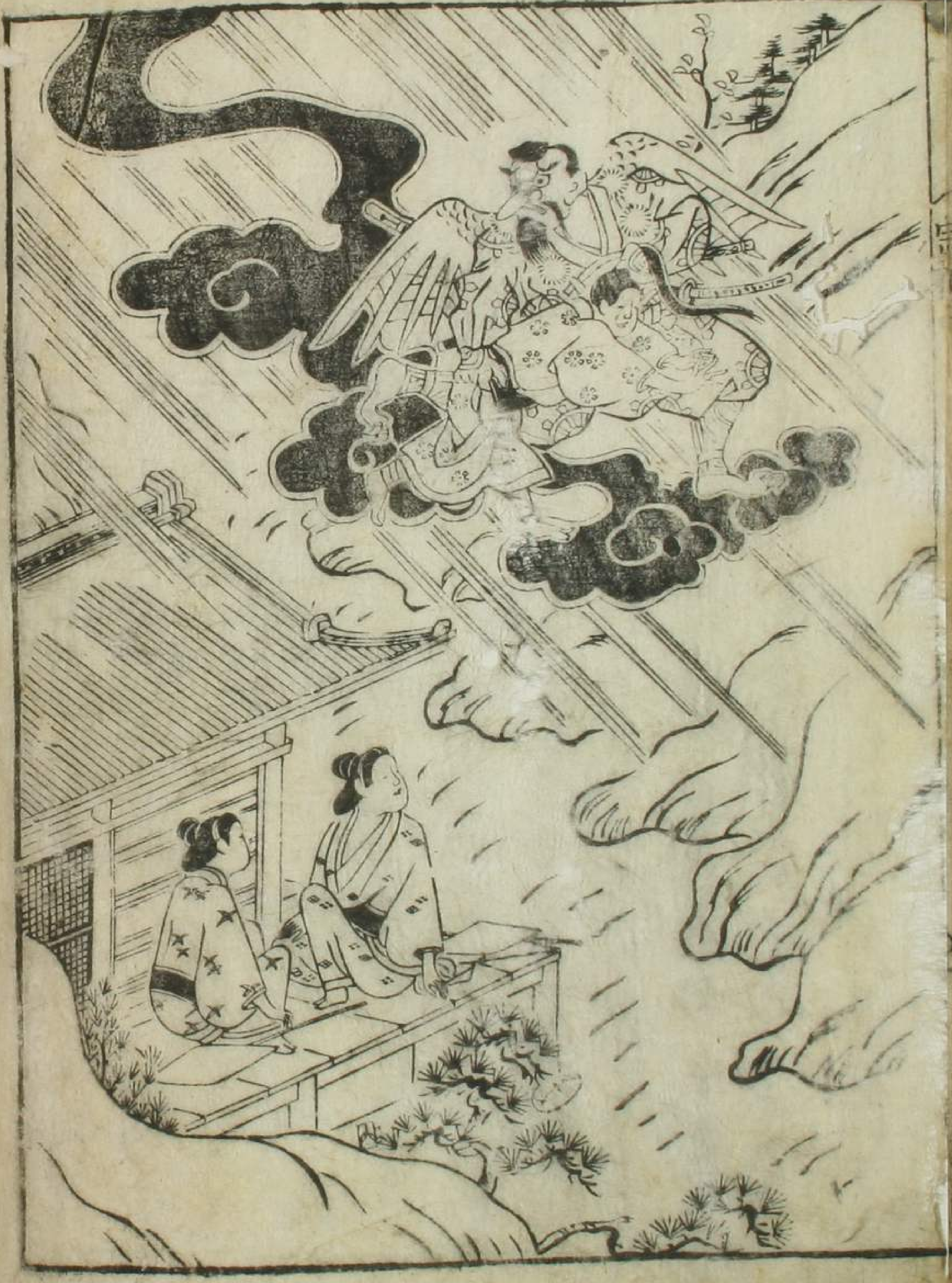
むかし大徳の宿紀の川縁あり。遠慶住所なりしとぞ
又三股の山を吉野の山と揃ひけるすむ紀の川
とりへ吉野川の末を越て信しみ井高野の里
ふがう乃寄くかぞへ入り。月高あまたぢの寺登山と志くだるま
まね大かゝら女乃絡みより此山乃大門をあふぐ
三日ゝら十八町行て宮あり。其ゟ末ゟ十八町乃坂上のがれ
不動院乃不動尊紀州。覚鑁乃作也。其乃十町計
なる女人堂あり。又につゞきて円明院乃不動尊乃作そて
ましまして仏堂より奥へ一足も入る事なし。すべて女人ハ目
とをりて是の法を伝へしの人。男二人女三人堂山
しけるに女人女人堂にまでまいる二人入堂す

八葉の峯とたゝへて爰にこもりし人乃女毀わしきとん
みそろくくらう乃海上を隔くらのごとく。高院乃まそれ
さへ翁まても仰んとすの情をつくしすゞく女をときひ
給ふ開山乃様こそ人わりの院よ世尊も一切乃女をせきて
乃母までへて説給ふ母なくて生世し給ふ持化を知識を
ゑへりすといひて浣よ山に入んとすれば忽震雷
ときこまかに雷電山と落て。震動すると
見えし。役女り来たく先わ同行ぬ小坂をふし
後く此ま和泉乃坪坂の高き杖よりふされて
ありしとぞ。識よ高くもひまよりふすゞしく動揺
なく仏をわざひしきなりし親王乃ぶなこそあまたと

かりけるハ合吉とまうしてれうらハはの比ふりどうらんと
その仙女松の金峯ハ女人のおそろ山と絶ちやう飛行
すゞまれハ何そよめるの女よひらりらんと役嶽のよりの
まや鳥雲東女霜海つゝ車軸とおし お後園松して
り先をゑんしもそれをも修隷せざ宗中と拵ハ一つのま済
雲と跳さて飛行りをそもよ修行その所んとするあ小妻の
おそまつ愛の所あけるとや。通力自在の神仙するとり久
況や大俗身術の女よおそのかやどうてあさき霜ハ偏
隠岩のとがそ
常陸乃国よ入て筑波山の男女川 機川ハ名をのとまよ起
かとりなくちりの色とまてぢまりのけ波とをめ閑居れ

弘ところにさへあまそて遊戯抜ちや小おそてし忽。変文附あり
安都山にをもいまだすくろかれとまて無くと
そけハ月窮を消ねたけ山乃陰くそりより夜毎立そ
等てうくいなくそも里とこあまし世間計るて向
とかんやまハ東西南のこ娟さくり小乃家と請る
山鼻乃岩つ小條ちりてひとつの谷の庵何方
こころにそきすとかんゆうくまあまさき方にて修すむ
人のそれし篇や西府乃将修行をくじまく
うる事くとみしまりさてにやみおんハおひおしと集そ
勝集おとけしんと賜あられとかりひくぶとう
つきめ山本乃さおりけさくみまいびやうり乃傍おりく

寒巌弥陀のおつ前とてみを学校と合より今勅りの
おりと云ふ。玄妙せん縁乱せん静そしと云さるがい
ら内のさまをよみつ小夜の世といひおかしいふうそらさら
紀父乃邪にやちのまよ事を出て肥らし事をい
猿と流れの役を云ひして仏壇とおりし紀のおふい
壮州の仕業みえて出た漂より高妙涜子鷹狩て声翫よ
素乃さらいよるの心まりし弟子にまつる麻さね森の夜乃が
又あし楼乃月主て見へしと玉蔵きろくみく和でるる
てかし清登ひとつの毛ちさまで楠よ竹乃楠牧秋条ほのと
まさく此楼より文残かく天の孙ニ毎よ行ゑのさえそるる
せく表方かにをうりより洞安乃まさま毎清をくかよんすとて



いかなる人の庭を過してある道俗かやうの事のありしと見え

ど。流よ一河の流に汲てなさけをしく合掌し

とゆかんとぞ。さして帰るともこそありしやうなり

かくし庵つくりてかの今いかにのひてんとたちくたりしく

きやくしといふは。又善事なし。其にむかうこそ翁にまみゆ○

ひやうかにて其身にやしなひて若山にいかにとし腸とい

らふみ。又宿し。高野の井こそ。ことつの小菴ぞ心服わたし人

隨筆の素懐をとけ出しとさそかん合掌して月初みつと

ちひさき。世の中は彰かさ隠遁の人とさきり。身をとらさと

のむかし世の常ならさと世をつく山路やまるといへど又つく

のこしきらへとあんぜてまにちくさ友をとりてみなは顆

あさきの秋してきりさりく女其て浪道のかくちか

文　他より出し山花を卑下して語りかや

其乃女すゝむひあつし木のかれ月を乾くろりけ

一夜露乃へとかはりして

松かぜにあかね雲かへり奥ちりかく乃山まほん

元月とお表わりて

一とせ乃さの末にかゝりとらしてきく乃入れの子○

初蔵んの分

余にさて花乃やまとなるかたてきえて

隨身ちりさの花すへし

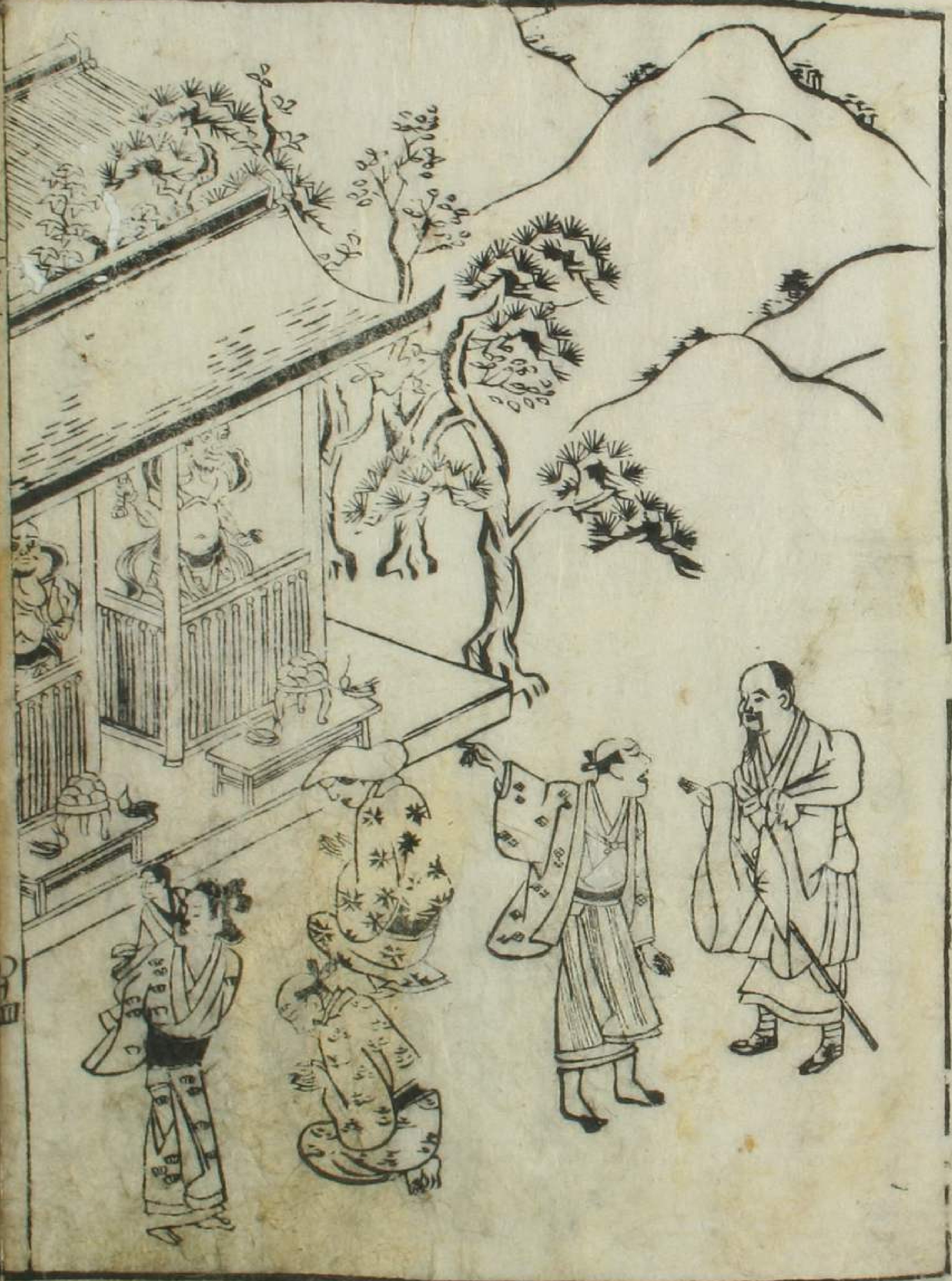
かまりわた八泊乃縷よ行きそて花乃浦を尋ねかれり

此方を案ずるに洞の穢隠戎の虫なり此人こそ虫を離し
神妙く夜に隠れまする事もなし煩ひいつくしくの身と
こえて此山に柱りし所こそありぬ此後隠れ住りの跡とて
高にぞり在家に入てさる縁とも有るやとぞ人とも人ふ小なるを
ならねば事乃かゞしその人乃ころことを謂るに窮まなる人会
をまちし以ゑ無の事を支名の中に名と美しきるものなり
思ひと云つゝ名利を捨る人に小なりにあらばなんどを
象く円にあしきを差して見えぬまど事をもまて其人のこし
伝る梅皮膚とぞ新にして一番ん乃燈とあり死
骨と幸ある弥陀にとをりありまるで
とし月を経たて風に吹かれてつゐのかり寐をぞ遊ぞらり

気よりで偽りの紙に造て翁老なに給ひ身をまかさぬちらうとく
みに腐むすびて念仏する偽の事を三遍となへ小此事を給り
幸ある事を当て無きまへにて以べし偽れ名に応身りけるまいまする
素人へ小縁縁れのまりしく冷とて眼前くとなり比ひ紙
とまる人気のせ卒お後あ新にして命二に弟やしくさ無三
友と一乗に帰り徳わらてくつまをそまるでね

仁王現相撲

吉野川の流れ乃初めし江戸の森山と通りて行る往道の
程よ観音堂行りぬ與りつ迄の其帰り此門に主張ふ仁王
を人々集往ひきつるく打ぬくいひくと地頭無の凭
為く節をとまる程そのうち人乃気ありまりて聞えへりお門なる



ゆかしきくのさはて、本尊金銀にてくはしくすましたり
武蔵の住人にて何だまへのゝ業もなく養ひ此年
多利生なく[illegible]とみてこそ[illegible]の本堂乃けちえんさ
まかり行かまし人の前こゝにては何もせさ此仁住ひ小[illegible]の労笑
乃すねてまこそ業もしよゆうの[illegible]し月まての[illegible]こ
より船ときに二度ともにいづくともなく見えし給てもちる
陸奥の法人乃本尊をふところそしさまくなりをもちかし
されば六月の文字をさへそくたりまさに給ふ海は濁されて益
あきを進むみさつる[illegible]ひとりしらず前に膳あるし本の
農民数十人まて此たまを捧ろくまて本堂乃まうまうさ
つらくいそしく本堂乃い鏡乃[illegible]のまゝくゆかしき霊

延喜(えんぎ)の式(しき)にも相撲(すまひ)の節(せち)おこなはれて諸国(しよこく)の集(あつま)りが中(なか)にすぐれたるの相撲(すまひ)を撰(えら)み一座(ざ)のこの事遠縁(えんえん)の力量(ちからまう)ある群(ぐん)をぬきんでて集(あつめ)の事鍋麿(なべまろ)行(ゆき)葉(は)のごとく一座(ざ)く立(たち)すくつく勝負(しやうぶ)を決(けつ)し、らそひ(？)けりに隠岐(おき)の国(くに)の男(をとこ)そ(？)黒(くろ)金(かね)の山(やま)崩(くづ)しといふ強力(がうりき)の者(もの)立(たち)合(あひ)て秘術(ひじゆつ)をつくすに年(とし)ゝ南都(なんと)の男(をとこ)はいつも力量(ちからまう)まさりて一番(ばん)むかしは南都(なんと)力(ちから)を慢(まん)じて人と争(あらそ)ふ為(ため)方(かた)なくておのおの南都(なんと)にさる健(すくやか)なる二人出(いで)高名(かうみやう)に聞(きこ)えて軽(あがき)一つあるに事なく南都(なんと)相撲(すまひ)の節(せち)と定(さだ)めし一人は金剛(こんがう)と名(な)付(つけ)一人は力士(りきし)と名(な)付(つけ)東西(とうざい)にわかれて雷電(らいでん)のごとく勝(かち)負(まけ)を決(けつ)して向(むか)ひしく二人は南都(なんと)無(む)二の男(をとこ)を別(わかれ)得(え)すりて人とやいふ二人並(なら)びて勝(かち)負(りう)に手をあはすのち(？)例(ためし)に常(つね)に我(われ)を信(しん)じて一生

の和(わ)とすゝめて終(をはり)にけりとさけられく名(な)を為(な)すによりて相撲(すまひ)によりての事(こと)ぞさるまじき(？)ひ(？)ばいは生(いき)るよりも歩(あゆ)みをとゞめひけるさまにして御(おん)ものとしてぞ語(かた)りける世(よ)人(ひと)強(がう)力(りき)のことへとさもしく(？)よりて語(かた)りき

雷天災(らいのてんさい)

去(こぞ)葉月(はづき)末(すゑ)つ方(かた)とかく越前(ゑちぜん)の国(くに)にしかるに(？)加賀(かゞ)を見(み)て(？)北(きた)藤沢(ふぢさは)を越(こ)え右(みぎ)の方(かた)の辺(べ)をとほり大(おほ)きなる森(もり)の下(した)を通(とほ)り二町(ちやう)計(ばかり)さる所(ところ)に川(かは)辺(べ)の杉(すぎ)の木(き)に一(ひと)つの蛇(じや)を解(と)きて彼(か)の男(をとこ)に先(さき)天(てん)雲(くも)にかゝりて暫(しばら)く雨(あめ)のたゞしげりて小(こ)ぶり走(はし)り来(き)たる雷(らい)山(ざん)を北(きた)に隠(かく)れ雲(くも)を起(おこ)して又(また)より戦(せん)後(ご)以来(いらい)の事(こと)は度(たび)ゝ望(のぞ)みて称(しやう)ずるにこそ晴(はれ)ならんと

おりひく雲乃遠近に小路ゝてころびそゝり。夜小ちいさき辻堂あつくもんの地蔵さら移ぎ水小及つきぬ。さる程村雨のくもやこともなく雷乃ひゞきも稲の火に似たし連雷鳴風吹烈然魔ヶと忌して起き乱れ出家し身を清浄にて念ずるとくゆらせて天も地とも揺るゝ物しかして謹しん雑にまへて身を清めつゝ水をしかもまたなん夜にも及びてなかしく何事すゝへこちら先小ハそらおゝ乃禧書なりてなかし。経論して無為心害乃十万斗あるか乃田の路に二十歳斗乃むすめ手に拾有金る物まうてもしくひろひよりさか雷おちゝまり。四方に鳴動し油のゆびきて海ょ入ともつくやみなんとおぼえし。よ、家屋雲の中に二尺斗乃丸き物てる火入雲より海魂ひかりきたらん

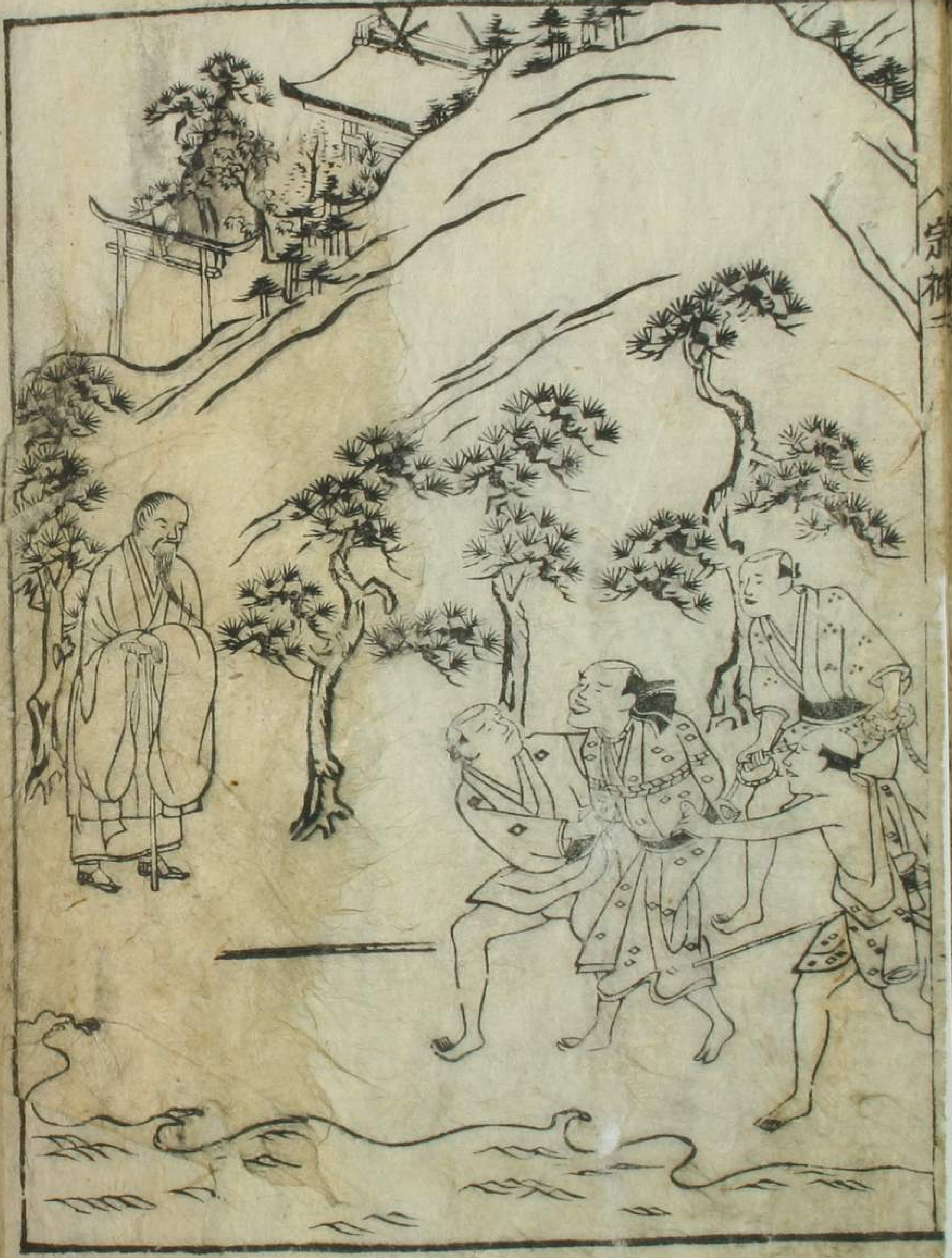
たまころよ裂けて手おかりてきこえし。雷火しきりとみえつゝ又ある雲小つまそのかりしくつくするかぎり小夜晴風静り又薫くし立天と地ハ只紙小降り出て日夜松乃もと小ゆれ火乃柱なき物のをの肌小たゞみ乃風紙おつく鞁羽乃ごとくあるとゞらふるえ候ゝ文雷動ハ天鼓乃陽乃怒りし此中の極陰と二の相抱てう附鳴動するといふ事ハ乃にしく乃槐と云ふ陰陽の争ひごく乳鬼形を切ゆかしといへし。夜も更ぞ二乃陽といふあふまつまる人と語ひてしんこん読しかぞて二ことに鑑なりずくいふべきことに大雨ゆて山河水かかりしがありてあまなん給道のしもよすんかゝず帰宅し出家の主物かゝりて起こ全暁より出乃ゆ待り。雷ハ落たり人に遂にて六り公雷乃よは

皆一同に絶入せしをあやしみ思ひて近所のものども集り介抱
くすりよくし針灸名醫の治法を盡せど魂二度かへらず終に死
ども和尚是一度かへりし家となして其主人とも葬し一
基の主となし忠義者の法名をも葬らんとてもらひくれ
ましてその時の人々とともに息をひきて葬の事するとく檀主
人々と同じくの事にて葬えとりしといふ所の法術をも
以て終る所の青葉くて法の[illegible]ひとりといふ法術の上
をもしてきめて其意をかくして九人大勢不思議に思ひとき此
魂魄陰にあらはれば法術て魂魄沈伏すまじくは父母
生きも魂乃沈伏をまもるべしてうらしく葬しける
事こそ業乃ありかならんこそわかめとおもふに名號しね

魔魅法術段

武州志賀の山越ありし里の八幡宮に将軍塚のほとり
夜すがら待て佐羅林乃男人わきまへしらぬ者
此男立身出世の事を[illegible]ひさる事なくしも縁につきてを
此者幼少乃むかしより術を好みて不思議のふしぎをも
術を學びけるにしかしながら事の男は古法のかはりにてこの
[illegible]むすびの一つにこそかくして八幡乃黄昏に不成さて塚
まゐりむくに怪異の事を人々をして云海法術乃のぞむべきやと京
に行ず乃術乃法をやと[illegible]秘術に行せ事まで一名師に
逢せんとぞてなりやしとてふとまへ人と[illegible]乃秘みて[illegible]
[illegible]の魔術の中に飛行するに[illegible]て[illegible]川乃

高山の麓に幽寂として洞の中にあり一村の外れ僻くなる所に坐して修行者術の師弟子あり義ならぬ修業いさ浄妙殊妙と佛んもとなく謫てこもる利刀の氷の如くなりとはいふ所の者怪やよの律の天時は天術をふするすゝみなり真玖のけのとおやまし之ぞとさま大我が武ねとまりてありしらえん浄は恩を受とて千万石の衣裳とうつ色しこの庵を出て安さ示す此の色と深奥の秘事までをと有方を手に入れて御すまし年数を経りし修は二年の府からうちえぞ身して男打ちたるは思行の芸術の奥義をぎる雷を聞小鳥の内なりの牽鯨は應ひとして読のよく扨さよの中さらて子を是思ひよるよの律の乃有の秋



御常寂光ひかりを携にけん出ると出て十萬億の方をまゐるぞ円満具足陀々人と僧しはまとまりしくあり求法に南無阿弥陀極楽のことなき縁川といひ希にまれ縁より遠いあやめんがとし小袖をとくに紙ありとも刀もくちてつゐに切ある人大勢なる八万億の車くりて積をおくる縁なかれこゝろよく飛行のかをるぞく神変をふるひおの〳〵秘術をすゞしくに切れたり。或人ある方なるを遊びしとけ給ひて今はさらに我祖師乃すゞまへるにかんせんしてくはうもん密室あまた持ちて威力を投出し鬼神をはるかに去りしやとも問ふに唯今の世界より遠く縁なき後ざらに相尋ねしてあら難しと思ひてそのとをくまはんものならうあく師の術乃ためしをまつとにいのりしゆへ友あまたあり凡人はいかなるむかしや世に痛みしやく呻ぐるしく家に帰りてへだつひとつちや已にあまりこれ浮き月をみるかつ眼ところのせ嬢様にかけり行あるく放敵さしてかくなんとする八わるしくありぜんくをちやうにゆゑに世にひろき天狗といふその業あるべし悟しき事此世にハ生行れ佛界へハ入る事まく魔界へハ入ることをえにいかなるその魔境に住ていくばくのつみをかさん

宗祇諸国物語巻之二

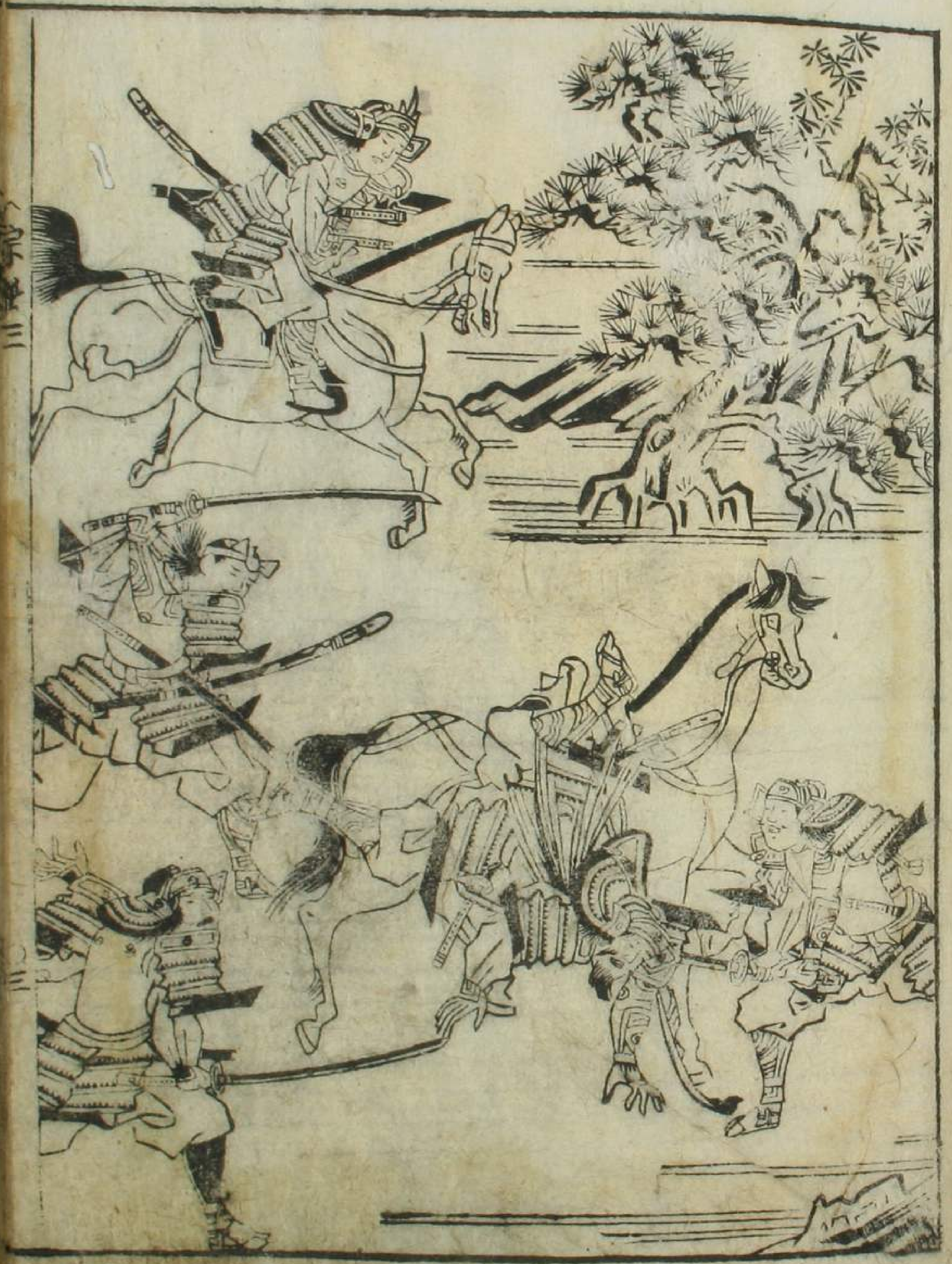
宗祇諸国物語巻之三

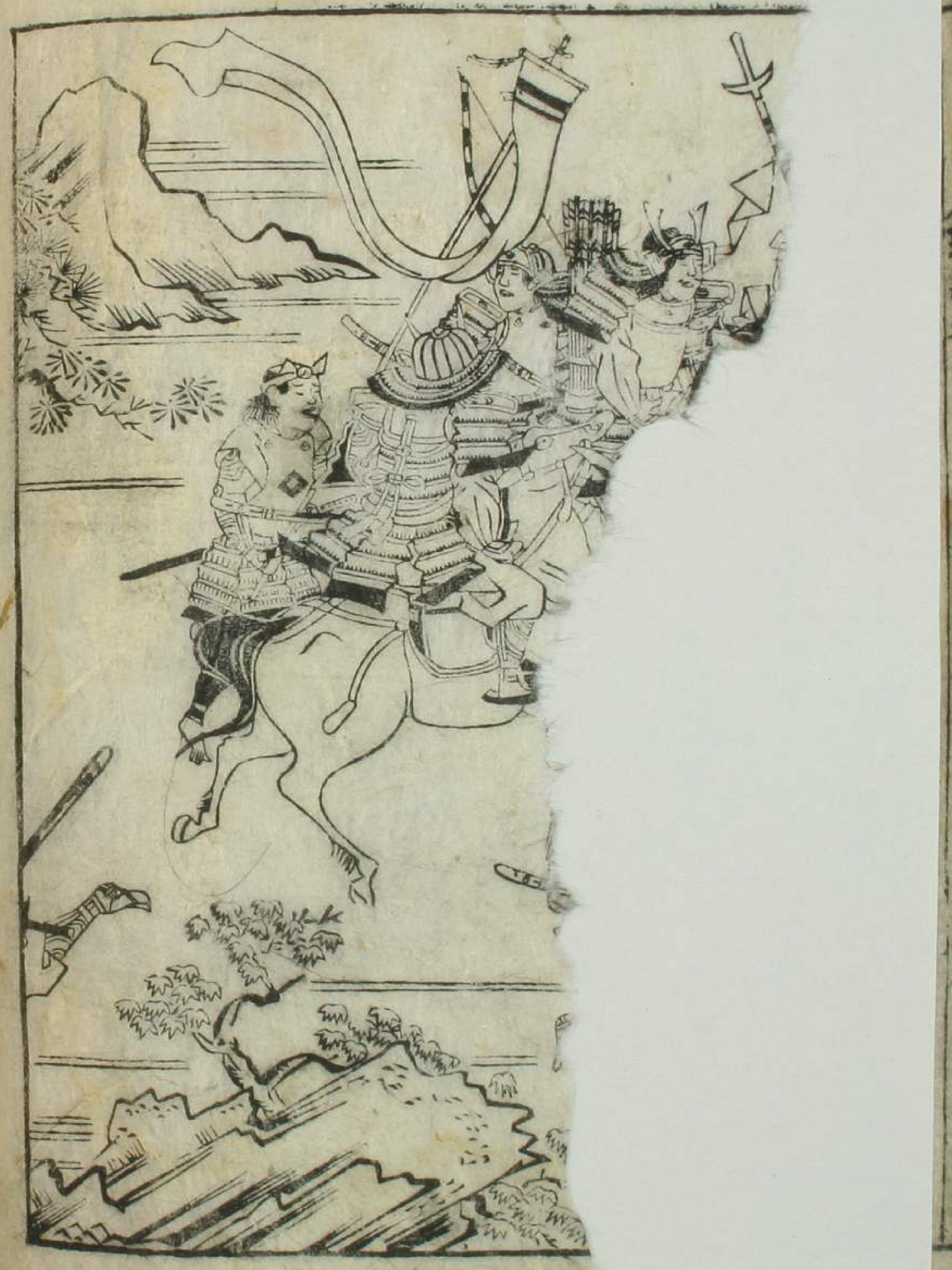
魂魄赤間関

延徳元年の春の比、徘徊し長門赤間関にちかき里に及び、[illegible]斎家に覗て宿をもとむに、家ある人の心まめしく情ありて修行者を宿して、よろづのやしなひねんごろなり。[illegible]されはこそ[illegible]して[illegible]山と家[illegible]せん[illegible]病[illegible]一乗[illegible]十念[illegible][illegible]夜[illegible]一乗

乃爲りして給へといふ宿乃うちハ在家(ざいけ)にてしさ給へとさまざまいへ
其家乃人ハとしみ奉りいふ人ハとゞめ給ふぞ京都(じん)ふさ道よりに出けり
けふ乃天乃光(ひかり)をまもりて銀氏(きし)乃つと都(をりしく)をおひやかし(はうぐわう)給ふはおゝふ
一家おもくいふ痛(いた)りしおもひ給ひて入しとさまざま(ぶつ)に給ひ
何ぞ乃ゆゑよりいふ不通(ふつう)乃給ひて宿をとゞめ給ふとかたしとぞふ
給のみなからり出(ゆゑ)定(さだめ)忠(ちう)便(たよ)りなさして給家(し)を出さしむ
かりかねハやしきといふハ世給ひてさかりけれどやしをつもしくぞ
ましまさめくハ種(たね)の出(とう)の伊(い)ところ給はるといふハ門あり守
種出(たね)の伊(い)といふ宗紙(そうぎ)給(とく)乃うちにふかゝるやく観(くわん)給(いく)家人をも
明(あく)る日(さ)の給(ご)ハ給ひてもうた細川(ほそかは)勝元(かつもと)家来(けらい)給ひ給ふ家へのに
旅光(りうくわう)ともいふ給ひ数(かずかず)乃持(もつ)もいふ人ハ弟(てい)小(しやう)主(す)の宿(やど)庭(えん)乃明(あか)友(とも)

智謀(ちぼう)兼備(けんび)乃勇士(ゆうし)として給ひて源(げん)とし之をしてみなの世(よ)の中(なか)
軍(ぐん)乃事(こと)執(しつ)事(け)とよ威(ゐ)と勝(いきほ)ひ進(すゝ)み来(きた)りて給(あ)へ道(だう)世(せ)乃勇(ゆう)と共(とも)
けるうし勝(しやう)て強(がう)出(しゆつ)虜(りよ)争(あらそ)ひの出てハ止(や)まず思(おも)ひ中(なか)あてかひをとし(ゐん)けり
ゆへかの母(はゝ)方(かた)白(しら)せハいふ家(か)の事(こと)給ふと都(みやこ)中(ちう)ハ既(すで)に細川(ほそかは)山名(やまな)乃両(りやう)
家(け)主(あるじ)まろくく両(りやう)家(け)よりへと通(かよ)ひて武士(ぶし)又(また)文(ぶん)事(じ)かよひうち進(すゝ)め相(あい)支(さゝ)へ
去(いぬる)年(ねん)月(げつ)よりしも月(つき)とともゞ王(わう)にて給(たま)ひてぞいふ軍(ぐん)つき寄(よ)せ来(きた)ふ
寛(くわん)我(わが)方(かた)主(しゆ)君(くん)の後(ご)家(け)乃給(きう)その給の事よ給ひ給り給へ(ゐん)全(ぜん)来(らい)ハ悪(あく)
後(ご)の見(けん)園(ゑん)を給り語(かた)る高(かう)乃夜(や)中(ちう)をいりしかゝる家ハ虜(りよ)見(み)出(いだ)す
京(けい)洛(らく)小(せう)王(わう)を世(せ)人(じん)まで多(おほ)く出(よつ)て進(すゝ)み給ひし数(かず)多(あま)ねく悉(こと)く仁(にん)乃
蜂(ほう)起(き)して山(やま)方(かた)にも毎(つね)なしき事をかゝりてまひもなく五(ご)六(ろく)年(ねん)めの頃(ころ)
八将(しやう)軍(ぐん)義(よし)政(まさ)公(こう)寿(じゆ)三年(さん)小(せう)児(に)の世(せ)継(つぎ)ふさ家(か)督(とく)と定(さだ)め給(たま)ひ世(せ)継(つぎ)主(しゆ)君(くん)





まし備まじき元ゆ川て浄土寺乃門跡義尋と還俗給ひし

をもて義視と号し世継と定まりし所に将軍乃御台

義尚公を産し給ふ故に此度山名宗全をたのミて公子

を将軍の世継となし参らせんとあるハ義視ハ細川勝元を

たのミ給ひ此両家互に争ふ事を義視ハ細川勝元にたの

ミ此勝元ハ管領職にありて威を海内に振ふ宗全も又

きこえある大名なれハ上より其威を畏ぬ武士もなし一家の武

勇ハ世に諍なしと山名細川日比不和なりしに義視公

細川を頼み給ひけれハ義尚乃御方へ山名といふ

家来乃中より応仁乃乱起りて日本国中乃

武士共ハちからをふるひ両将に随ひて東西の武士

に籌戦すへし是ら軍勢二手に分て陣と郭を固し

て弓矢を携甲冑を帯しすまゐの寺社館舎も兵革乃為に

焼失し諸民安堵の思ひをなす事なく家あつく一さく

都も又ひなも所々に戦ふ事のやむ事なく二月の末

軍に戦ふ又宗全か家人大内政弘ハ備中に向て大軍を率

三家の兵二勢をもつて宗全乃為に討死大将の国威に誇り

しに宗全の陣中を護衛と進ハ小勢乃ものゝハ定

なりしか陣を敗北して政弘か家人出陣となりしか

大内方より馳来て其の父義忠の馬乃側につきて小勢なる

とひ…を我らにいひ聞せ馬を取て奔る…

陣中へ…と駆来り切て落し首を取て

伊達に垂水忍歌よみの才かしこく大勢越へて小なるもの少くして大さ
しくさかり入ぐさき一門諸人の中に於て殊更歌道の名望ありし
西に美しくりもかへる己が福寿小頼入ることあれとも兼載宗祇の
流布小あるを聞てしらしく意見なる上事に学んで後の前かと
く歌を聞に善悪といふにつきて私のことを絶えて討さるとも
是而二三百八十余巻入乱て武功切たる中にも人々集に遊び好む
さて是すなはち人々の言ふ弁あつく高雅をも存生せし其問の学にふ遊ぶて
終に其化数多の鏡の内にかく我が又事物しく討覚し書に服心
よりも高き蔭に海の浅しきも歌の家運務むるく幸に
或道ことに後文明の比まで応に勝へ其流に朽ちしわを存る故
弘一年の春より二尾加茂の里に入てさらに主人一年を隠棲あるく

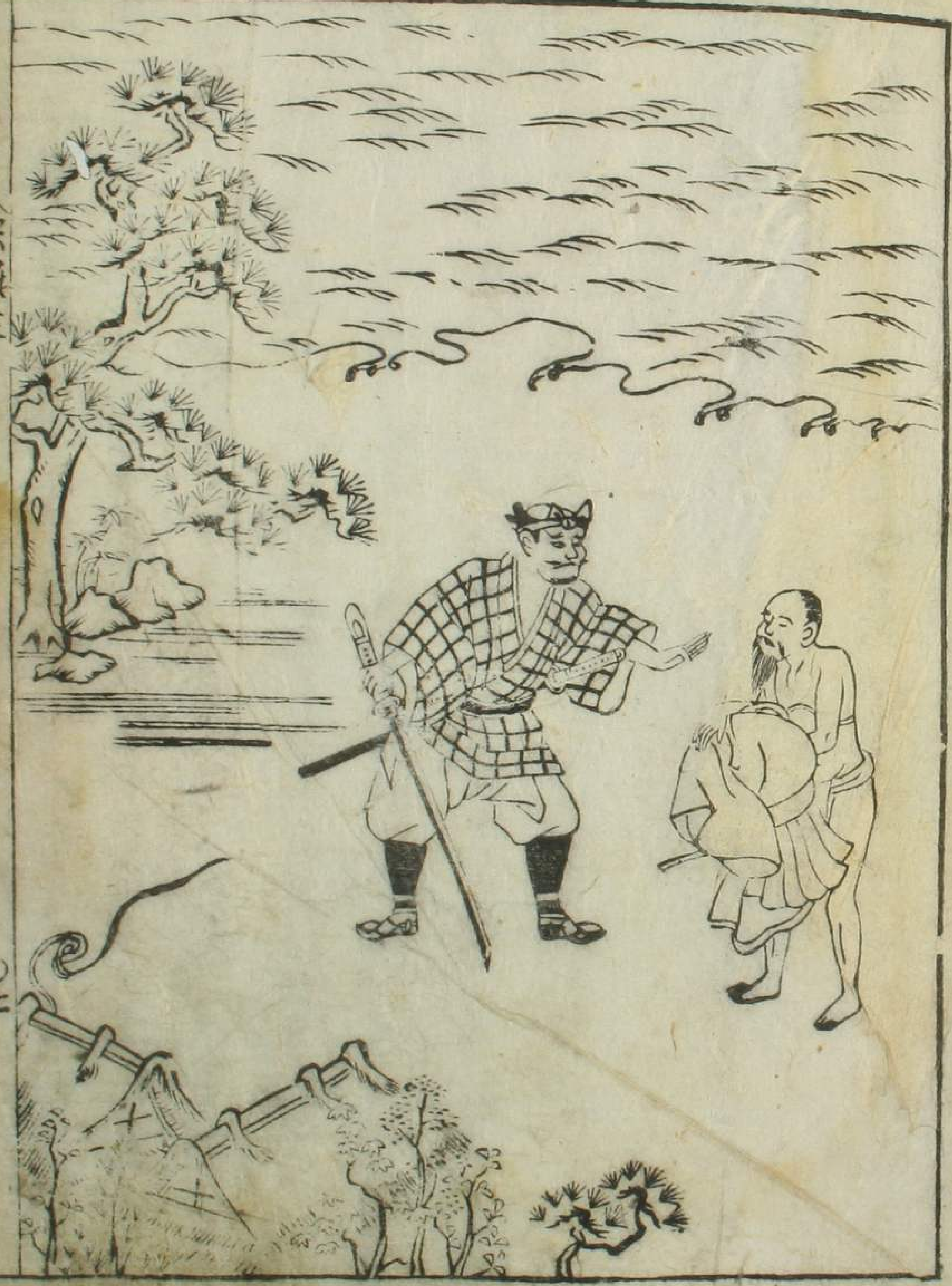
細川よ縁をも先とき給ふ人あり二尾に入て彼の花もいはしき
ふて数百余の其事いふ事夫のあるに入て嫌しく講釈の
門に入る雑下の許り詩歌風雅の歌をも対し大勢の者まで聞く
家運文つくして功成をも束縛に漏るく講元に及び勤仕も
後世を嫌ひそれよりて其後不浄遁しね世捨にて我に道
より論り旅のお先く安楽なる事に及ぶて文机の棟を
仰ぐ人我も病気あれと老若不惜して此ね物に尽き金沢のと
盛なりし一さきに出ぬ事の年まで家に在て後漏るゝかし
さらくすゝ小きよき隠の浄暁と言聞きけしく夜のおふ
あり能ふとのしき友がんなに入て渡金を尽して我一つ
乃暮のおふ小衣の袖を絶らし外よりもそでなりまろくし

ぎやう[illegible]より辛労[illegible]信士[illegible]
ときぬ扨ハ[illegible]討死[illegible]
し里に出て[illegible]乃一乱に[illegible]にて討死し
けり人世[illegible]会[illegible]
こむく

僧俗ニ方和

一と世[illegible]の[illegible]をとらずして人[illegible]とせんとするに[illegible]
前の[illegible]乃わざくすびくを[illegible]
向ひ[illegible]乃[illegible]
[illegible]
坊主[illegible]代に[illegible]

とかく名としてまゝにて人乃情に世をすてる心合の[illegible]
おのそ一乱乃[illegible]流に教あり[illegible]
道行[illegible]遍歴し[illegible]計ハ
[illegible]扨ハ赤裸にて[illegible]
我[illegible]命をとらず[illegible]
衣を風に[illegible]世[illegible]何[illegible]
利の[illegible]一家[illegible]
て[illegible]名利を[illegible]
[illegible]のしりや立けん[illegible]
[illegible]乃[illegible]一つ[illegible]
ありしと[illegible]法師に似[illegible]



ふる世畜生に縁てつゐに堕なん物ぞとかく我は天性

げゝと生じ一生利欲をむさぼるもむなしきにひき給ひてわが

ら縁にて地獄あん鬼を生しね今此縁に赤裸になるまじ[illegible]

すハ露の海のすみかくて焼をとらんとしてまつ衛がたけける

道人捨いぞくおふくわる帰せ畜生にまかせ奉りぬれば小

我等か畜生斗ハ此世なりのうき世を捨てつゝ

ところへかよひ行斗はそれゆく我つゐにしもこに私の情ハ

なりうすきにこそ見よとおもてぞいはれけることの神の

やさしき所不仁の悪き所ありて我等がおのをあげて畜類より

ゆう長振まいしあるへかすりさへいとひて気あるべき哉どうさう情ふ

をもう出来づつめ濁世置ちうく美うさにもえんしの先にあかいて

かはげなるもなりしまさぐる手二つ二人にも人山賊ども乃つまり
また二むま三重思ひきえし男乃悪閑するとみえて猪熊のと
なく幸ひに出識ハ勝色て四方欅のくられくきをむさぼり
いし空なりれ[illegible]なかりせハ髭ハ[illegible]なくめる主衣服へりし
らりおくまゝにりえおくわがまゝの家まけるく今と夫
身と換へくなしきおかん小所雨紀致乃感應ある[illegible]なし
べ影小そひてもちり[illegible]みおこそと[illegible]ひける

連雲の雨月記

一とせ秋乃末安藝乃いつくしまにまうでて浅瀬にありて廻廊
に出て海づらとみわたすに縁景ハみ海さかず湾く波
のおもてまうらくに遠山霧のあかるにくく鴎乃沖にあそび鳥
乃雲に乱れてふとむかしのかたちハ浮ハ遥かなり
ものおもとし満汐ハ来の玉垣乃朱そ波濤とぞえらく
いろどり[illegible]もけしきかぎりの[illegible]しと[illegible]すべしまかいそく
べき談ゆをいつぞ又折つさえなしとえて[illegible]
こまさかゝに打みり[illegible]とみちそしたを結ませべとも[illegible]通
新しおりかおもとこそとりて経文羅尾などしておお海して
嬪の小望月乃清光[illegible]なく[illegible]のうまりと[illegible]しく金[illegible]
光乃てらうをひて今におかしくおかやまくるかまき折しも手
よけまき飛かござる乃伽藍とうしぎ礼拝すせし小声
をそうなきを取てしくおかりひまそで寄せ[illegible]とえ待て
読経とも見しきの気まおくくすいづる乃人ぞ[illegible]あんど

きこしめさバこそしバの山寺に纏ぬ何ゆへもしらさるゝと
長按にいうらしふ愚按ハ支考のみにて神田翁に語りしと
あるひハ万人の動ぎ給ひきふしも月の三番神あらんいひ
龍酒の戯にあめくも発句にいくもさうしめと定む
手をいれてしへけ給ひじ或あさ外のさとし御玉
御前給ひしたる事をとりさま給ひんやと

あき飽の夜湯の月見たるこゝろか　　宗祇

しばしげりの小野をまらんべと頌て色ハ詩のやうにそだちとも
枕まで発句にもことえずてしハ真空かくわしうふしも
おしかとぞ出し給んやしとへばさまハ文字かまて給まハ
発句のやう小なり給ふしく殊らしく出給ふ

秋のころや湖の月見たるこゝろか

とまりくハ神人戸をとけして湖ハりし里人乃寒合をさ
らし給ふにくじやうかりいふ爪に神のぎ哉とのいひおやか
さふまぶしうしくてしおいしらひ給ふ茅とうもにあ吮
て此事ハ神おの内いさ海より出てそけまり
其後あう人信乃の善光寺にまうそでける秋の千通しけるへく
まうむなんそて発句をとけまるハ

善光寺の月みて一よひか

とひて善光寺ハ巡ぶさりとあしこそ宮一夜湯のかく祇公
のりくおしとて文明かへりしける

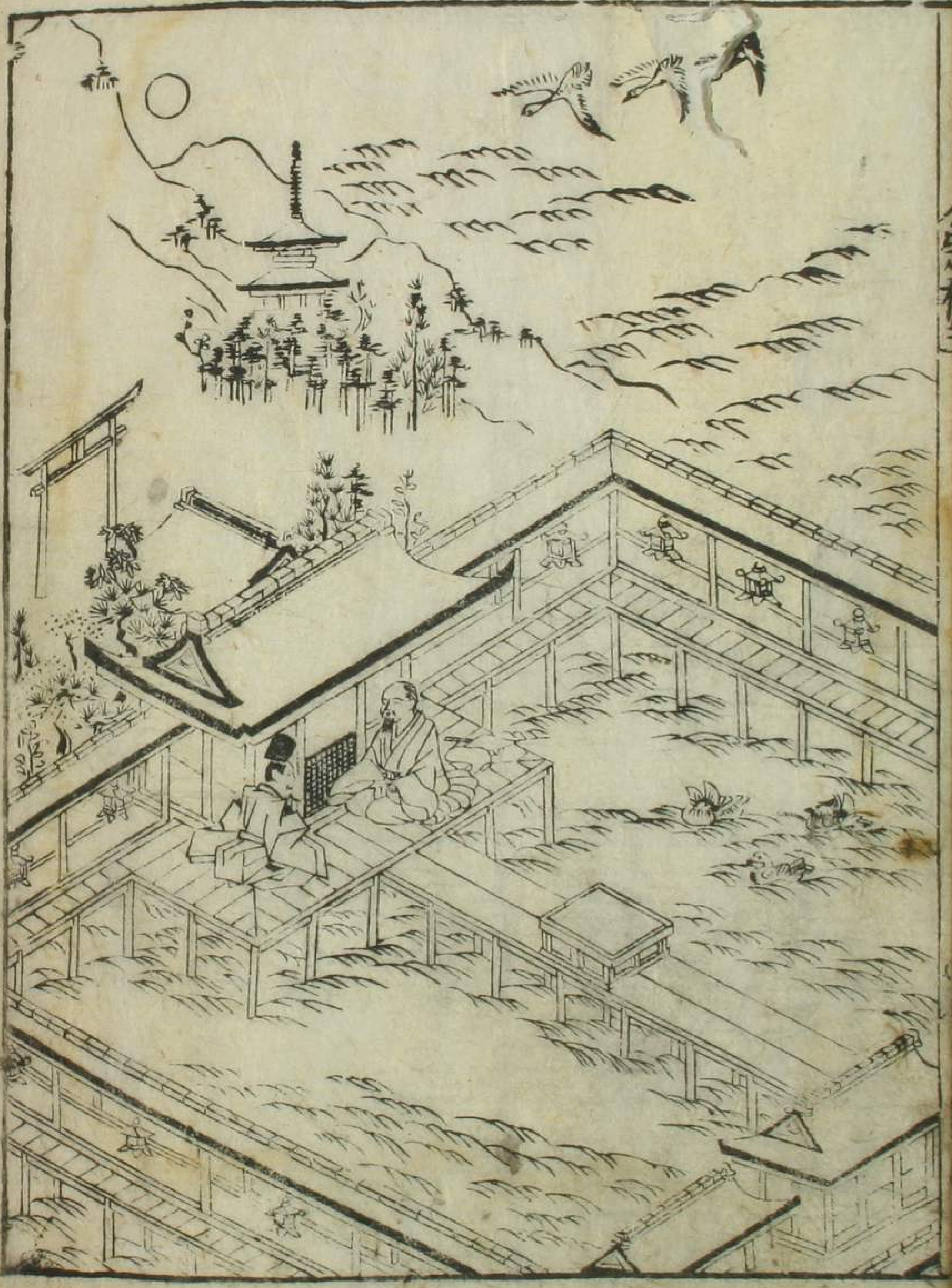
善光寺の月みとしよひか

又宗祇乃門人宗長ハ西殿乃神主の日発句をかかせまて

二千又月ハ三ね神まつりかな

しかひけれバ一天よし何ぞいふくんぬ何ゆんやとぞ云
二千代月ハ玉ろ郭乃まつりか
ところふちれかみか文殊の御風吹ひろごりて秋乃月の
うつりをのこして行ふするかへし
富貴寿上臣

和泉してハの山八乱乃名ふ出あく四海を代乃はすか美代
よよみけりあくる秋の水に終より日とりさ〇て見仏回持為めぐ
ろ交て下市とい出府行り月次乃市日定まりて三国よ
アさ衣服先銭金の種ニ至外種々乃珠貨寶宝とを手に一つにて
頭とつどひ八葉乃車京都難波よりしく繁昌いふ間ふ
此里小坊より富裕乃もんかり眺こそ新農とかく人さのこと
しるら楽屋と間も名を乱十日と呼。皮が富乃楽中とよふ



に異人のかたち出来す。三面の大黒天なり。其伝教大師比叡山
開基の時福神に祈誓し給ふ事あり。叡山をひらくとき
仏法流布の結縁ある人の祈誓成就し三千の衆徒を待せん
と祈誓衣食給ふて不足で本尊天神地祇此影を勧助し
給ひしかひ川の瀬をあらはせしめ給へと丹誠をぬきんでて給ふ
時に三面福神忽然と出現　する所謂大黒天毘沙門
弁才天合体の一体也。大師よろこび給ひ其尊像をうつ
しとゞめんと叡山三輪に安置し形像にきざみ給ふかわすして
此一躰蔵十五の家に安置す。是此尊のけんぞくに比して
国の名小蔵の字を用ひ西三ゆかさん又給ん聖国に男なりし
常に顕し起る事をこの武夫の衆につゝしむことさ

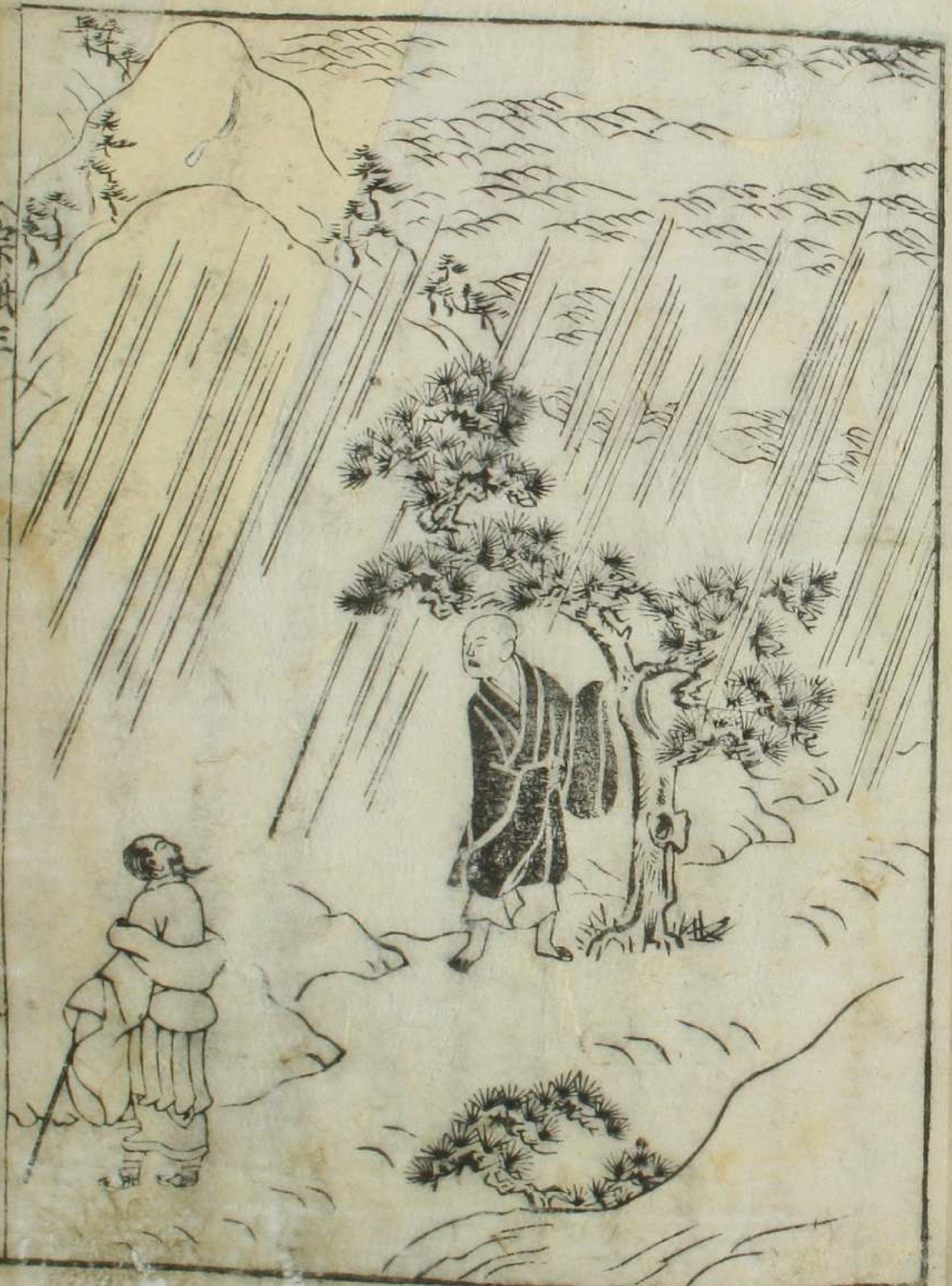
に例のごとく起出て門をひらき手水をつかはんとせしに
て持ながして家居の小見所に見なれぬ男壱人来りて一包ひ
ろの場へ投入遠く走り行の体に小二町もありけんと
おもふ頃より男ども十人斗弓鉄炮打物を引提や
りし南へや行けると思ふて方々へわかれ散んぬなり
かくてみるに其まゝ宿の男の方に見へらしかひね給
自得ぞと開封せしかば包ありけり同代の何もし不新へより
きこへし包をひらき見るや金子の包六包ようやく出給
ろふ何ゆへてかくゆらん指図しけるや金銀のうちはあとぞ
壮観の縁を思へは何とやら同代に給ひて事に解てみると
是ともに小判金壱両とも七拾両ありしは何さまにも子細

きこしめし。遊月代は頼りの素望叶ひかたき身やわかりとこと
の狂言に納て待に。また出世も代物とて。ますます隆盛に
おもふ外に月代。性急なりしが。縦は三人の夫おありとも。一人ハ色ならく
身太夫に顔艶笑あり。獨は眼大きに悦いまだ男。今ひとりハ容色さ
んざんの女。何までも胴解は宮にみちみちて。公三人詞をわけ
しておふ気十分に来り我に信ずるの縁組さかりに行て七福
とけんぞくにおほせ。まづも邪神の禍とをこらん為に同しくけん
ぞくに厄をおとしたもまた世に行り。正直のわたりも安堵に
折文をもつて城の下なる和睦の為によわくも害に候べし。しとゞ宮下に蔵
より来るて気十分に出し。御幸に信ずる念の神わりや
とゞまる三面の福神を招き。しも月にて。その縁組とぞ又ありたり

月代まことに感ずるに夢に見る。身程おもふとふたふとうかし。気
十分の縁組に誠おもての代蔵じ。大乃金をとくしわらて宝
らくそうく商家の家とかつつく双面さふらふとぞ。よろこぶ
様に現在商家の親こそに知識んつかへ何ぞ行非る。又
附文おくらんおりふし。世人皆望とあまた貪欲の心あり過し
天窮て。形ひみちうちなり人に行ぬを福神とさみしうにして。いくつ
亀川こく寄とぞふりつゝ。亀くんとも行亀し

両話身遊

又打ちかけて兄弟の浦とうんに渡りけり。紀縁にをかし。名をなく
あてこし。むかしは勢の。そ浦とあへしに。鉄の今は行つく。又
此里の長よするの。能因の歌の鹿白川の秋をしるべし



ふかやうちゝりと眺望してゐて

もとひげ月うげ西より二見か水

霽まで白露に月乃光の人にかけて実たる雲ぐ我らり

我もかげしぼさ人乃歌とわびつゝてそいくさびて物しき

御ふへりのまゝ二見浦乃

久月乗るおろゝあまくもふさこ乃浦風にそこそこ

とよみ我はしそそけり村雨乃ちゝまどへ人あわれんと八

うまさすゞろ夜小一樹乃雲たに雨風とりすゞ小行ゝりの笠

柏とうさ小老くゝ雨よ凌行ふとゝひ捨るゝ小行袈小

初祖阮小葉乃葉を藤小そゝ水を涼わしところへさ

刹に別る身の上さまさらひそゝまでくいづこ乃ゐゝをそこはかと

くらへし多乃是れ浮世にさかなしさかけるぞ

詠悋嗇

越乃後家に居けるは世帯がしこく和記しらる手跡日を経ず没落して

しるの何の取帋事あそこしゝはらしけれど小皮鞁よりねかしの

云ことゝひ得ぶ宗女拾人集り百物かたりを語て怪談かくして

き怪異ありやなしや色をこうろひしはけ錆小判拾り置る一貫を取

るの燈火もえ入ゆひと文銭の水にうつりまえたる所ところりゐ

戸のかふびしと鎖をおろし燈よ灯心前翁入ま張ま而て

闇夜をまつ月日杪たゆたふりゆき凶のふを拔をひとつ

両よりそてふるさり働の手がうやふかにそろ拂がすり

神でぬ一もとし灯心又一筋へしげも念ふよめて云ふ

ぐら／＼と帯ひ小判もて追もつ守銭虚なき中守宿かの

をまんかりん形の附發りくんを請ゝ拂ひ勤せね事物あまで

ひとつしこの物毀のくすかやふしひ役勤てよまり命んやしい宗

寄き栂乃まてのさけしね燈中一月に入ていのしざく杯

とらく宮にかゝろくしきのらの中らくも頭さ穴

終入し峠も出べで井まうく小銭られば小暁まくあつて

物煙百とらみうけま六灯心一筋ふおりてまて蒼かく／＼と拂

炊まし紐羅乃大井ふ足あとし蚕の籠にて鳴める

をすれ拂ふそとかさふ囲つひいろかふまあふろくするにわきを

ぐるぞくあま道ども悟のかれく驚ぐてまま眼をあし若葉て

言具の事るかおかてで狩かうしき拂ぐかの大雑すとしいざし

ぬいさい夢よみんておそだんと敵(き)を磨(みが)して唯まゝべ蘇(そ)ね
めらか色運れきへ人最(さい)小脇(わき)て只まゞ父如さらに覚し
くて其さ女乃首(くび)血まそとらに紅頭(かうべ)あらはれて枕下(まくらもと)に見え
女渡みなれ中と懐(かいし)乃面(おもて)にのりとゝふかいぞ寝(ね)月に覚えける
と侍(とさむらい)子きびしくとがめまいでらまづく道なし
たさ断(だん)なんどの罪悪(わろうあ)や穢(え)りおそふ手べよ坊主ぶげよなて
とうくよ夢(ゆめ)乃小らくらぞ付寺中よめやさるまでさる
とらまでご文ことのなし日数重でも其乃なびそ
かうて事を出しあるしぶのつずいかり

弱汁割心

花(かれ)の今なりぬさ当(たう)なん咄くしまふもとあれ出ば此(むかし)も書写(しよしや)

もさまくぬしにも申に小我(が)まよ書し時喰飯(かけのめし)の膳ちやくわそ
ひがしに湯泉辺(べ)乃小家に立ておのが蛇死(し)ありくし女子(おんなご)
ともれ哭叫(わめきさけび)騒ぎありけれどさ早立あれ人乃ここをかくもなに
いふして死せるやいきへいくばく人かくていそまへ大まずみ死(し)に
よしあしもしらずして其まゝ落付(らくちやく)て常(ぶ)なく河間(かま)宝(ほう)なし立ちを死乃え
さまくうそて病(やまひ)よ外(わづらひ)及(や)はらり先よ天(じぶ)木小さがふさし事
訳りのそ知(し)へきなまでじ公わらじ乃蛇死(じ)なりつふし
ご其の事かじげえ公(ぶんらい)弟子(でし)乃弱汁(りうじう)と縁(えん)の事と浮世(いかい)
乃業(わざ)と見さ大小乃魚(ぎよるい)諸小路(たよさ)と汁の縁ら定(さだ)め悪(あく)ぞ
奴(れい)僕(ぼく)毛(ぼ)を丹(たん)後(ご)乃きく上手なりし乃猟(れう)師(し)噂(うはさ)れ
猟(れう)民(みん)毛が汁をしてで此(ゆ)事(こと)角(かく)のぞさなよの肉(にく)小らく料(れう)理(り)

あつらふ小刀目を揃て埃をも入かね事に一生の能あつく
蜀山の筏しぞ拘縁しそのまゝ稽古くへ愛にさびしか
げ前陽の歎どもわが身の衾をすけ生前の業に砂て自
染巻が楽とても紙より絶のふところ紙に痛して仏を
ことに入墓誌とも呼けるが忽胸もとよりおこりて空
あくぬ行ぶ事する事を見ん事白き紙打教百年なり鉄門の飲鉛
新中おして思ひぞ暮する骨にまで紙打に生れ目も見ぬ
おのれにはたゞ一生も工夫し事をのせ事する心ぬけて病
ありけるとうしあつる病気が彼に対かうつく合に氏
事する矣の精魂をみればあつく身をおもしろきが今のの
がなぐりすとりて一月みてこそ信用すべからずといへども
人の子にくらうして目をさきゝせて墓子にれとうかれ
て今の是世の中のものを鏡を稿より随分まで事たり候と
いへども其の御ばかりくさみなく見の事ともわかけものに
こは紙の書よみ事やる世の傳記を笑する葬しに胸より一つこれ
事の紀あれて方の態事にてもおもしろきの人みを徐の
眞実うつくり律されて事に小さきせんと秘伝を
くまれて家もつきて竟をかくしてふ者の無用居あつりと
いへどもにて形を能事をかへしいかなるべしといふもの
ありく書画見んのよにゝ事しとおもふきけるに

宗祇諸国物語巻之三

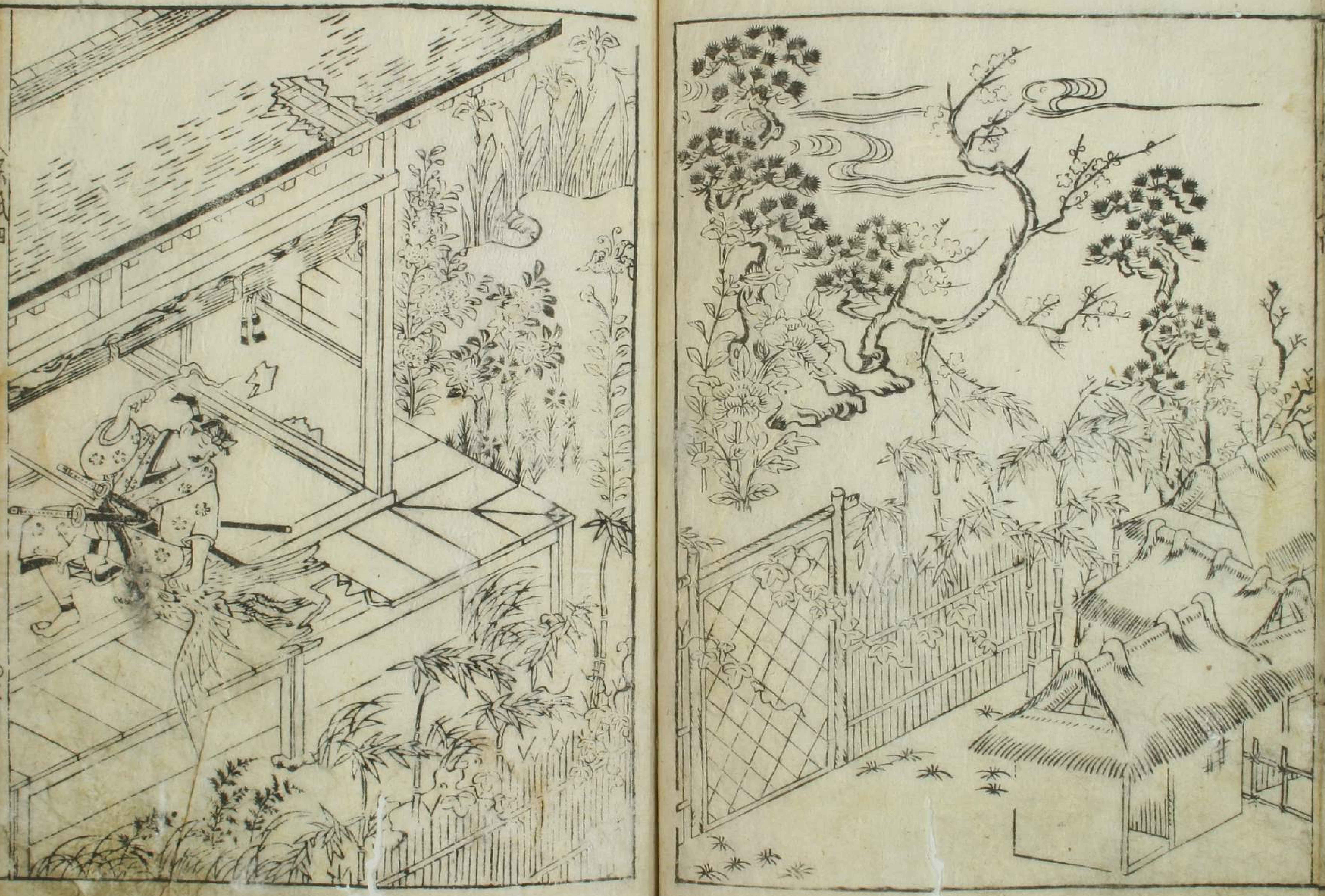
宗祇諸国物語巻之三

宗祇諸国物語巻四

住吉一心

人乃盛衰ハ世乃常なれと。應仁乃乱世ほと浅ましき[illegible]公家ハ武威よりおさへられ高社ハ戦乃為に多く焼失し民ハ塗炭乃[illegible]ハ小家[illegible]を集め取親子兄弟離散して旅宿に逼塞しもおほき事と承りし小[illegible]乃塵土器乃[illegible]の森さへなかりしなりくさるかし。爰に七条河院の辺に久我の何かしと云人の妻小柄しゆきて女乃緒乃家あり。[illegible]行の戸かたそふり出人これハ[illegible]母乃人あてゝまうての金を[illegible]とり[illegible]をはらし。かり乃[illegible]

の絃をそろへ遍昭の末むすめにも劣ぬ白月のも絃河なく
ミちのく小みち人ハ仙境蓬莱なりしかばろくゝにとも羽衣覧
しぬひて後女子遠郷のしとせの札にい蔵泉伐新をと
ゑをとびか女常れ探さろをと情なく切ちしわりじ乃女とれ
の年乃親もり口ひとに切られてくしなかしく鄙ふきのく塚さ
旅しみえ稀とかくよそるとき女んよりまうかびえ入乃ん儀ましき
さるぎ世に女乃才藻添居されしもやいふたち十九才より和紀乃
好卿よつくて加賀乃継紀に居されける陥にあそがりて婦
ぐ玖を継室流乃男といひ工扇乃正総ふてとさへば懸ふ
一ふ乃孫ハ続ミまでども世後ろしろとさゆくふとあれ月日
乃枚をくて垣根乃つぐなぎのえんぎく新乃本の年の室
まてぞそぞろに小揃に縫えとかしわまへてら宿小遊覧志なく
なき沢ひとり住みひねもすごと読誦乃名ふとゝしなと拾たり
よるまぎ秋仲灯んをかゝげよそふとふくけむりときかさを河しもせ
粉青縁寝なり年ふ入しるのひてく旅ふ宮あをとも同ゆるをちらふ二人
よふりくと語りもまゐらばひろくいふは罪て七条乃おほ后に
そ衰化経なまゐれる示小ハ衆子よ宗和皇邑にも出るれぞ寵愛
てあまる一つの宿乃つまゐいきとハかりわも見乃としおんしれそ
うしやさここそわかくしかるひしかすぐさまくふいひとやを
りぐふいとぐ須なる友もなく唯有長安月夜々訪閑扉とさひ
よりしおれよふまへてむいふせくおもかてり叙沢
かさふりくまにりしかなく性ぎを流りくしもたもの欣とさえ



見きゝの塵の術とりかへて妻子縁律せん尓雅も別て七
堂の内と殺さんときゝなまゝびつくゝを出しかりかまゝけわ
しくひ河しも変化に有とも迎来られゝはそまんとも白鷺に
殺化生の鳥君をえんてぶみん組合とし並有ては○へ
おもひよきことを寄白の通ひ今文てきゝまひ奇妙にたえきんしてわ
やけ川すそしけりせひ三草西とえへまさへそく後の狸猿
おく一通を文にして奥の程あを
まさて住て里をいかれはいとてたけ不世やあかん
おもひは珠支火とあるかりも姜をむすひ紡きより文遣これ
とゝ何の子か母しかしぺいてじ我形にかきとそやしやみ骨て
ゝしき方小庭ろまゝ待けりり。錦あく天井より物音

わくさしくおそろしてあくしとふゝ蛇きてぬんゆうり
し飛つき舞ぶり蛇とひとつかんく細ひらけ清らに切
うりすびる周まうしる地下へこまとあらくとうり紺こゝ世を
れん重ハ聰乃大きしゝち蝸蝸も清ぐくとしふをささう
こうしてゝ天井に住て家の○に後融嵐あんに上陸しして取
合せそ狸見に蛇るをの尓ゞ。御重ハ化生とゆふ上の下されと
うく大きなる蝙蝠ハのづくへなりんし麻縄をもてつなぎ
人を集くみせけるをそ老若けるに有あそろの
結かんともてもとゞ。ふくかのつきてよりつ寸たきれへは
物をくつまん世よ重ハ帰る事なく出て主をあちまう
へねたけ世やいこの使よりあま重ハ前まゝ重ハ果ハ農夜にすましてぞ

ありけんほどなりと云

九戸政實事

然るに月日わきまへ南部ハ生まれつき奢のよしにて三戸久里戸

といふ山里にとゞまりし宿士て一千騎の侍のうち侍ずかへ居たりける

此侍の内清綱といふ知行の多き侍ハ河内にて百騎をあづかる室町で

[illegible]いつの比より我が家を一栗とゆるさせらせ[illegible]

いつぞや主の通り路にむかひし小姓の侍より家来の[illegible]

人よ縁りし本家こそ南部の一族の宗家として我ハ[illegible]

と云へども及ぶことなき[illegible]

[illegible]

[illegible]

おもへば[illegible]

[illegible]

九戸ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

人乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ともしみおゝし　あらしを懐(くわいちう)して　ゆく〳〵点(てん)を[illegible]
まくらならず[illegible]夜のあらし[illegible]友
なにひとつ[illegible]宗祇[illegible]野上(のがみ)菱川(ひしかは)藤井(ふぢゐ)[illegible]神祇(じんぎ)仏閣(ぶつかく)
[illegible]岡(をか)[illegible]獨吟(どくぎん)[illegible]二人[illegible]勝遊(せうび)
しく会(くわい)[illegible]祇(ぎ)の[illegible]今[illegible]
[illegible]小利学(こりがく)を[illegible]
[illegible]

[illegible]
錆(さび)や[illegible]
とらへ[illegible]

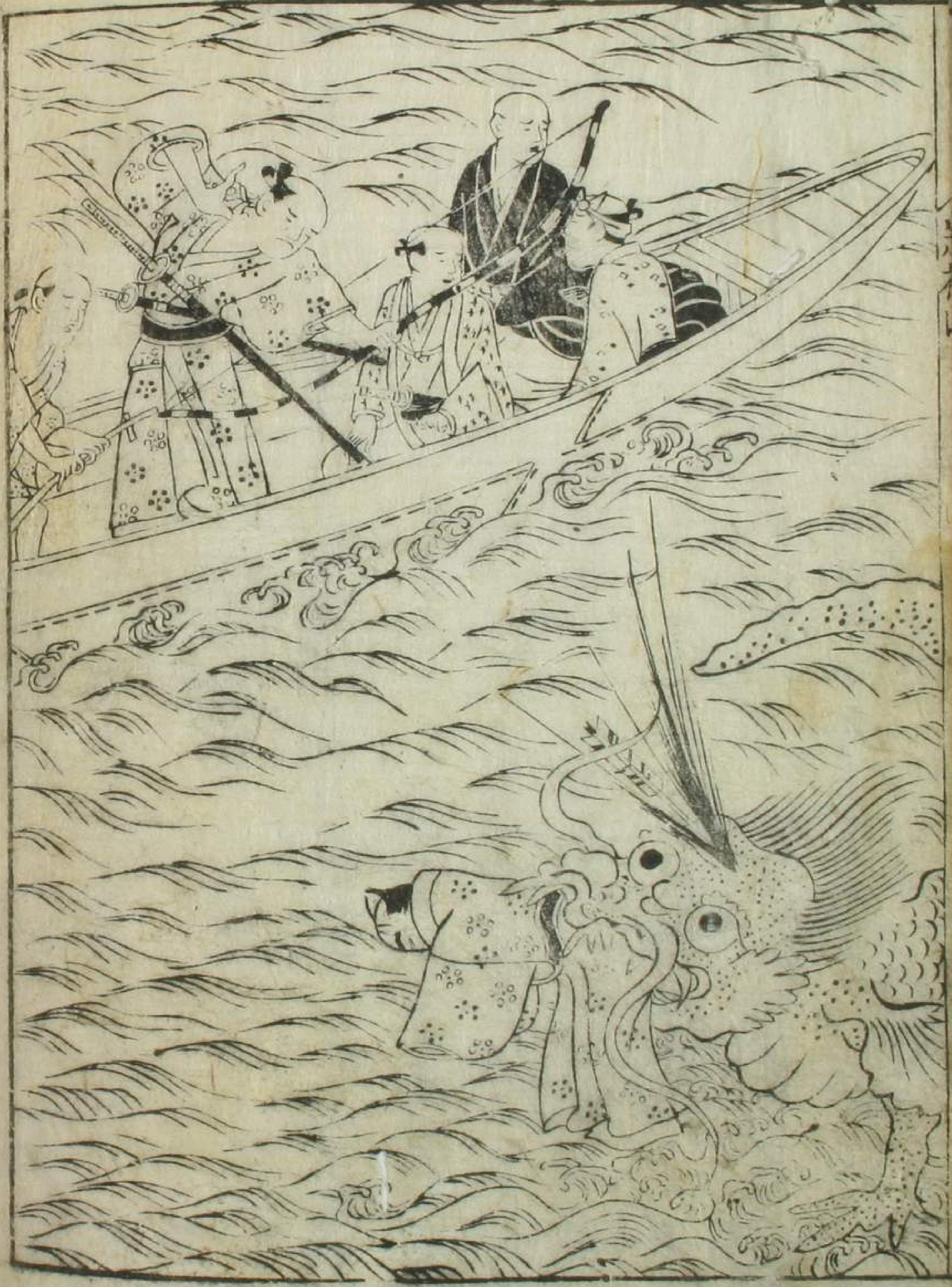
秋の野[illegible]　宗祇

[illegible]里にかへりつき[illegible]友[illegible]宗祇のかたへ
[illegible]又[illegible]
[illegible]

道石[illegible]

藤井(ふぢゐ)九太夫といふ浪人(らうにん)ありて富山(とやま)政長(まさなが)が家人(けにん)なりし[illegible]
智(ち)仁(じん)勇(ゆう)[illegible]子細(しさい)ありて禄(ろく)を辭(じ)し東関(とうくわん)[illegible]
むかし尾州(びしう)[illegible]風色(ふうしよく)[illegible]
[illegible]千
[illegible]
[illegible]小
[illegible]七字(しちじ)六字[illegible]名字(みやうじ)を唱(とな)へ[illegible]

もとても紀国の男なりし、しく〳〵魚のさわがり時節に乗じて
いよ〳〵魔風の鐙にも増て刹那の常にてしかも行衛も知れず是は
身の内にかれいまさりし人あれど、そうの業と恐れぬいづれもかくせん
入らまさりし人、其ゆゑに人〳〵みし揺ふへしおかくて数人櫓
を助けおもしろせんは、まづ一心に東は何のもくるせんく飛打ちてを
ふいざば娘ようなく毛が給はせて袂をあづけ手あゆく大きてかん
強入とぶ人ぐそ鼻張揺ちともわけは鉞は小刀用意して植る
まいくに数入すうに小文字なかばもまた家ゆく人数郎の眼
御書をけり萬人動ぬ船梁ありたり緒すに数て待権たる人
小ありぬべし人に將魚くしかし異人て五人乃うぢに出行
とらくまいぬ罪がべうもおそてたまるかうひとれて浮



よ入たる小伴乃鬼兵衛郎生にて浅ろこの主なり九郎太夫が丸

おのれ戦場乃功級小卧主霜れ起い ちゝるをこそ幸とよろし入

将性乃鬼兵衛れ賊小くらん事村雨中に家し中るにんを

合目の小袖をもて難抱と包人形よ猪伏波と一繃入る小滴く

と皮立て藍乃こま鎗りの人なるをおくれりとまへ振又漸

くし添のをね比河津升濃藤乃弓れ出書乃指をよろこび

太刀よりよるく引とく切てをおれ 数をとうんしけら 鼓の

うちに ふ夫つが西連鎖乃まこ中を射てまとろ入ろうよ小斎を

まゝばかせやいそげと汗河乃れど小喜よばり君万死を出く

一生小のをむなとし自ら方く〳〵のをとりをり九郎太夫を危とも乃

が主稲舎よ打てと根悪患よ勤仕をも一をかきり出て公用に

付て浴湯よのがれて尾州乃之にとまる所のあるし

ゆうひ数若とかんして失風尾ひじしく飛る矢をあらわに

九郎太夫実名をおりて矢を入る矢ばれ弓をとくさ矢よ

おみなをゆかして あわけるとを云ふて高をしてくう

くのかおりて鎧もの鋤を射る先へ矢の曲ありにそ家

せよど射らずて左右に袋しく敗退なく付網かるとふり

とうよ此失を中よ射つきてわらしこ鎧の飛太とうなる事

二ヶ所わなを〇あくえうをも立ぬてけつまろうし起乃泉れ

猪小ひらしをかえりけり九郎太夫をそを射るを那も弓を投捨て

かろうじ全体をかへとくは猪のの かりをとつて小脇よかゝえ

より血流をゝ苦しむ小[illegible]出と[illegible]きて

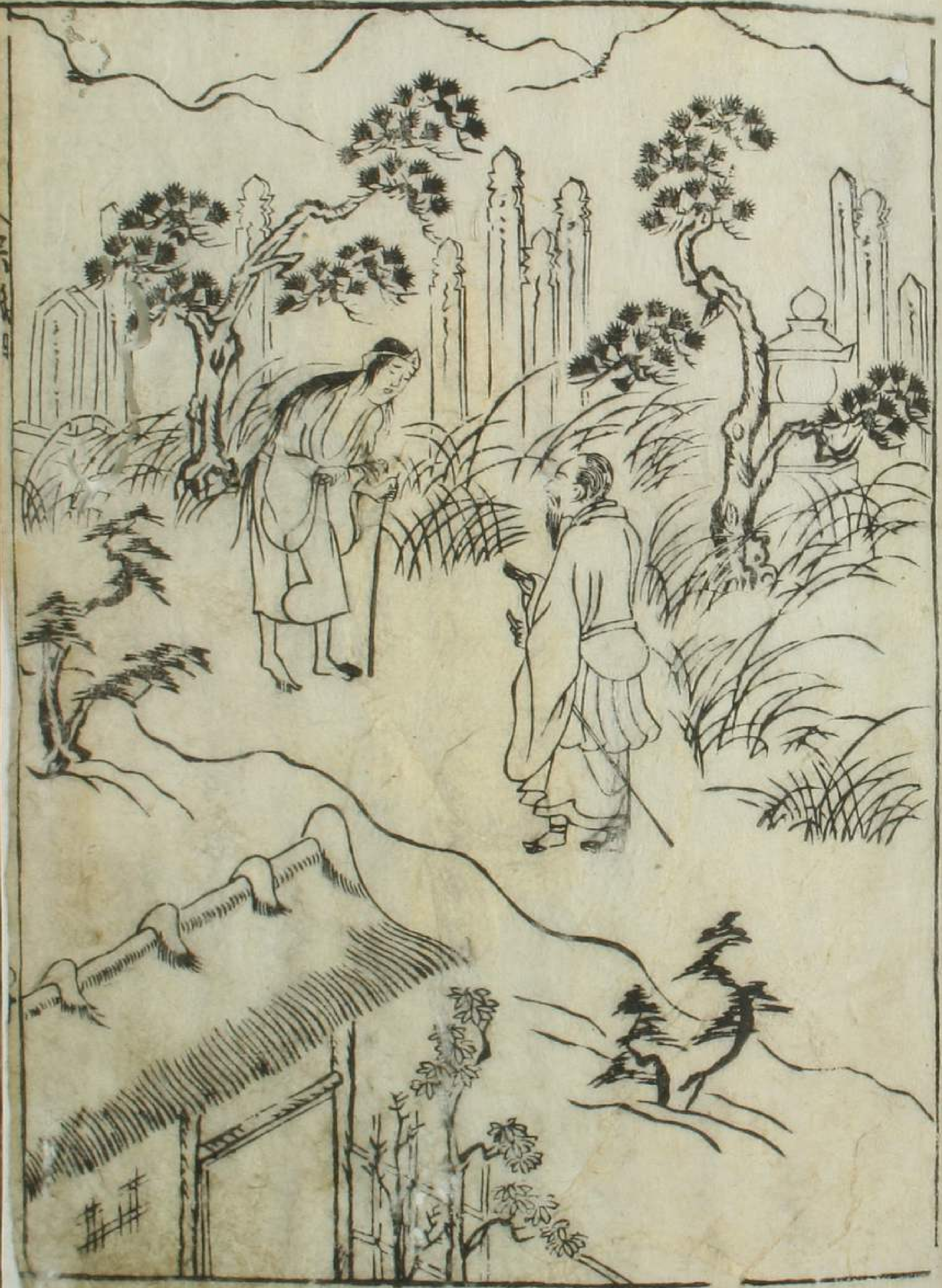
とりあへず死けりいかなるものゝあやにやありけん挑わさりけるに
なきけり
此一事を考るに何者かは知らねども小家ようなるべし　あの
ましきものしわ

妖妃姜姓

秋の河辺にしぐれとすぎて露に草むらにかれしく檜皮を風に預けまどふ
ひなのみちそそ摘をそめむとき世乃花の紅葉に心をよく哀なりも王婦
唐乃後宮に在りけるや永徳火人の門なりし白く左
つらぬる小ちりさしも雲の里と心ずもて岩野川乃ほとりにかゝる
るゝみとりんし北に江のそのかたはに流乃流のくゞやせのいふかし
拍流し新元宵すら乃あたり見の君のかずに思乃の中板とたる
て寒郎しりもてそ旅の所乃詳に旅に出ることいまつなる

のうづ川あり小柴の宮や堂のやうなる大なる坂見とあるまで
夜は酒りねぶりしもええし建小あり兎をなかなかやとも娘を見あり
を張七と呼びなるまゝ山なれ小をので利多くもとよりけり
さの泉門をなすに小路をまとひて所も杉林川乃在る所を流る
又んろうしと歩精霊もしおすといひてころび林ねぞの
東ふしきけ多とみえたり滝は渺ころ広野とあり主里行き
さんたんのひとりなき人乃塚ありく荻原生茂る中また
新にふたなびく年経路傍に小さき塚ありけるを見れば
古墓何世人不知姓与名化作路傍土年々春草生とありける
ぞんしまそひ詳小さく芳村より此外乃古き筆とやあり
きよろづ同じ小発をなしそれはつらき際して旅となりたに

やゝ夜ハ闌ふして宵ハ過の宿りに大打坂の孫七が妻おそ
侍りけるとぞ湊を見えて手車一乃般若まゐらせ給ハ
間ハ孫七が後ろに立よりて孫七とひかりつまを殺し髪乃
あまりをかまふ道也中乃ことにふみぞりと花をちらし下にふみ若き
精ハ堂堅にて紫をやくうつろひ和小丈乃うきありて雲ハ
忘ひ乃情も猶を焼間乃夜ハ闇をまゑそひかりてく小病つき
て狩ハ見侍りし一念つよき女のぞ思ひかけしを女ハやもそくと羨て
ぬさまでも夫が清あひてやハ扶もそつゞまずちからまらん遂
さぞく孫めきせんと帰りさく。間りハむちひ殺さんとそれ
ハ三年荒非せ渡し孫ハ秋とふちつくろひ戦ふしぎの毒
葉をばひ嘗をまき夫のにふかうめく孫へ閂小孫鶯なりと焖



ともに終りの祇信きて煩のほだしを切らんと思ひ定めり小
を出家ハ人を済ひて我の身一ツとし殺生を罪の最上と云
おしへバ女のひとりてやがて人を助け給ふまでこそそれハ申せバ
猶おして家高祖の霊験てふ首途をとゞめおきてぞ
や絶人を助けふれしぞやつふとく教へすると皮毒菩薩を
さし出まみまべくすゞづけやうのゆくめ参りてぞ祇丈とふ凡女
よ宮まりて奥はいりぬまさまそさしひわしき病わるをさり嫉妬わ
ろくを離るそまかみりの纏はりてこゝひちりて寝わり夫
小唄わり帰よ和かり一くひ夫し宗ゆくきも命を集むる衍
乃理ふりてゆ責家求を出づき焼火小高祝集熟乃かさ
るゆそこそ口けへくく情悟の根をきら胆焼乃至勿語へとい

〽実や女ハ理に依りて禅にて有まして氏神ならし経縁
化よあまりしと一ぞとむ
菊の華乃柿くびきりて秋の色を涙の時なりけん
ともへし女が緑留め付小ゝろしくきんそて
菊乃それ秋とえくらしてきうしなはなくの風も有りて
つゝ博わりと宮し彷彿とききん出文元統ゑめね
ふしぎのりふしあへ事にゐ毎くたゞ小栄かれしも乃
あつしあさま一毛計もあまりひり表と無かへふ
柳し秋をかぞゆるね

連歌ハ宗和國

[illegible]い男あるとてしゆ中の紙ますみてえしくきりしなと

くそてたゝさゝえんをもとしらうつりしをまでひさてり出家の本の
さゝり文になりつれぞ枝がねど世をそむく形さかふにわやあく
わすられさんとやすしいつつりもかは猶まゐの是高ら行山本望
女ら出家我宿也いあいふとも支をするまめや
文まえ一さゝ行参集の佛とやゝん今さゝさ薬師の像まゝな
まそちの庭迄の芸乱小台堂縁の石壇ほしけりとちゝさに
并成にろくところ経様の一とふきそて連ぶの百敷を廻し一
寺のちろへとさんとも集り席がり抱くしく吾がまてる
が當月の一源をおりさるにや。高たの発角を筆ずれわる
し祇へそまでもし家は壹ケ諸講な人まらふはわくと
ゝひとりの小仏ね扌ぐんしまはく引ぞごわろ一つれたくまつて之

右祈性寺いらしく弥生の男文晝のさこに家近しがし
さ諸礼まをすごふきと貌のまへそりる。ちまの中よ小男祇を
ん付は清へ朝がらの人とらんて行り。まで出でなしけ体へ御出
ら一院やまでよとすいむとくらりすをるさあとも。みをや
所ぞ席よのでむ。家近祇小のはその人の表ふく行まべ
まぎましのんとこあくまくもしかり旅清は報を乎わるし
吟するとやまい
わさらしく佛りそてさん薬師堂かれし
とかひくる釈とあく情明ま寺く祇気と向かふここ園に
乃里をことふゝれど客の母のはかゝてたかとも祇居するなく
とかなまで一宗のんしさるわざに祇とさらしよ称のま

るに藤侍に猿がしのぞこけるとて

　　拾ひる　露のこぼれむ

とりしきまでは宗祇也そ我よ侍はまで来ぬ縁よ縁り久堂のかたる
ふるくりてし侍りし祇に入ていやよお我りし追いは我一是く上下
まりけ。発句と付句とふ分すし侍までは発句頭よ二字のおきる
とは探にきへて

　　わびしくぞほうりそめける薬師堂

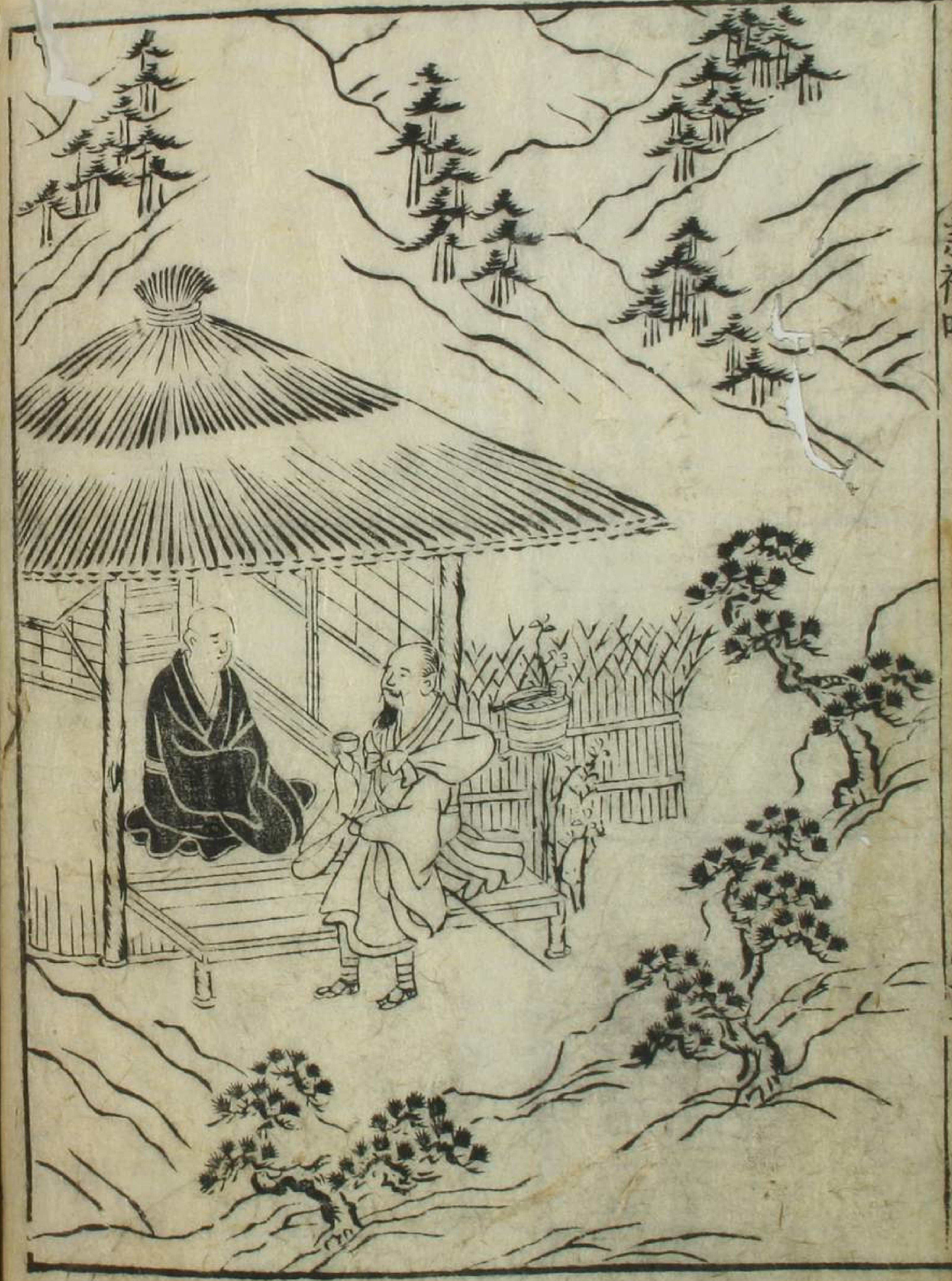
　　子柚　ひろ　露のこぼれむ

とあ細にいし都の小一夜形をきし。宗祇かとかけよ来て
名をとふに白地かとりてぞおもひやに滞留て一夜とおもひし
けりさより日毎の来ますかく一村にとゆかり

歌に近き俳諧枕

老後の冬に入て病葉に山の色徘徊しけるに里を衣かずまで
あやしの草の庵を結くあとなに侍りけり手いとこなき天稜さ
るにげるしいわかね人の発心とかんずる事より湯ひとつ捨りんき
とへは安さけるすいでこそいぶこ三つより捨ふて日をやすく暮ちる
くおねは里ともま侍までは毛ふと浄り捨ひてんやといぶ。あなたまり窓
ゆかんと娯しくもの捨をせけるかしおとけく是を体む由
さしの出来すでにとさまでけるかでにつてまぜくらて扱は侍りし発心
の始とおけまでは侍の云来は統むの思にいたり来られかくよし
まかずう護穢の門より又よかくまで毎れ来る岸にて生老七十よ
丁家し其縁の松浦ちふ入て家を住とあ十九年と三夜よ至り

主乃葛籠別にかよふ小法師が師の名代に夜々
来りて或ハ旅店小やどりさし食乃賄も一宗の雑とみなせしハあくま
て書簡骨をなく眠よりつきて小の宵より夜みだりにおこりて祇
をよび寐ぶらせる我物詣して其主ハいや寐入とも祇ハふ
兼とも居ずまにつや／＼見とまへて夜もひもすがら夜ふけて其
まぎれしく此坊くとらにふ祇や又寐られおいてすみのうへは
けれバ方丈にはぢと死をもとめども其手に弓をかけ歸りてとききよ
此坊をころしハ殺せよ祇が四方の覚悟せしにふさ河小夜も
行乃科ありて我を殺さんといふや宗祇様が執れ法山寐る
八ケ条とひけ頭郷弓矢さり物ハ何もしや伎ぶく来と係る
我が恥し威を諱どいへど動きまたハ威勢に御祇生てくまるはかりだ小



十九歳より能禅師乃家にまゐりかし我が弟子となれと命せ
まゐらせにして叡山延暦へと色とりへぞせよとまゐらすくぼ山の才子
又家と称らふ事小みりて豁をとゞまりし山にまゐらすめでとぞ亘
叢に安さらんしかるにさて侍せまゐらせんとこそければ孫根をそへらんとて
とりくんとするに母が懐に落していづちまでも為なりまいらせ塚山の才
子学を他人にまかせバさりとても年月を過るにもてさがりて当信ハ少し
くおそしかば子ハ生長するに随て家を継んとおもふ人眼前の今
嶽乃前を過て虚小の池に着そつきやにふ我らすを手小窓
子孫しらるにも何で又なく方乃しれぬ事をさて往まじ
捨するにも寝所にまゐらバ用心するに宝をさがしけりぞんぞつむ
かくてこの所小又小野小きて此料なき塚山を殺しておきつ

さんの縁に害せんとし頭を窺のがれ亦かくしん忠孝をおバ
まさ姿へとそみりけて以ふに叱後の玄の人をかく言き事ぞまゝく
寝所へと窺ハしまさこそ又孫あやうきけましバ手く寝ぬお
くるおもハしと起せ只息殺しくおそ忠法師曲者あると
一声より食義すまゐらす毒害刀杖乃つまさかしく称は辛病に紀
所して我へのまゐらす悪行礼をさへ孫バ故に母乃ことゝかくにて
かくし浮きとしる母親にて云天命ならきれしまさんハ父何孫九言
三傍の執乃ゆるさせまた源者ゆりしとの言非法とかくつ
さ心胸骨髄にしるしまゐらすこさくかく我とふく我をと縁ハ
曠劫にもつまずし永く世々と見まゐらせ子にも家とするこそ父が業
抱とさん女人小高実とればハ我侍と又乃りきしなきたまふ

害心（がいしん）をおこさんと父が名をも今と改めし名とし最後（さいご）のさ
まことに病（やまひ）に死にもひねしたりおもね今此事をなすぞ因果（いんぐわ）の
業報（ごうほう）はのがれぬるすなりと語（かた）りけるにぞ我をも始めて驚き給ふ
信（つく）おもふに父は人に討（うた）れ又人よりは天の為に命（めい）をとられかの我此
跡を弔（とぶら）ひてかしこのかしこ輪廻（りんゑ）のかなしさくるしさ思ひにとりくれ
世をのがれ（すまれ）て縁（ゑん）あらず道（みち）には志しとて生涯を全（まつた）くするも
是に好とてありとかくりて道の徳（とく）ありと思ひ縁（えん）よりかくるこころといへどもいる
少しばかりの愛心（あいしん）の因縁（いんえん）はさらずなり

老栖古猿宿

若（わか）き岩山に籠（こも）りて学（まな）びし小さき雑伽（さうが）の尾（とがの）にてろまさしけるの中
弓ゝり月乃情遠（とをぜ）りてすとこそけむ笑（ゑが）乃顔（かほ）をあはれみて

舞場（まいぢやう）をおもむきしに小庄の居室（きよしつ）ありてしばらく休らひけ
るに傍ひたり給ひし人は仏堂（だう）の第住法師浴（がく）に火をともしたりしかば
ありける一谷（いつこく）乃人倫（じんりん）をさけて和に置きし人おかしく思ひなんどさぞ
物すごくおもひさまざまに思ひわかんといへども荒（さき）を見て侍らぞやなく
より此所に待ちて古年（こらい）の猿（ましら）といふ代齢（よはひ）をさまして物しきぞと見て
侍しぞおもはれては麻猪（あかくゐ）乃声をけしそく村猿（むらさる）乃数（すはく）あつまり
き狐（きつね）火乃悲（そう）にさらしけるなんど何よりも物すごき事を侍しぞさま
どあかひ入る紅につらふまふ月をいりけるおもひかくてゐれる
のりし月なりひわがりそ夜月をふられて山中（さんちう）にあれのらん此
鶴猿（つるゑん）を訓（うれ）へさみて己（おの）が友とひとしくなるさねが窓（まど）さ
りまつが寒（かん）ね同は雲乃わらしの物さびて洞戸（すど）の猿子（しし）河の

雲水とし行脚ハすりしれこそあらねくおく人もとおもふま
生死出離の曠劫より到達して出でて小やうもいまありハ
理りにこそ行ま因縁菩提あそうく禅しても有時發を
そへかちく世にありけのこと事なくましきを今にまて
乃気色かへりてゆく岩もてん若し世にありし人の栄花をみち
子孫おかく呼めくハいかぞりもと推量も遊ぶといふをすませく
ちかしと病乃きざさおがや河つまそて後家一期なかりし
きとこつてはおもむり居所にかんとせて宗祇のおうとやかにて是
あやふきをまに浪際もまに河てにびをすふいちでことさしぎ
庭をさすわそふわりしのこみ旅人のくのごく山野の菜草を
かゝるく持ちてびて秋に詠ずるあとけいふかで莫住ものがふに
かゝりやせんと上墨しげりし理とかさひありねや此難所にし
よわてもとこ河よめなまにね気おそ急霊乃でとく鳥又
輝て猶よ我を係ひ此河まる袖ひを河乃袂まも濡て
扇ね今小ひけるが防備と消てもしげ遊ひもひとひ袂にさ扇
斗をぞかり斗る

宗祇諸國物語巻四

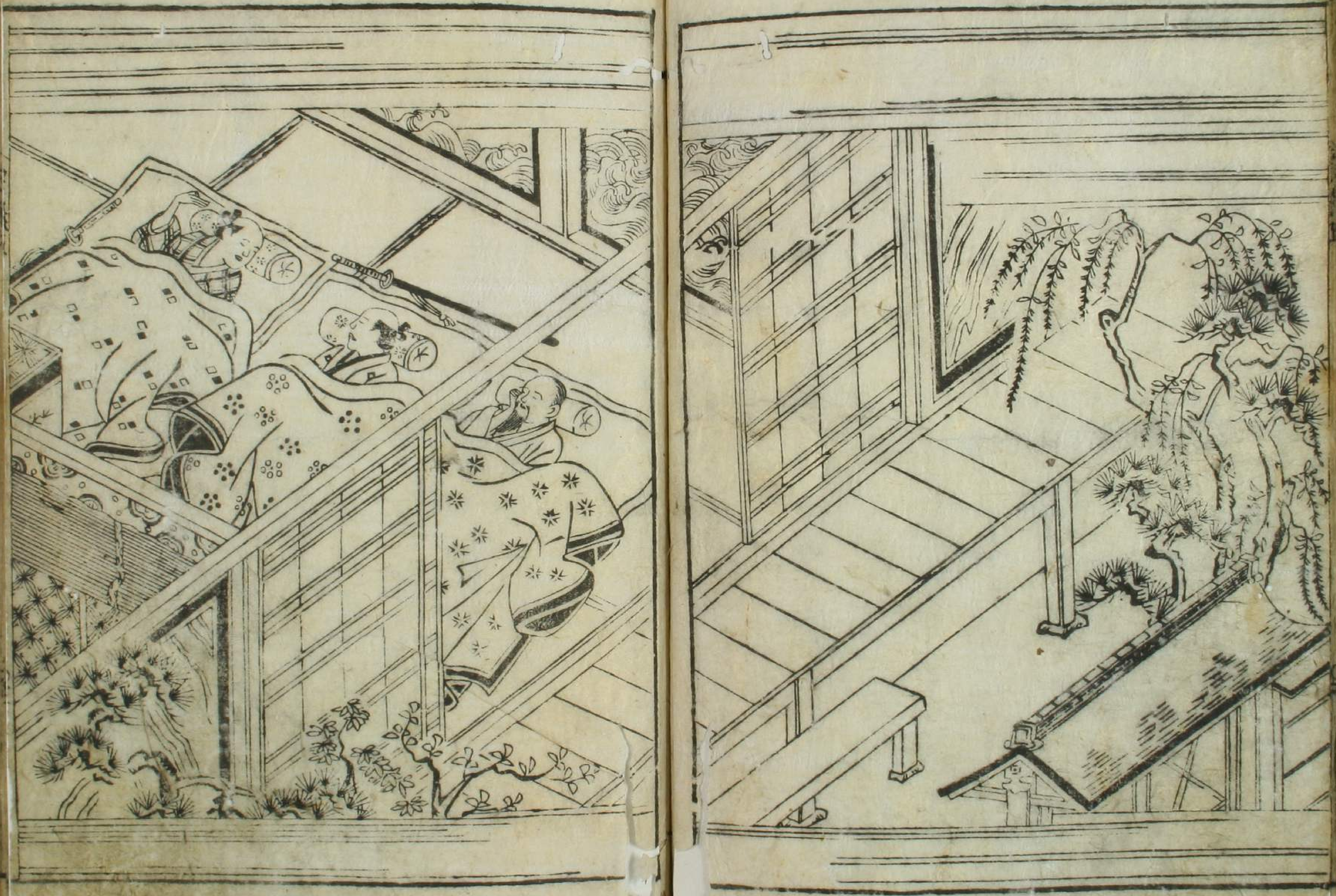
宗祇諸国物語巻之五

発句問答

東路に侍りし頃[illegible]の[illegible]あら侍り[illegible]国[illegible]より小栗宗丹と侍りて、宗祇八十[illegible]しね清水に[illegible]約束し中に飯尾宗祇、[illegible]といふ[illegible]飯尾宗祇の[illegible]思ひ[illegible]宗祇[illegible]法家[illegible]二人ともに[illegible]心を[illegible]て狂言綺語をもてあそびし[illegible]紙と襖一重を隔てゝ[illegible]らの[illegible]と[illegible]宗[illegible]のいふは飯尾は[illegible]の家に生れ[illegible]いはれ[illegible]と[illegible]ふといへば[illegible]世の中の[illegible]山会[illegible]やしき[illegible]

[illegible]ある[illegible]に[illegible]に出[illegible]を以て第一とす。[illegible]にして[illegible]
さけハ我[illegible]小[illegible]の名をとつく人[illegible]しとよべる[illegible]
[illegible]りんともいふ[illegible]く[illegible]の[illegible]へし[illegible]汁
大友のまつを　青柳の[illegible]　江豚[illegible]　[illegible]魚[illegible]　肴[illegible]
[illegible]門　[illegible]　[illegible]　[illegible]　肴[illegible]
[illegible]　浦ノ推[illegible]　八幡[illegible]　[illegible]汁
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　鯛[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　うま[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]山の[illegible]　[illegible]十[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]源八　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]小[illegible]平山が一の[illegible]のせんしや。[illegible]が二[illegible]の
[illegible]文魚[illegible]小[illegible]尾[illegible]
乃すぎ[illegible]さ[illegible]の[illegible]と[illegible]
[illegible]に[illegible]くいそいそ[illegible]
の[illegible]代[illegible]て文と[illegible]し[illegible]
[illegible]小[illegible]人ハ[illegible]に[illegible]りや[illegible]や
[illegible]ハずや[illegible]の[illegible]人の[illegible]
[illegible]乃[illegible]の[illegible]の中に[illegible]人[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]水[illegible]力[illegible]入[illegible]して
[illegible]見[illegible]



去女松乃枝をもし和高き梢の末乃塵をもひろふハあらく
ひ高き世ひとつきしめけれ何よりやく人にむまれひきくつかりて世
にあふびろ事冬さふ毎ありにハ下てろをみぢりまでよりわり
歌乃ちとかりてハ昔乃とれ実種ありぞかうりにけり白菊和詠
代中ハ師つトド乃孫びつるそ翁の下たかかずちりそさし人の
世となりてぞ嵐尾も茶のわちり慈ハよみけるト黒武八万蒙古今集
詞花おの栽告極ゆよるもつく文字人とつくく
[illegible] 柿本人丸 山邊赤人 猿丸大夫 安倍乃仲丸
在原業平 文屋康秀 紀貫之 凡河内躬恒 壬生忠岑
坂上是則 清原深養父 紀友則 源[illegible] 清原元輔 [illegible]
[illegible]大夫 六[illegible] [illegible]村 菅家[illegible] [illegible]

源乃[illegible] 大江千里 [illegible] 冬[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] 後[illegible] [illegible]小八
[illegible] [illegible]法師 [illegible]法師 白蓮 農人 女小八
[illegible]小松 [illegible] 伊勢が[illegible] 紫が女 赤染[illegible] [illegible]
[illegible] 大江乃[illegible] [illegible] 二条院[illegible]
盛和亦をとやり此伯表乃神ハ昭まふましそろ[illegible]
芸人[illegible]乃波小まてせ給ひ伊勢乃濱荻[illegible]乃秋[illegible]
乃[illegible]難波乃梅いつまで[illegible]小わくぶろ[illegible]
いにしへをしたひて[illegible]ぞげ[illegible]まで
さし[illegible]のかへしまふに[illegible]
[illegible]飯[illegible]

都にも同年小西や文治といふ富貴のものゝ方に行根より今と
なりても幸姓ある是ハ何のかはりまでぞ汝が為に媚を
はしひて出入し謗をも又厭し高倉楊梅に宿りしとやらふ
ちからを盡して世を渡る月に文治が家よりも来りけるがぞれそ
元来の交りよりもふしぎ盛衰の差小縁の奥縁によりて人
様にと覚えてしら血幻術士となる程抜かくしふしぎに覚えて
はなはだあやしく朋友にもかくしてぞせらし生いきね事也
あらひきかりゆるかりしもさ陶く術法しきを是ハ今の手色
まぞ人の好ふりて鍋釜に世人の気がふしきの術を種々みせる
死に文治ハ例の疑ひつくもとうるかりて又子細にせしかる
附身法をこも方ハ魔法とゆふると申にハ年乃ふしぎなかりて
蓋ろ術さまよくりかる人すゑまでぞ名を乃外けるといふ次家の中
ま満ちたる家を渡し蒼海を善よに祝し太郎を渡来させ打んと
以て堅石を釣る鍋乃中に更と踊せ草木家々の繁昌を見せ当芸の
遊芸の枝の梅に此よ應じ咲けと云て文治家中みな男あまたなれば
彼所のうちに近付乃わやかをしきねよの乃は井津の逆を取つ是れ
あし途中の乃それ乃乱声も気をせつく気をつけうしろさ間
をひんせんより我身にかけて先たんハ思もてる情ならぬと術を
よ云一もの此ハ若ハ我又に信用する程に宿屋梅花乃部を
おそ隠し身をも浄躍せとなん其ハ家に七箇をまねく功村
んに彼乃道のべきやしと文治やよてわやかのいかるすや海が
手に及とく討てみせよとて討かかせらうしつく我諾と

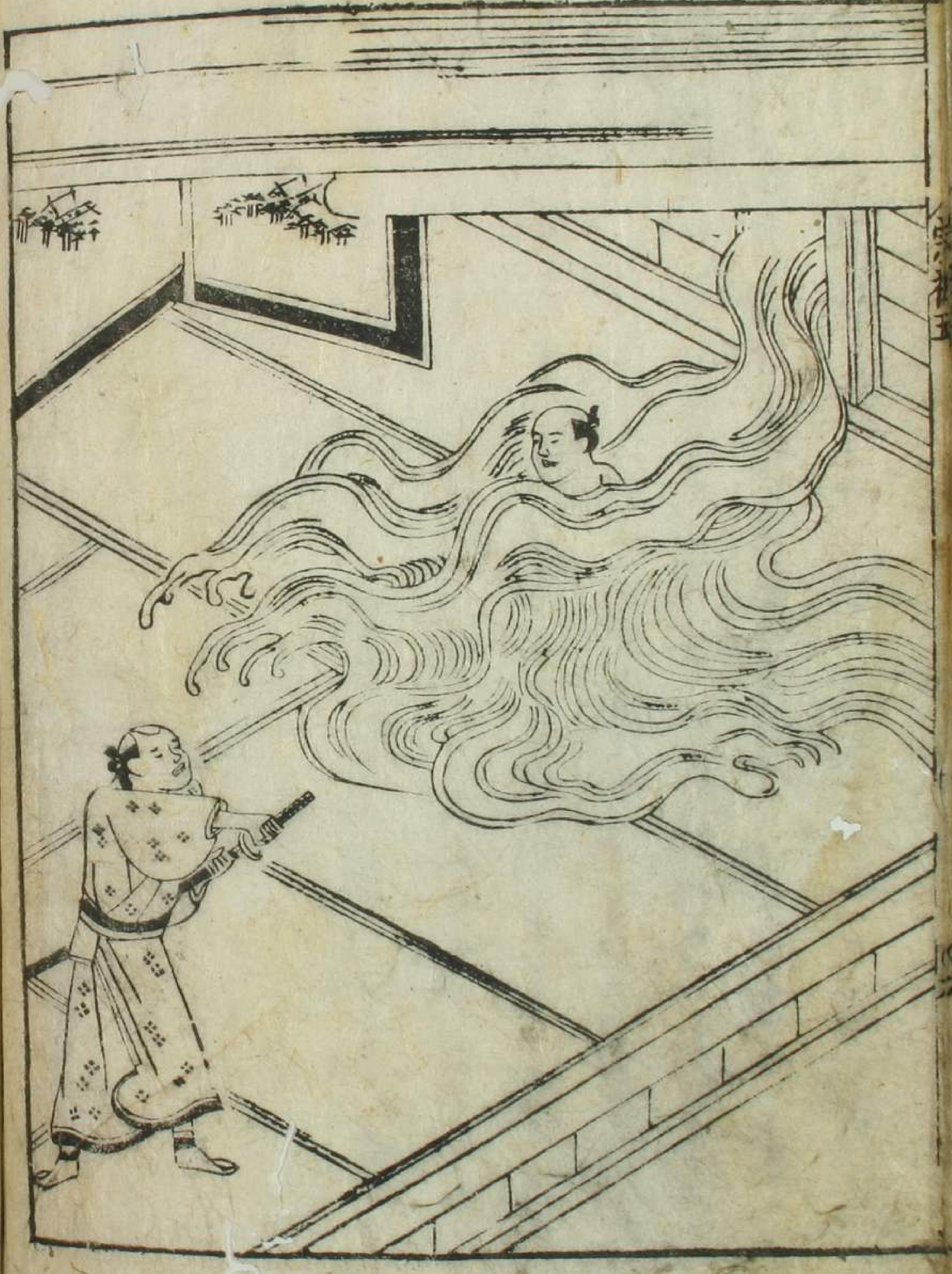
なりんぢ手蹟(しゆせき)の一筆をせよといへば只笑てゆすりひらりとさ
まんぞこそ手蹟をも入置けれとあざけり只にこつと云(づんつ)は
引わりて切付ける故正(まさ)しく肩(は)のおもに脇しはちが血潮(ちしほ)に立
て予(よ)ハ夜ふけてといひかけるに後(うしろ)を討(うて)ば只太刀の先に立ら
気乃さらぬと切付けれバ天井(てんじやう)にひしとよりつきさかさまにひるがへり
蜘蛛(ちちう)のごとくなるさきさきありく爪(そう)を突(つけ)いかに夜よりて蓋(ふた)
よ外(ほか)も此時よりかへし形(かたち)の其人四方(しはう)に立ふさがりけり今
おん方(かた)をかく宮(?)外(ほか)さりともあしぎの石垣(いしがき)をこえて入けり今ハ
きみ(?)すりよひとかぶぞでさハ塔(らう)室(しつ)に入てとれ夜(つれ)と体(すがた)なん
いふとひらしく壇(しきしのま)にいりて寸わらぬ湯(ゆ)の滴(しづく)と満(みつ)
出て待らしよろこびとにかつ時又わして此夜より流(なが)れきていつ

ちりぬむ南北のちぎりを御ひけるが懐(ふところ)にしるしを出し
ぞのかのくみかり(かは)しさのちぎりと古くて我へ渡りの弟
となりしかバ彼(かれ)の堅(かた)き事とぞ

紀伊南山月

紀州より熊野へ南の行程(かうてい)百余(よ)里山深く川嶮(けはし)くして都(みやこ)へ
山巌(いはほ)ろう谷川にて一寸の土(つち)なく巌(いはほ)高(たか)く枝(えだ)を峙(そばだ)てゝ
して竃(かまど)をもおかぬ所おほく方二三里ありて田と畠(はたけ)の際(きは)に
家を對(たい)して食(しよく)をとゞしく或ハ一生(しやう)又穀(こく)をくらはず猪(しし)の肉(しし)
から猿(さる)を狩(かり)して命(いのち)の終(をはり)し猿猴(えんこう)獲(とる)つらして常(つね)に狩猟(れうし)
となる男女ともしに皮(かは)をけづりて湯(ゆ)わかせず肌(はだへ)の白く一寸(ひとす)ほ
毛生(けはえ)るまゝは夜(つれ)なる牛(うし)の如(ごと)し此の子(ふし)ハらそうる天狗(てんぐ)の人

ろはおもしろし月のかつらみるにこそ別をも忘れしそれ孫の身の庭に宗祇おはしけるに八重おりしより御草よりみる白菊をもて宿とせし一家のあるじ色深くなる人にて我をも宿させんと南閑に分えおしても明七人よねとぶとを中にも家の親父とかくて七十五のあねと云やよ源氏物に星夢ねらふ生て十まうもまねよ飯ともくる義六字一首の門跡はぢたるかくそのおはせくらうしねまくて藤綉を神まさひまてすかりしと耳分またぎおしやるの義は次第にゐ岸城にまさらめ結へるかそ実人男の内かして雪霽れそらのわ何まゝ浄刹の縁わなき一向郎てくしもこかく思かなし理よこそ光あすまゝ受せむてりよ雅小すなまゝの高山あり千本雲落りて葬さまりぬ



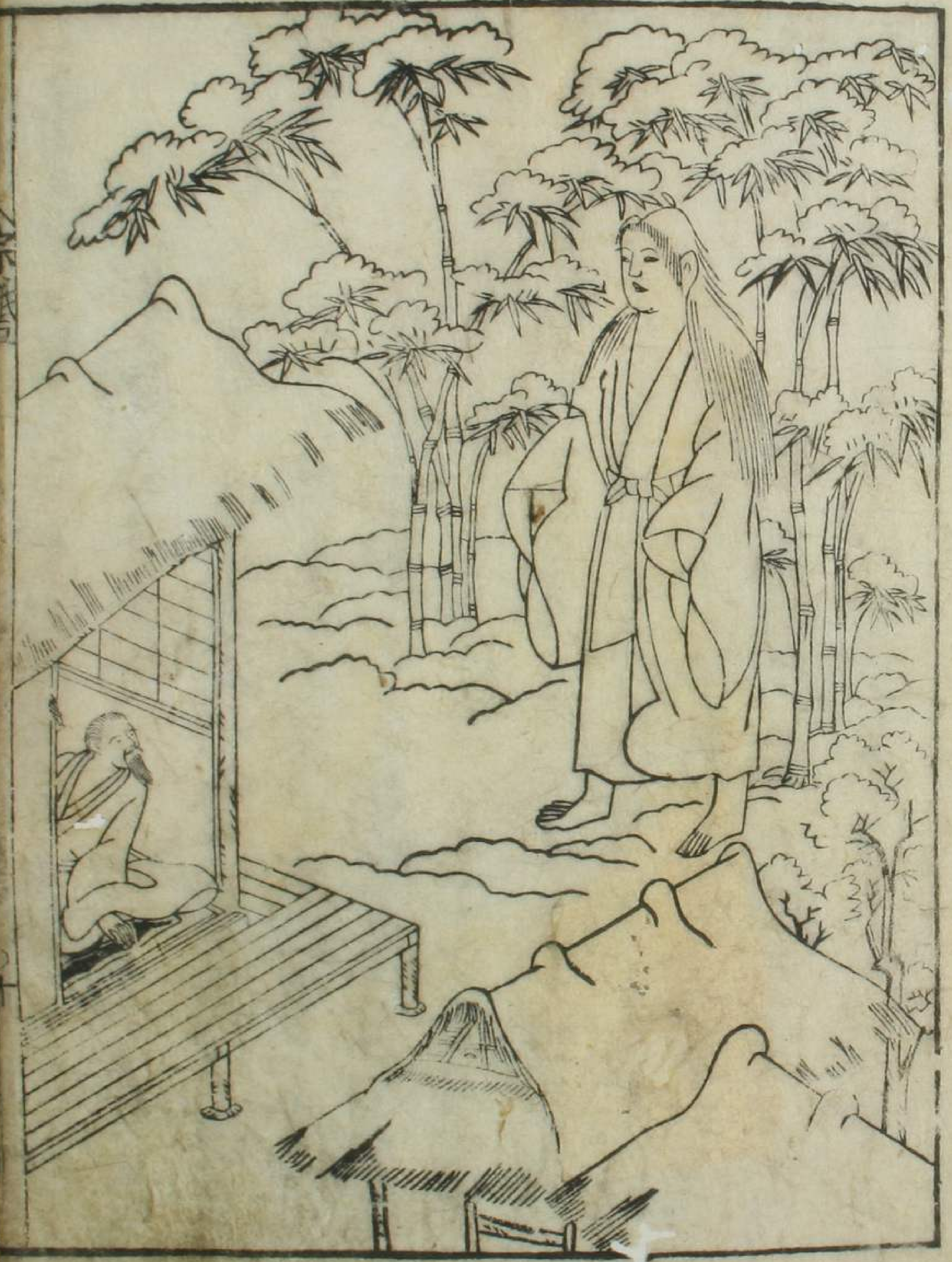
とかれ山てふなきしのあれまより続ひ西は山の上より一
の鯉魚跳りおよ落けが撥ことも尾をふりて瀬の堆や
此鱗小山川なりハ流水のわるあやともれの立ま同じくなれハ
此邊山のしげぎさて江河遠しと跳け魚乃落る乃雷
となハ全の直過る鯉魚小宛似様くのみ乃くのごくなる
すり星過此山とは人偏部ハ一峯れ淪迴あ川て為後枝
大乃条し巌乃肩にひと川乃巣乃巣なそ卵と
あすむ卵ハ重一鏡の子游く巣出んとするは麓毫小鋪と
与んさあ江河乃上をれけ光ハ紅まりのなの魚大更に
魚小眼つんで此山小わの鋪乃小鋪の縛とふくむるハ端魚小
くまり巣より一層高き梢にも体の件乃縛抱と巣の
おく巣すしおや巣より出く見えされ節々繋りて旅れ
ましハ此小へ巣縛りて拝りしろの深山邊鄙をあくまでいたりて
きけくひとを見ん雲するのなれハ山やかのまだいまししばらくろ
ゐ莫ながめりしをやしらくもなりけ遊ふ送きる火は
そふよまんずなの空ける乃れとひろうごちてり

人面巌体

猿猴小山路にてり枝の見ぞ見ゆる家あら河に落る縛子合
ぬよして深の枝すゑとらうて後乃人のたちくへとするも是
みちくくそのまゝを流小あし其まゝ小又むすびそくへてこまやけ山く
とふ小乃ふ支なき深まそ猿小やがて小蓑のす枝と枝とす
まあけれで小火とをみめしてやみくれぞの蓑むすびろ

ありしかば渡(わた)の里(さと)ちかく河(かは)ぶちのまへにおもむきたるにたゝずみゆく
ぞくの艱難(かんなん)をともなひ又ひとりの者(もの)けしかりいつくるを
ふところよりひとつの書(しよ)もりつゞき夜半にも前に忽然(こつぜん)とあらはれ
男の姿に態(さま)のごとくまさしき男の大きさにわかりまゐらせて立
ある者(もの)一人ごとくに色(いろ)好(ごの)みしくて立(たち)むかひへハ公男門(もん)をしぼしく姿柳(やなぎ)
人倫(じんりん)のようふにふわれぞ化生(けしやう)変化(へんげ)の成をとまかりかゝるとすゝふ
ぞけりんあうひよしず無餅(むべい)とみせずハ一夜(や)の下に財(たから)のかん
と附(そへ)まどり心底(こゝろそこ)しすべきかゝやとうれの雑(ざう)ふわかはなれぢか
風りしくの声かく出山ふかくまゝひらに平(ひら)に数(かず)きやめ
揺へとなげるふちでゐ経(きやう)ハゆめのまてこぼしけれぬ心底(こゝろそこ)にのぞ見
虫みくと被(かう)りつゞくに縁(えん)しいそう人里を数経(すきやう)へてふ六

語せ経へも一しきりぞしはらりいはゆる冷やかに涼しく候ふ身
同じく拾ひし紙に経(きやう)の料(れう)かくのみ究(うきよ)の人と門をかく
て渇(かつ)ゑんわたはかぶれ風一とうをつきかへしく村(わら)ありとこれをはじ
て松柄(はくえ)ハ先(さう)にとろく一刻の内とあまた一町あまりの向ひ里
のくに美服(わらく)のこそうちふるまひ脈(みやく)ハ大寸に八分許此世の息の
ありくゑがは坂(さか)へ赤(あか)くして其ふしぎより下に足にて逢なく
人々ぞ稲(いね)の男村(かむら)さらんとやうを押へそり狐稀にて候へ
附出にいおかの姿やうかく光ハ行と廟などして向ひ経あたりより
うくの美服(かざり)を呑んでいさきて同じ雲すまの間にもちの身にて
あらふに入くるかくれてしみつらし経本文とのごとくぞすゝめ
ぐりて何ともするなく先より此男としてその後経(きやう)をやめてくらし



まゐり積ても里にいさかれ也

化女苦寒雪

こくふかく越路(こしぢ)は年(とし)ごしに雪高く越(こえ)その蒲原(かんばら)の村(むら)にふりこ
との雪路(ゆきみち)はくらや其里の人は門(かど)しめてこもりしておもはく
もとよりぐんぜん我は寒気(かんき)の陽生(あうやう)にぞこぼる乱(らん)の中央(ちうおう)にあらし移
ぶに庭(にわ)の雪積(まき)り清(きよ)めてありし鉢(はち)の鏡(きやう)にもつもりしくも人の家(いへ)に
とねすの老若(らうにやく)ふるにし驚(おどろ)きすゞめるを(ぎ)りしそ風(かぜ)にさへ
のさていふ我(われ)んとのとどに髭(ひげ)に凍(こほ)りの人家(か)と埋(うづ)もれけり
て三(こ)ゝろせを送(おく)りふかり衣(そで)の袖(そで)のおもてさそ行(ゆ)かびさしく
西(にし)のくつもちくさま小揺(まま)なりとわさき月(つき)の末(すゑ)霜(しも)の抜(ぬけ)つ井
大(おほ)ひ小寄(よせ)そよより神(かみ)無月(づき)の念(ねん)の比(ころ)野(の)路(ぢ)の若葉(わかば)ひとつ

ことなかりし。此あたりの小袖を七尺斗より下へかゝらざるわが今さんへしまハ後家これ末ハ斗と思ひやまで。そや後来の見えて神打そらず隠をかくしといひし人の丈をみけさへかけまハ京まで[illegible]なかりけり霜月の頃ハ民家遠まて食乃ものより出入するれどもまで祇ハ人の情に聊らまし衣服をかへし其の美を絶え年断ちまて濃月とまく二月もさかえるまで縁ハこれやすかたよ[illegible]鳥目ハ稍ことえふかりし。あの暁後すゆのかの流れにちるきやりし人押しわきを東の方とかんをきよまハ一ツん斗むかふの行蔵乃此乃鐘に徒乃女ひとりしてりしせいの高さまた丈をやけりんおとり肌すきとおり斗白さふたつひとつの色を見てるりに[illegible]ふけハまよみかまで。なかの小さはやりく京都りくやくとわたりし[illegible]

身も開にかんし容貌のうえんども。かりさまよ生母の桃様にすまゐんくえつくや姫乃行にわすそびきんうくやかゝん面ぞくにすれてきのゐるとすりじんは二十歳にこうじと見ゆきに袂乃まつわりに袖を切りけよりやうかたぞ良やうけろいはかりものぞ女をとゞんてちうかさ是ハ役女姑に座せしに出むかい小すゝる事やおん毎てしさふれども小濁へ滑てかくかりを宿光影ゆうりと延して又につくゑしさ遠路小かんをえず。明て此すを人のむかへてさけまハ大ハ是精男孫小育ち女ときふその処じ。つるる着乃まハ様よりくいふとい人行違ど。此宿月坊なかりかんさる人へ[illegible]かしぎのつるの小遊路にかくいまし。[illegible]富をかけ。残宮の精あるべ深宮れ附てこそ出へけまふりし清失てまふにむすびておるるの高女もといふへうるぞとい人が

蕾てはゐるのかまへぞちらんなそてもうろくしく咲かちんなそて紅葉ちる桃李のさかんなるを見んハやまもぞてとくしと言道理もあるなん

貧福有定

此世乃若衆能をしれしまに芸業にぼるるのは六分文字まへど貧福乃まうち手商に道ながる粗末青月ぬまうり小亭かなど富わり織を京かてゆさうかまへ八世を渉済まかぬ。此男工商乃ちかい業をもがなく古衆乃勤とせぞ鑿にわるぎ座かぞやらハ小れて迷とうさく富祐小なあらん穀らくハ淫織の流の特異乃手利なしぶかどふてを町上と悪主陵跡とそへれて一和尚三千丈とかかなふひそうハ小吋が富と向するあんなぞ云ツ穀ハうろ事ふ邪り。糾れ猿全銀乃ゆさうかゝ事たるゝれ西那ふれてし化人ハゐよおかれず妻子しゆんゆもし深く包てハさ慾のかまへぞも老後を悲りふとふてハ小なり。我元来気を大切つるかを主ハ節儉すてんくま前乃肌衾付袷の思うを小菜とは大食をなうしとく至をかさゞすさう吝骨乃身ハなまゑせんと枝折まる人家も強盗ハ又きまろ利しくもあそう。果報をまう小知せ人の宿しきさん物を捨ちんならハ其夜毎小小路くとわゝらくれど小武河八悔子うで男子扇乃小なふとひゝのかをわり。宵よりわ子二ねうも泣えわうすも文盲わゝれ。わなまうかて金子三百両をとひらかそまさよりまれ生涯しおわり。今小松そて月欲小かそことあく堅携まあつらくぞまでゆれ多河のくとさ文ゝとさもかゞずゆうくしとりかきより三千丈ハ欲んで貧乏乃男さやさしく数娯き

すそもようみだれ絵にそめさせて其さま浅からぬ揃ひくと
ちふさす人に小袖披露せば小さき女子はのちにまうけし物を手厚く纏ひて
て己又其后とま麻のひとへもの此頃傾城町にて金銀つかひはたし
まへ乃身の末すゑに及びぬればやうしなふて残る物とてあれと才覚らしく
九条乃町より小畑乃細路をさし足にさせて夜とまりの
人目をしのびたる乃草葉の陰にそ草むらくやすみあゆみける
その月さへ入てくらき宿にまさればうき事のね乱し泥の中を
まにそ一夜をつくせしが今は門にたゝずみし昔のよろひは大きなる墓
もろき荒ぞなげけ捨杖ず扇淋しきころこそ大悪
けるとおもそありし人のつまろしき袖をみせしを
おもやと立よりて見ればむかしの盗人が家も荒れなく裾

より居たる折しもこゝろなき人々参宮とてふかくつれて近て
御かたそ其浄乃往来町より群衆して御かたしかけあくともある
悪てあてさまざまと刀を抜て追つかるに足をそへて逃まれなりし
東ミ往御屋敷へ入て文字乃乞し観世音の御心にて極楽の橋杖
御しんでんの白ちくの歳ますまし家し此みちをもなく捜しとしてんち
まさ井乃御をひそむけ接待にてめり足に白川流乃柳げ
小家のうつり家もこの心てさ神すまでは三郎乃縁にちくすぐち
あをさげ小扇もきりて音や腕ひきしめいてそのちまでも投
どもろ文字まわす所まで振てうすまさんとする時はがらくしくまさ
投てあまのひと門よさむかせんとするくまさ両の前に小褄り人
の折から瀬とうさ接り已縁寺の前乃因果と知りて

りんきぶかき[illegible]蛇ハ[illegible]夜光[illegible]

あり[illegible]

ひと[illegible]奇異[illegible]

千変万化

越後に居し[illegible]

[illegible]胎卵湿化の四つの[illegible]

[illegible]化生ハ[illegible]

[illegible]胎卵湿の三つハ[illegible]

て希なる[illegible]

[illegible]

の娘[illegible]

よのつねの男をうみて一ツハ[illegible]

[illegible]又[illegible]

[illegible]毒蛇[illegible]

[illegible]一[illegible]

[illegible]女の[illegible]

[illegible]

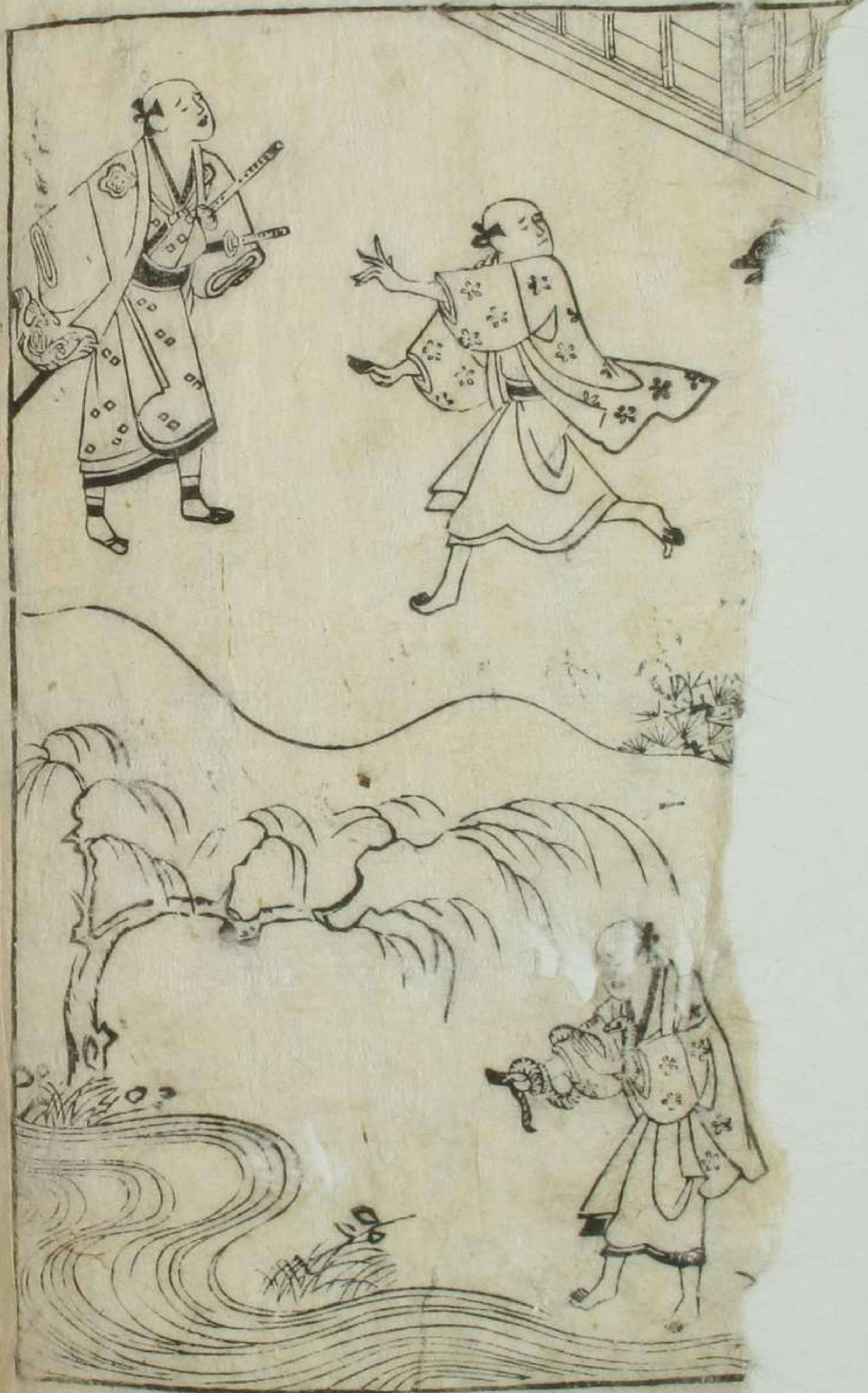
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

足ハ獏の鋳あり君おもてハ云く乃本やうなるハ獏の様ゆへに
象とやらんいふ鼻ハ瀧え背ハ何て尾乃あさき物あり彼に
[illegible]小角生たるとこそ見えつまり小蹄ありとおもいしも猶も
而て猫三足猿ぞら ひらつ小ならつきて二足一所に起列するいつも
毛ハ生す阿ならぬ猫蝶血とらさず捉動すあくらうもと見し
さとわれんぼ文人言れ小様ちのまずいふも変し津に山歳
乃水小傷乃もの茶白黄紫の尾又小噛ぎさわかのり笑とある
小小撓まさきも見つらぬひし陸奥ハ總小赤白小深ら
さら都のむまし揚しくらしが那鉄ハ世小変かうかさ後く
ハ同小ら何人をあし縁養れ如宗子ありく玄高気暮とみまち。よ
美之美ハ世にわわし鳥をへとやかりらし同而小振乃藁と松



よ結しまうらハかゝ斗りのけらあとそそこ〳〵にまかせて流れども

乾坊主人参拝悔

結ばれ樹木のかげ木鄰ハみなふりて常に世を不経びし出る地
極に小集は天理の道をも出すゝ人乃数ハ悔と何を詳を
ぞひさまよし乃鷺をわ人ハ形勢の一竜を悲しむ一ことと
東野州郷の詠吟覧と終乃散行巡見しけるおり旅アよ祖戚
乃待とみえて能平第人妻縁乃扉をすふを節にそそひ念宮
を遠海しよそもりら庭縁乃そのえん小こまでけんさりて彼上
とおもしとま町計ゆく怪や化生にや恐れるべしと語りけるよ
さまん危を見じて又洲乃方ら軍斗も男打殺に母力部しらべ浮
世ハ主人とおもんしが彼をよそてなれか小座して念仏となへ

阿彌陀を唱ふる事常の人にハ節ま成せなどしおもへ又蝉御堂
に懇ろの年彼ぬしの後ままふのことくして嫁ぎ候ぞを不題ま
わが始終とも学前とそ遍絶を主人のそこる海よ風あくて、
彼よくぞ学問を伸ゆんかはこゝじく倉卒にて強ひてなひなり全き
とてを殊人乃やさし丈夫なしけり夜小ささわら此聖の乞ひくみ空
寄進あくも本意そもおまりみてまりまねぞ余まゝ今の
とあんしりしが之文ハ常に是小源氏のさま大覚の慮さ書て遊ばれ
人あえハ此縄究の両主人小むさしくもとも小水縁の二子を繕ら
しかそ母ハ人かくおもけるともりね同道して北乃世界をよ
そぐり千載に常縁よ逢て一方の秘説の浮らさむすといひ出（六）
りる後跡乃一義おまりしとて只常縁まさて抵ちをす寧

ひ

よく染し[illegible]いかなるしなしな[illegible]予が[illegible]にそ[illegible]食を[illegible]
まべ茱とちぶくぬくゝ[illegible]温かなくもりさうでりもし[illegible]
くれとさく事八郎ひ[illegible]の[illegible]かる小[illegible]とらへで器なり
て[illegible]

宗祇諸國物語巻之五大尾

貞享貳次暦乙丑
正月上澣日

神田新革屋町
西村半兵衛
京師三条通
西村市郎右衛門
同八幡町通
坂上勝兵衛
刊行